

日本子ども社会学会・会員調査・報告書

2003年6月

日本子ども社会学会・調査専門委員会

日本子ども社会学会・会員調査・報告書 目次

はじめに

概要		1
----	--	---

第 部 調査結果の分析

第 1 章 調査の意図と会員の特質	武内 清	5
第 2 章 会員の研究分野・研究動向	小針 誠	12
第 3 章 大会への参加、大会評価	浜島幸司	25
第 4 章 学会運営、事務局への要望	中田周作	33

第 部 調査結果を読んで

1 学会発足時の「呼びかけ」に照らしての学会の現状	飯田浩之	43
2 「子ども社会・学会」の専門性と実践性を問う	望月重信	47
3 「役職経験者」はどんな人たちか？	原田 彰	49

第 部 調査集計＜資料＞

1 調査票と単純集計		59
2 クロス集計		69
3 回答された学会名		78
4 自由記述		81

はじめに

「2003年に第10回大会を迎える本学会の記念事業として、会員を対象に調査を実施し、これからの本学会のあり方を検討するための資料を得る」という趣旨で、日本子ども社会学会・第9回大会総会において、将来構想委員会（原田委員長）より、「日本子ども社会学会・会員調査」の実施が提案され、その実施が承認された。

原田彰（呉大学） 新富康央（佐賀大学） 望月重信（明治学院大学） 飯田浩之（筑波大学） 中田周作（広島国際大学） 小針誠（日本学術振興会特別研究員） 浜島幸司（上智大学大学院） 武内清（上智大学）（印は委員長）の8名のメンバーで調査専門委員会が設置され、調査の内容が検討された。

調査の内容は、

- （1）会員の属性の特質を明らかにする。
- （2）会員の関心研究分野・研究動向を明らかにする。
- （3）学会大会への参加状況・大会への評価を明らかにする。
- （4）学会運営・事務局への要望を明らかにする。

という目的で、30の質問項目が選定された。

調査時期は、2002年10月である。

調査は、郵送法で行った。会員に調査票を郵送し、郵送（料金受け取り人払い）で回収した。

調査票の発送数は566名で、返送のあった調査票は147票である。回収率は26.0%であった。

本報告書は、部構成で、部 調査結果の分析、部 調査結果を読んで、部 データ資料編である。

本調査にご協力いただいた会員の皆様に感謝したい。本報告が、「日本子ども社会学会」の今後を考える資料になれば幸いである。

2003年6月

調査専門委員会委員長

武内 清 （上智大学）

第 部 調査結果の分析

第 部 調査結果を読んで

第 部 調査集計<資料>

執筆分担

武内 清（上智大学）	はじめに、第1章
小針 誠（日本学術振興会特別研究員）	第2章
浜島幸司（上智大学大学院）	第3章
中田周作（広島国際大学）	第4章
飯田浩之（筑波大学）	1
望月重信（明治学院大学）	2
原田 彰（呉大学）	3

日本子ども社会学会・会員調査・報告書

発行日 2003年6月27日

編集発行 日本子ども社会学会・調査専門委員会

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7番1号
上智大学 文学部 教育学科 武内清

Tel 03-3238-3649 Fax 03-3238-3980

E-mail fwne3137@mb.infoweb.ne.jp

日本子ども社会学会 事務局

〒812-8581 福岡県福岡市東区箱崎6丁目19番1号
九州大学 教育学部 地域教育社会学研究室 気付

Tel & Fax 092-642-3125

学会ホームページ (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jscs2/>)

概要

第1章 調査の意図と会員の特質

1 日本子ども社会学会のこれからのあり方を検討するため、全会員を対象に調査を実施した。調査時期は、2002年10月、調査方法は郵送法、回収率は26.0%（147名/566名）である。

2 この調査の回答者は、男性56.5%、女性39.5%と、男女比はおよそ6対4となっている。会員の年齢層は広範にわたっている。若年層（20歳～39歳）に女性が多く、中堅層（40歳～49歳）の男女比はほぼ等しく、熟年層（50歳～）には男性が多くなっている。

3 会員の最終学歴は、大学院博士課程（42.9%）が一番多く、次いで修士課程（39.5%）が多く、大学院修了が合わせて8割強（82.4%）となっている。男性で大学院博士課程（55.4%）が多く、女性は大学院修士（56.9%）が多い。

4 出身大学院（大学）は、国公立大学72.4%、私立大学26.2%、外国1.4%となっている。性別では、男性に国公立大学が多く、女性に私立大学が多くなっている。年齢別では、熟年層と若年層に国公立大学が多く、中堅層に私立大学が多くなっている。

5 現在の専攻分野は、「保育学・幼児教育学」（16.3%）、「教育社会学」（14.3%）、「児童文化」6.8%、「発達心理学・教育心理学」5.4%、「社会福祉・児童福祉」4.8%、「社会教育」4.8%の順で多くなっている。女性に「保育学・幼児教育学」が多く、男性に「教育社会学」が多くなっている。

6 本学会への所属年数は、7年以上が41.4%と一番多い。3年以上5年未満の会員が20.7%とそれに次いでいる。1年未満は9.0%である。

7 現在の所属は、「大学・短大・専修学校の専任」が62.9%と一番多い。次いで、「大学院生・研究生」（15.4%）が多くなっている。幼稚園、保育園、小中高といった現場の教員の割合は、1割に満たない。

8 職業上の地位は、教授（46.7%）、助教授（27.2%）、講師（18.5%）の順で多くなっている。

9 所属部局の分野は、教員養成系（37.0%）と教育系（10.9%）が多く、合わせて全体の半分近くになる。

10 大学専任教員の主な授業担当科目は、「児童分野」40.2%、「教育分野」28.3%、「その他」26.2%と、「児童分野」を担当する教員が一番多くなっている。

第2章 会員の研究分野・研究動向

1 入会理由を全体的に見ると「自分の研究に役立てるため」（71.4%）、「最新の研究情報を得るため」（49.0%）、「知り合いにすすめられて」（46.9%）が多い。世代別には

若い世代で、「自分の研究成果を発表するため」(62.2%)と「最新の研究情報を得るため」(55.6%)が際立って多い。

2 会員が関心を持つテーマとしては「子どもと家族」(68.7%)、「子どもの遊び集団と環境」(63.9%)、「子ども自身の文化」(58.5%)が多い。逆に学会全体で弱いと思われるテーマは「子どもの福祉と社会教育活動」(32.0%)、「子ども自身の文化」(19.7%)、「児童文化とマスコミ」(19.0%)などである。

3 会員が多く採用している研究方法は「観察的方法・エスノグラフィ」(60.5%)、「調査的方法」(57.8%)、「文献的方法」(40.8%)であり、逆に少ないのは「数理的・計量的方法」(10.9%)、「国際比較」(8.8%)、「実験的方法」(8.2%)である。

また、研究面での学会の評価については、「多彩なアプローチができる」ことを最大の魅力としている回答が多い(68.7%)。逆に「方法論で課題を残している」とする評価もあった。

今後は「実践的な研究」(77.6%)、「観察・フィールド・ワーク系の研究」(74.8%)、「理論的な研究」(63.9%)の発展を期待している声が多かった。

4 重要な学会として1位・2位・3位ともに、「日本子ども社会学会」を挙げた回答が最も多い(1位21.6%、2位30.8%、3位21.0%)。しかし、全体の62.6%が1位~3位に挙げているに留まり、それ以外は「重要な学会ベスト3」と考えていない。また、「日本子ども社会学会」を第1位としてよりも第2位として挙げている者が多い。その場合、教育分野専攻では「日本教育社会学会」を、児童分野では「日本保育学会」を第1位として回答している。「日本子ども社会学会」を「第2の学会」として位置付けている会員が多いことは、学会のアイデンティフィケーションの形成にいかなる意味をもつのか、改めて検討が必要な課題である。

第3章 大会への参加、大会評価

1 学会への評価を聞くと、「子ども社会学会は、今後もっと発展していこう」(72.8%)と会員の7割以上が、今後、子ども社会学会が発展していくものとみている回答が一番多い。続いて、「子ども社会学会に強い愛着を感じる」(56.5%)、「子ども社会学会の大会には必ず参加したい」(51.0%)、「子ども社会学会から強い知的刺激を受けている」(47.6%)、「子ども社会学会には知り合いが多い」(47.6%)の順であった。子ども社会学会に対し、「強い愛着がある」と「学会大会には必ず参加したい」と思う会員がおおよそ半数はいる。

2 大会参加の頻度を聞くと、大会に「参加していない」が17.0%、「無回答」が1.4%であった。残りの8割以上の会員は、最低でも1回以上、大会に参加している。その回数の多い順番をみていくと、「1回」(25.9%)、「2回」(16.3%)、「5回」(16.3%)、「3回」(15.0%)、「4回」(8.2%)であった。

女性会員は、「参加していない」が少なくないものの(22.8%)、「1~2回」の参加が

最も多い(52.3%)。一方で、男性会員は「3回以上」51.2%と一番多い。

年齢別にみると、若年会員に「1~2回」が多く(52.3%)、熟練会員に「3回以上」が多い(50.0%)。

会員所属年数でも、「1~3年未満」の会員は「1~2回」が多く(72.4%)、「7年以上」の会員は「3回以上」が多く(53.3%)、大会参加回数と会員所属年数が比例している。

専攻別でみると、「その他」の会員に「参加していない」が34.1%と3分野中、最も多かった。児童分野会員は、「1~2回」が多い(52.5%)。教育分野会員は、「3回以上」が多い(51.1%)。このように専攻別で大会参加傾向に差がみられた。

3 学会報告回数では、「発表していない」が51.0%と半数ほどであった。大会参加の8割に比べて、報告者は少ない。発表回数別でみていくと、「1回」(17.7%)、「2回」(15.0%)、「3回」(7.5%)、「4回」(2.7%)、「5回」(2.0%)、「6回」(0.7%)、「7回以上」(2.0%)である。4回以上報告経験のある会員は1割程度である。

女性会員は「発表していない」(52.6%)、「1~2回」(38.5%)の回答が、男性会員(それぞれ48.8%、31.7%)よりもやや多い。男性会員が多いのは「3回以上」である(19.5%)。

年齢別では、「発表していない」が多いのは中堅会員であった(61.9%)。若年会員は「発表していない」は40.9%と少なく、「1~2回」の報告割合が47.7%いて、よく報告している。

4 大会の「ワークショップ」のテーマや内容と、「テーマセッション」(ラウンドテーブル)の評価に対し、両方とも、「よい」と思う肯定派が6割弱、「どちらともいえない」と思う中間派が3割強、「よくない」と思う否定派と「無回答」層でおよそ1割であった。

5 シンポジウムのテーマや内容について、「毎年、適切なテーマや内容が設定されている」が39.5%、「年によっては、必ずしも適切なテーマや内容が設定されていない」が49.7%、「毎年、適切なテーマや内容が設定されていない」が3.4%、「無回答」が7.5%となっている。

専攻別では「その他」の人々が「毎年、適切なテーマや内容が設定されている」(58.3%)とよい印象を持っているのに対して、「児童分野」の人に「毎年、適切なテーマや内容が設定されていない」という回答が多い(70.2%)。

最近5年間のシンポジウムの中で、どのテーマに興味を持ったのか尋ねてみると、「いま子ども社会に何が起きているか(2000年)」(24.5%)への肯定的回答が高い。続いて、「子どもをどうみていくか - 方法としてのフィールド・ワークの可能性(1999年)」(19.0%)、「子どもの「居場所」はどこか(1998年)」(13.6%)、「育児不安の構造(2001年)」(12.9%)、「今、学校の中の子どもたちは!(2002年)」(10.2%)の順に興味をもたれている。

男女とも「いま子ども社会に何が起きているか(2000年)」が1位であるが、2位は、男性会員では、「子どもをどうみていくか - 方法としてのフィールド・ワークの可能性(1999年)」(24.7%)であり、女性会員では、「育児不安の構造(2001年)」(22.4%)が第2位になっている。

専攻別でみると、「児童分野」の人が「子どもをどうみていくか - 方法としてのフィールド・ワークの可能性(1999年)」(26.8%)に興味を持つ。「教育分野」の人が「今、学校の中の子どもたちは!(2002年)」(18.2%)に興味を持つ。「その他」の人々は「育児不安の構造(2001年)」(24.4%)に興味を持っていた。

第4章 学会運営、事務局への要望

1 学会ニュースについては「満足していますか」との問いに、多くの会員が「どちらともいえない」と回答した(49.7%)。

教育分野の会員には「はい」という回答が比較的多く見られた(64.3%)。

学会ニュースは、現在、大会案内と報告、事務連絡が主な掲載事項であるが、研究情報や会員交流に関する記事を、多くの会員から募って欲しいという要望が寄せられた。

2 学会のホームページについては半数以上の会員が「見たことがある」と回答している(59.8%)。しかし、頻繁に閲覧されている様子うかがえなかった。閲覧者の傾向は、インターネットメディアに関する先有傾向が強い。

現在のコンテンツは、学会紹介や事務手続きの案内が主であるが、更新の頻度を高めることや幅広い情報掲載が求められる一方、掲載事項の責任の所在や私的な要素が強いといった意見が寄せられた。

3 学会誌については、多くの会員が「興味をもった論文だけ読む」(81.6%)と回答している。

また、特集を組むことに関しては、否定的な意見は少ない(8.8%)。肯定(「はい」)(42.8%)、「どちらともいえない」(43.5%)が、同じ割合である。

学会誌に対しては、内容、評価方法、編集、装幀等に関する要望が多く寄せられ、関心の高さが感じられる。

4 理事選挙については、投票意識の低さが明らかになった。役職経験者との関連で見ると、投票意識の高い会員層と、役職経験者が多い会員層は一致している。

5 学会費については、いずれの会員層においても「適当である」との回答が最も多い。

6 自由記述は、交流、大会運営、人事、研究という4つのカテゴリーに大別される。交流については、研究者間の学際的交流と、研究者と実践者間の交流という2つが期待されている。

大会運営では、大会の開催日程に関する意見が寄せられた。役員については、教育社会学関係の人が多いという意見があった。研究については、研究のレベルに関する意見が寄せられた。

第1章 調査の意図と会員の特質

1 はじめに

本調査は、日本子ども社会学会が、発足 10 周年に迎え、「会員を対象に調査を実施し、これからの本学会のあり方を検討するための資料を得る」という趣旨で、「将来構想委員会」（原田彰委員長）のもとに、調査専門委員会が設置され、2002 年 10 月に実施されたものである。

調査項目は、下記のような構成になっている。

(1) 日本子ども社会学会会員の特質

性別、年齢、最終学歴、現在の専攻、本学会所属年数、現在の所属、職業上の地位、授業担当科目。

(2) 会員の研究分野・研究動向

関心のある研究分野、研究の弱い部分、研究活動の方法、所属学会、所属学会への参加状況、本学会入会理由、学会に対する評価、今後発展する研究分野。

(3) 大会への参加、大会評価

学会への愛着や関与度、学会への参加状況、発表回数、ワークショップ、テーマセッション(ラウンドテーブル)、シンポジウムへの評価、

(4) 学会運営、事務局への要望

学会ニュースへ評価、学会ホームページへの評価、学会誌への評価、理事選挙への投票、役員の実験、学会費について、学会への印象・感想・問題点(自由記述)

調査時期は、2002 年 10 月である。

調査方法は、郵送法によった。

回答数 147 名、回収率 26.0% (147 名 / 566 名)

今回のデータから、日本子ども社会学会の会員の全体像(属性)を明らかにしたい。しかし、全体像を明らかにするには今回のデータには限界がある。

調査時(平成 4 年 10 月)の会員数は 566 名で、今回は、その 26.0%にあたる 147 名が、会員調査に回答してくれた。調査票に記入し回答を寄せた人は、会員の中でも子ども社会学会に愛着を感じ、熱心に参加している層に多い、と思われる。

また日本子ども社会学会の最近(2003 年)の理事選挙の投票率は全体で 19.8%であった。今回の調査で、理事選挙に「必ず投票する」と回答した人は 40.1%、「時々投票する」と回答した人は 27.9%である。これからも、今回の回答者が理事選挙にも投票する熱心な参加者であることがわかる。

したがって、今回の調査データは、子ども社会学会の会員の全体像を必ずしも表しているわけではなく、比較的孩子社会学会に積極的に参加している層の回答として読む必要がある。しかし、子ども社会学会にコミットしている会員の意見によって、今後の学会のあり方が決定されると考えると、今回のデータのもつ意味は貴重である。

2 性別・年齢別

それぞれの学会がどのような性別と年齢によって構成されているかによって、その学会の雰囲気はつくられる部分は大きい。熟年者の男性が多い重厚な学会なのか、若手の女性

の多い新進の学会なのかなど。本学会の性別、年齢構成はどのようになっているのであるか。

性別では、表 1-1 のように男性 56.5%、女性 39.5%と、男女比はおよそ 6 対 4 となっている。「日本教育社会学会」の男女比が、75.8%対 24.2%⁽¹⁾であるのと比べると、子ども社会学会の会員には女性会員の比率が高いといえる。

年齢別でみると、表 1-2 のような分布となっている。40 歳代前半が 16.3%と比較的多くなっているが、20 代も 12.3%、60 歳以上も 16.4%と、会員の年齢層は広範にわたっている（年齢構成は、「日本教育社会学会」とほぼ同じである）。

本報告書では、年齢層を、若年層（20 歳～39 歳）30.8%、中堅層（40 歳～49 歳）28.8%、熟年層（50 歳～）40.4%にわけ、考察をおこなう。

性別と年齢のクロスでみたのが、表 1-3 である。熟年層には男性が多く、若年層に女性が多くなっていることがわかる。年々、若い層に女性会員が増えている。

【表 1-1】 性別

	N	%	有効%
男	83	56.5	58.9
女	58	39.5	41.1
NA / DK	6	4.1	100.0
	147	100.0	

【表 1-2】 年齢

	度数	%	有効%
20歳～29歳	18	12.2	12.3
30歳～35歳	17	11.6	11.6
36歳～39歳	10	6.8	6.8
40歳～45歳	24	16.3	16.4
46歳～49歳	18	12.2	12.3
50歳～54歳	19	12.9	13.0
55歳～60歳	16	10.9	11.0
61歳～64歳	5	3.4	3.4
65歳以上	19	12.9	13.0
NA / DK	1	0.7	100.0
	147	100.0	

【表 1-3】 年齢 × 性別

	男	女
20歳～29歳	12.0	14.0
30歳～35歳	7.2	19.3
36歳～39歳	7.2	7.0
40歳～45歳	16.9	17.5
46歳～49歳	12.0	12.3
50歳～54歳	10.8	15.8
55歳～60歳	12.0	8.8
61歳～64歳	4.8	1.8
65歳以上	16.9	3.5
計	100.0	100.0
N	83	58

3 最終学歴、大学（大学院）の種類

会員の最終学歴（中退も含む）は、表 1-4 のように、大学院博士課程（42.9%）が一番多く、次いで大学院修士課程（39.5%）で、大学院修了が合わせて 8 割強（82.4%）となっている。

性別で見ると、男性で大学院博士課程（55.4%）が多く、女性は大学院修士（56.9%）が多い。

年齢別にみると、若年層ほど大学院博士課程が多くなっている。

【表 1-4】最終学歴 × 全体・性別・年齢 3 分割

	全体	男	女	若年	中堅	熟練
				20歳 ~39歳	40歳 ~49歳	50歳~
大学院博士課程	42.9	55.4	27.6	62.2	38.1	30.5
大学院修士課程	39.5	28.9	56.9	35.6	47.6	37.3
4年制大学	16.3	15.7	13.8	2.2	14.3	28.8
短期大学	0.7	0.0	1.7	0.0	0.0	1.7
中学校	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	1.7

大学（大学院）の種類は、国公立大学 72.4%、私立大学 26.2%、外国 1.4%となっている（表 1-5）。

性別では、男性に国公立大学が多く（男 79.5% > 女 67.2%）、女性に私立大学（女 29.3% > 男 20.5%）、外国（女 3.4% > 男 0%）が、多くなっている。

年齢別では、熟年層と若年層に国公立大学が多く、中堅層に私立大学が多くなっている。

【表 1-5】最終学歴の大学院（大学の種類） × 全体・性別・年齢 3 分割

	全体	男	女	若年	中堅	熟練
				20歳 ~39歳	40歳 ~49歳	50歳~
国公立大学	71.4	79.5	67.2	80.0	61.9	75.4
私立大学	25.9	20.5	29.3	17.8	38.1	22.8
外国	1.4	0.0	3.4	2.2	0.0	1.8
NA / DK	1.4	-	-	-	-	-

4 現在の専攻分野

現在の専攻分野を主なもの 1 つをあげてもらった。

表は、全体、性別、年齢別の割合を示した（表 1-6）。

全体で多い順に上位 5 つの分野をあげると、次のようになっている。

「児童文化」6.8%、「発達心理学・教育心理学」5.4%、「社会福祉・児童福祉」4.8%、「社会教育」4.8%である。「保育学・幼児教育学」（16.3%）と「教育社会学」（14.3%）

が、2大分野になっているが、それぞれ10%台であり、独占的ということではない。

性別でみると、男性に「教育社会学」が多く（男18.1% > 女10.3%）、女性に「保育学・幼児教育学」が多い（女20.7% > 男14.5%）。

年齢別でみると、どの年齢層でも「保育学・幼児教育学」と「教育社会学」が多いが、それ以外では、若手で多いのは、「教育学・比較教育」（11.1%）で、中堅層で比較的多いのは「学校教育」（11.9%）「現職教員及び諸団体」（11.9%）、「児童文化」（9.5%）、「社会福祉・児童福祉」（7.1%）で、熟年層に多いのは「児童文化」（10.2%）、「社会教育」（8.5%）である。

【表 1-6】 専攻分野 × 全体・性別・年齢3分割

	全体 (順位)	男 (順位)	女 (順位)	若年		中堅		熟練	
				20歳 ~39歳	(順位)	40歳 ~49歳	(順位)	50歳~	(順位)
児童文学	3.4	1.2	3.4	2.2		4.8		3.4	
児童文化	6.8 3	7.2 4	5.2	0.0		9.5 5		10.2 3	
児童精神医学・児童保健学・精神医学	0.7	1.2	0.0	2.2		0.0		0.0	
児童心理学	1.4	0.0	3.4	2.2		0.0		1.7	
保育学・幼児教育学	16.3 1	14.5 2	20.7 1	20.0 1		16.7 1		13.6 1	
発達心理学・教育心理学	5.4	6.0	5.2	6.7 4		4.8		3.4	
臨床心理学・カウンセリング	2.7	2.4	1.7	0.0		4.8		3.4	
子ども論・青少年論	4.1	4.8	3.4	6.7 4		0.0		5.1	
音楽教育・美術教育	1.4	2.4	0.0	0.0		0.0		3.4	
学校教育	6.1 5	8.4 3	1.7	0.0		11.9 2		6.8 5	
社会教育	4.8	4.8	5.2	4.4		0.0		8.5 4	
教育社会学	14.3 2	18.1 1	10.3 2	20.0 1		11.9 2		11.9 2	
教育学・比較教育	4.1	4.8	3.4	11.1 3		0.0		1.7	
教育人類学・文化人類学	2.7	2.4	3.4	2.2		7.1		0.0	
社会福祉・児童福祉	4.8	4.8	3.4	0.0		7.1		6.8 5	
ジェンダー論	4.1	3.6	5.2	6.7 4		0.0		5.1	
社会学	1.4	1.2	1.7	2.2		2.4		0.0	
心理学	0.7	1.2	0.0	0.0		2.4		0.0	
体育学	1.4	2.4	0.0	0.0		0.0		3.4	
家政学・家族関係学	3.4	1.2	6.9 4	4.4		2.4		3.4	
現職教員及び諸団体に活躍している	6.8 3	7.2 4	6.9 4	4.4		11.9 2		5.1	
その他	3.4	0.0	8.6 3	4.4		2.4		3.4	

現在の専攻分野を、以下のように、「児童分野」、「教育分野」、「その他」の3分野に分けて、考察する。

児童分野

児童文学、児童文化、児童精神医学・児童保健学・精神医学、児童心理学、保育学・幼児教育学、発達心理学・教育心理学、臨床心理学・カウンセリング、子ども論・青少年論

教育分野

音楽教育・美術教育、学校教育、社会教育、教育社会学、教育学・比較教育、
教育人類学・文化人類学

その他

社会福祉・児童福祉、ジェンダー論、社会学、心理学、体育学、家政学・家族
関係学、現職教員及び諸団体に活躍している、その他

それぞれの割合は、「児童分野」40.8%、「教育分野」30.6%、「その他」28.6%となっ
ている。

5 本学会所属年数

本学会の所属年数は、表 1-7 のようになっている。7年以上が41.4%と一番多い。3年以
上5年未満の会員が20.7%とそれに次いでいる。1年未満は9.0%だが、新入会員が増えて
いくことが、学会の発展につながっていくことであろう。

【表 1-7】 本学会所属年数

	度数	%	有効%	
1年未満	13	8.8	9.0	20.7
1年以上3年未満	17	11.6	11.7	
3年以上5年未満	30	20.4	20.7	37.9
5年以上7年未満	25	17.0	17.2	
7年以上	60	40.8	41.4	41.4
NA / DK	2	1.4	100.0	
	147	100.0		

6 現在の所属、職業上の地位

(1) 現在の所属

【表 1-8】 現在の所属

	度数	%	有効%
大学・短大・専修学校の専任	90	61.2	62.9
研究所の専任・専従	2	1.4	1.4
大学・短大・専修学校の非常勤	7	4.8	4.9
大学院生・研究生	22	15.0	15.4
小学校・中学校・高等学校	8	5.4	5.6
幼稚園、保育園(保育所)	5	3.4	3.5
行政職	3	2.0	2.1
民間企業	1	0.7	0.7
その他	5	3.4	3.5
NA / DK	4	2.7	100.0
	147	100.0	

現在の所属を、聞いたのが、表 1-8 である。

「大学・短大・専修学校の専任」が62.9%と一番多い。次いで、「大学院生・研究生」15.4%となっている。幼稚園、保育園、小中高といった現場の教員の割合は、1割に満たない。

(2) 職業上の地位

大学・短大・専修学校の専任と研究所の専任・専従(92名)に、職業上の地位を尋ねると、表1-9のようになっている。教授(46.7%)、助教授(27.2%)、講師(18.5%)の順で多くなっている。

【表1-9】 職業上の地位

	度数	有効%
教授または教授相当	43	46.7
助教授または助教授相当	25	27.2
専任講師または講師相当	17	18.5
助手または助手相当	3	3.3
NA/DK	4	4.3
	92	100.0

(3) 所属部局の分野

大学・短大・専修学校の専任と研究所の専任・専従に所属部局の分野を尋ねた結果が、表1-10である。教員養成系(37.0%)と教育系(10.9%)が多く、合わせて、全体の半分近くになる。

【表1-10】 所属部局の分野

	度数	有効%
教員養成系(一般学部の 教職課程相当含む)	34	37.0
教育学系(教員養成系以外)	10	10.9
福祉系	7	7.6
社会学系	3	3.3
心理学系	4	4.3
文学系	6	6.5
児童・保育系	13	14.1
家政系・生活科学	5	5.4
その他	8	8.7
NA/DK	2	2.2
	92	100.0

7 主な授業担当科目

大学・短大・専修学校の専任と研究所の専任・専従に主な授業の担当科目を聞いた結果が表1-11である。

現在の専攻と同様、「保育学・幼児教育学」(19.6%)と「教育社会学」(15.2%)の2つが2大分野となっている。

「児童分野」40.2%、「教育分野」28.3%、「その他」26.2%と、「児童分野」を担当する教

員が一番多くなっている。

【表 1-11】 主な授業の担当科目

	度数	有効%	(順位)
児童文学	4	4.3	
児童文化	5	5.4	5
児童心理学	1	1.1	
保育学・幼児教育学	18	19.6	1
発達心理学・教育心理学	4	4.3	
臨床心理学・カウンセリング	2	2.2	
子ども論・青少年論	3	3.3	
特別活動・生徒指導	1	1.1	
学校教育	3	3.3	
社会教育	3	3.3	
教育社会学	14	15.2	2
教育学・比較教育	5	5.4	5
社会福祉・児童福祉	7	7.6	4
社会学	3	3.3	
心理学	1	1.1	
体育学	1	1.1	
家政学・家族関係学	3	3.3	
その他	9	9.8	3
授業担当科目はない	4	4.3	
NA/DK	1	1.1	
	92	100.0	

以上のように、本学会の会員の特徴は、男女比は6対4で、年齢層は幅広い。専攻は、「保育学・幼児教育学」と「教育社会学」を中心として、子どもと教育に関わる広い分野の研究者が中心となっている。大学・短大等の専任教員が6割と多く、大学院生は1.5割で、現場の教員は1割に満たない。

(武内清)

注

- (1) 日本教育社会学会 50 周年記念事業特別委員会『教育社会学の成熟と転換 日本教育社会学会会員調査報告書』平成 13 年、1 ページ

第2章 会員の研究分野・研究動向

通常、学問の制度化とは、ある知的領域 - 科学（学問）分野が、役割の明確化と専門職業化を経た科学者集団（研究者）によって一定の機関（大学・研究所）において持続的に教育・研究され、それを通してその知識体系を習得した人材が不断に再生産される制度が確立するプロセスとして定義される。またそれは、パラダイム創造→支持者形成→教科書化・経典化→講壇化→職業集団の再生産といった過程を理念的には辿り、「学会」の設立は「講壇化」とともに平行して実現されると考えられる（橋本,1997）。

日本子ども社会学会は 1994 年の創立から約 10 年経とうとしている。より正確に述べれば、学会創設のきっかけとなった、1993 年 10 月の第 45 回日本教育社会学会大会（於：日本女子大学）でのラウンド・テーブルから本年（2003 年）でちょうど 10 年になる。2003 年 6 月現在、学会誌を第 9 号まで刊行し、1999 年には『いま、子ども社会に何が起きているか』（北大路書房）と題する教科書・経典を刊行するに至り、学問としての制度化を進めようとしてきた跡が窺える。

日本子ども社会学会は、10 年間の草創期を経て、次の時代・発展段階に入りつつある。これまでの 10 年の間にも学問的方向性（「子ども社会」の学なのか、「子ども」社会学なのか）や研究対象・方法論を巡って様々な模索・論争がなされてきた。こうした模索・議論を継続しつつ、次の時代・発展段階に向けて、学会単位で自己反省・自己批判を行うに至ったと言えるだろう。

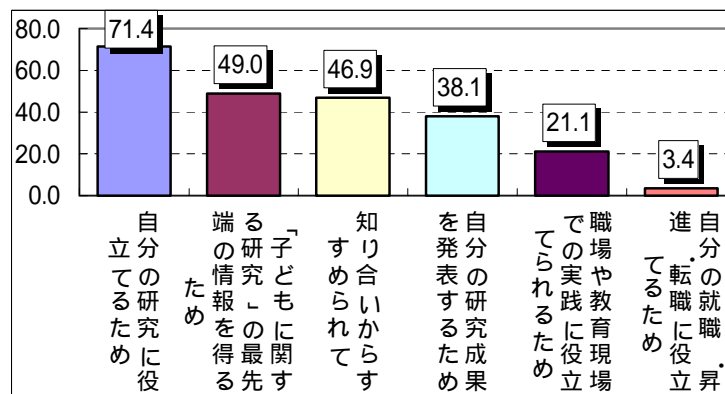
本章の目的は、日本子ども社会学会における会員各自の研究分野・研究動向について報告することにある。とくに（1）入会理由、（2）研究分野、（3）研究方法・研究スタイル、（4）学会活動の 4 点のテーマに分けて、学会全体の傾向とともに、会員の諸属性（性別、年齢コーホート、専攻分野など）からその特徴を浮き彫りにしていくことを主な目的に据えている。

1 入会理由

まず、日本子ども社会学会という「学会」にどのような理由で入会したのだろうか。

図 2-1 の通り、最も多い理由は「自分の研究に役立てるため」（71.4%）、「子どもに関する研究の最先端の情報を得るため」（49.0%）、「自分の研究成果を発表するため」（38.1%）など、自らの研究に対する貢献を挙げるものが多い。他方、「知り合いからすすめられて」（46.9%）という理由も目立つ。

【図 2-1】



属性別に入会理由を見るとどうか。

男性会員は「自分の研究に役立てるため」（75.9%）、「職場や教育現場での実践に役立てられるため」（24.1%）などで多く、女性会員は「知り合いからすすめられて」（56.1%）「自分の研究成果を発表するため」（47.4%）などで多かった。

世代別にみると、入会した理由の多くは若年会員で高い割合を記録している。たとえば「自分の研究成果を発表するため」（62.2%）「子どもに関する研究の最先端の情報を得るため」（55.6%）「知り合いからすすめられて」（51.1%）「自分の就職・昇進・転職に役立てるため」（8.9%）を挙げることができる。就職待機中の大学院生を含む若年会員層にとっての本学会は、自分の研究成果を発表し、研究テーマの最先端の情報を知り、就職・昇進などに役立てたいという手段的な意味が非常に大きいと考えられる。他方、有職者の多い中堅・熟練層では「自分の研究に役立てるため」や「職場や教育現場での実践に役立てられるため」で多かった。

分野別では、教育分野が幾つかの項目で際立って高い数値を挙げていた。たとえば、「知り合いからすすめられて」（68.9%）、「自分の研究成果を発表するため」（46.7%）や「自分の就職・昇進・転職に役立てるため」（8.9%）が挙げられる。また、その他分野で、「職場や教育現場での実践に役立てられるため」が他分野に比べて最も多かった（34.1%）。これは、他分野専攻の会員が諸々の教育現場での必要に迫られて入会したものと考えられる。

【表2-1】日本子ども社会学会に入会した理由（%）

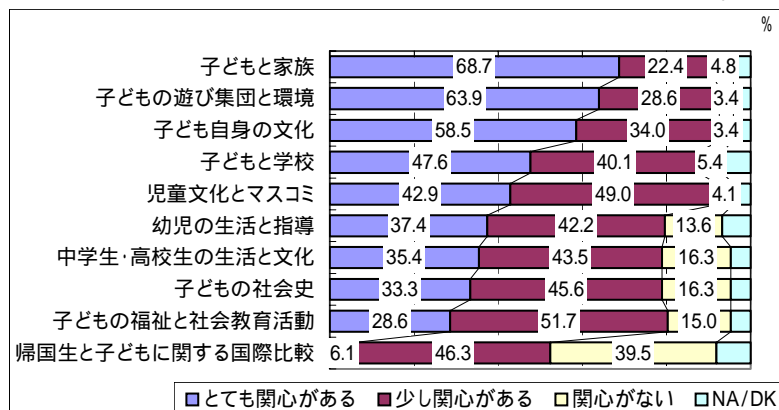
	性別		年齢3段階			専攻3分割		
	男	女	20歳～39歳	40歳～49歳	50歳～	児童分野	教育分野	その他
自分の研究に役立てるため	75.9	68.4	68.9	71.4	74.1	73.3	71.1	70.7
「子どもに関する研究」の最先端の情報を得るため	50.6	52.6	55.6	45.2	50.0	53.3	53.3	43.9
知り合いからすすめられて	41.0	56.1	51.1	45.2	46.6	43.3	68.9	29.3
自分の研究成果を発表するため	33.7	47.4	62.2	33.3	22.4	38.3	46.7	29.3
職場や教育現場での実践に役立てられるため	24.1	17.5	8.9	33.3	22.4	18.3	13.3	34.1
自分の就職・昇進・転職に役立てるため	3.6	3.5	8.9	2.4	0.0	0.0	8.9	2.4

2 研究分野

(1) 関心のある研究分野

本学会員が関心をもつテーマについては図 2-2 に詳しい。これによると、多くのテーマについて（「帰国生と子どもに関する国際比較」のみを除いて）、80～90%の会員が「とても関心がある」または「少し関心がある」と回答していることがわかる。学際的な本学会らしく、多くの会員が子どもをめぐる諸問題（特に生育環境や子ども文化それ自体）に対して、問題意識を共有する可能性をもっているといえるだろう。

【図 2-2】



「関心のあるテーマ」を属性別に見た場合、どうだろうか。以下では、より明確に、属性による違いを明らかにするために、「とても関心がある」と回答されたものに限定して、分析をすすめていきたい。

まず、性別による関心のあるテーマの差異であるが、多くの項目について、女性会員よりも男性会員のほうが高い割合を示す回答が目立った（10項目中7項目）。女性会員は「子どもと家族」（78.2%）や「幼児の生活と指導」（49.0%）などのいわゆる広く「保育分野」を包含するテーマのほか、「帰国生と子どもに関する国際比較」（8.0%）でも男性会員に比べて高い関心を示していることが明らかになった。

年齢別に見ると、40歳～49歳の中堅会員で、特に高い割合を示す項目が目立った。20歳～39歳の若年会員層では、他の年齢層に比べて、際立って高い割合を示す項目がほとんどないのに加えて、多くのテーマについて「とても関心がある」と答えている項目が少ない。「幼児の生活と指導」（43.2%）や「中学生・高校生の生活と文化」（40.0%）が他の年齢層に比べて若干高い関心を寄せている反面、「子どもの福祉と社会教育活動」（20.0%）などは他の年齢層（中堅層 37.5%、熟練層 33.0%）に比べてあまり高い関心をもたれていないようである。50歳以上の熟練会員では「子どもと学校」（56.9%）ならびに「子どもの社会史」（43.3%）に関する割合が他の年齢層に比べて高かった。

専攻別に見ると、「児童分野」は、「子ども自身の文化」（67.8%）や「児童文化とマスコミ」（51.7%）など子ども文化そのものを考究しようとする児童文化関連と「幼児の生活と指導」（54.5%）など保育分野で高く、「教育分野」では「子どもと学校」（72.1%）や「中学生・高校生の文化・生活」（56.8%）などこれまでの教育学や教育社会学で研究蓄積の多いテーマで際立って高いといえる。いわば、それぞれの専攻と関心をもつテーマがはっきりと色分けされた結果になったといえるだろう。

【表2-2】関心のある研究分野（%）

	性別		年齢3段階			専攻3分割		
	男	女	20歳～39歳	40歳～49歳	50歳～	児童分野	教育分野	その他
子どもと家族	67.9	78.2	70.5	83.3	64.8	73.7	68.2	72.5
子どもの遊び集団と環境	69.5	61.1	56.8	76.2	66.7	68.4	67.4	63.4
子ども自身の文化	70.4	50.0	54.5	70.7	58.2	67.8	59.5	52.5
子どもと学校	56.8	43.1	47.7	48.8	56.9	41.8	72.1	41.0
児童文化とマスコミ	46.3	38.2	40.0	48.8	46.3	51.7	45.2	34.1
幼児の生活と指導	35.8	49.0	43.2	42.5	36.5	54.5	20.9	41.0
中学生・高校生の生活と文化	44.4	29.6	40.0	31.7	39.6	30.4	56.8	25.0
子どもの社会史	40.7	24.5	31.8	27.5	43.6	42.1	35.7	24.4
子どもの福祉と社会教育活動	30.9	28.3	20.0	37.5	33.3	25.0	32.6	34.1
帰国生と子どもに関する国際比較	6.3	8.0	9.1	12.5	0.0	7.4	9.5	2.6

*「とても関心がある」という回答のみの集計結果。

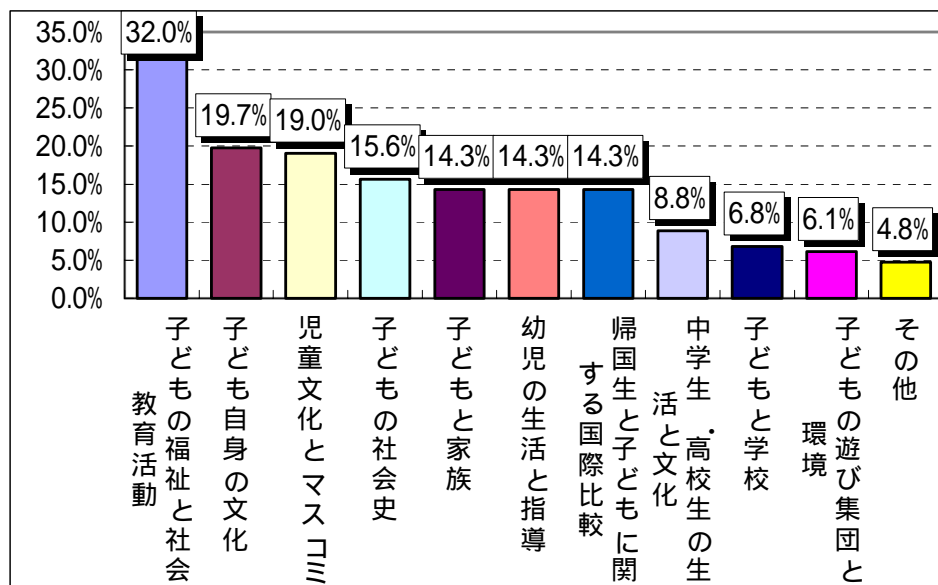
（2）本学会で「弱い」と思われる研究分野

他方、日本子ども社会学会の会員が本学会全体の研究動向を俯瞰したときに、「弱い」（弱点）だと判断した研究分野についても見ておこうと思う。

学会全体が最も弱点だと考えている研究分野は「子どもの福祉と社会教育活動」（32.0%）であった。「子どもの福祉と社会教育活動」は、先の図 2-2 で、会員自身の現在の関心のあるテーマとして低位にあった。いわば学会全体で十分に研究されていないが

ゆえに、弱点だとされているのではないだろうか。あるいは、少子化対策や母親支援の一環として、育児サービスの多様化・拡充が求められる中、新しい児童福祉の研究が急がれつつも、現段階で十分に対応していない状況を示しているようにも思われる。

【図 2-3】



このほか属性別に見ると、「子どもの福祉と社会教育活動」については、女性会員（27.6%）よりも男性会員に（33.7%）、年齢別には熟練会員層（37.3%）と若年会員層（33.3%）に、専攻別では「社会教育」を含む「教育分野」専攻で高い割合（51.1%）を示した。

そのほか、本学会の「弱い」研究分野として、「子ども自身の文化」（19.7%）や「児童文化とマスコミ」（19.0%）など、子ども文化それ自体を考究しようとする分野が比較的高かった。「子ども自身の文化」に注目しても、女性会員よりも男性会員（21.7%）、年齢別では中堅層の会員（26.2%）で、分野別には児童分野や教育分野に比べて「その他」カテゴリーに属する会員（26.2%）の間で、「弱い」（弱点）と感じている者が多いようである。

【表2-3】本学会の「弱い」と思われる研究分野 (%)

研究分野	性別		年齢3段階			専攻3分割		
	男	女	20歳～39歳	40歳～49歳	50歳～	児童分野	教育分野	その他
子どもの福祉と社会教育活動	33.7%	27.6%	33.3%	23.8%	37.3%	20.0%	51.1%	28.6%
子ども自身の文化	21.7%	15.5%	11.1%	26.2%	22.0%	20.0%	13.3%	26.2%
児童文化とマスコミ	19.3%	20.7%	20.0%	21.4%	16.9%	15.0%	17.8%	26.2%
子どもの社会史	19.3%	6.9%	15.6%	9.5%	20.3%	21.7%	17.8%	4.8%
子どもと家族	10.8%	20.7%	15.6%	19.0%	10.2%	13.3%	11.1%	19.0%
幼児の生活と指導	13.3%	15.5%	17.8%	19.0%	8.5%	23.3%	6.7%	9.5%
帰国生と子どもに関する国際比較	14.5%	15.5%	22.2%	9.5%	11.9%	11.7%	20.0%	11.9%
中学生・高校生の生活と文化	7.2%	12.1%	6.7%	9.5%	10.2%	11.7%	6.7%	7.1%
子どもと学校	8.4%	5.2%	8.9%	4.8%	6.8%	5.0%	8.9%	7.1%
子どもの遊び集団と環境	7.2%	5.2%	8.9%	7.1%	3.4%	6.7%	2.2%	9.5%
その他	4.8%	5.2%	4.4%	4.8%	3.4%	3.3%	4.4%	7.1%

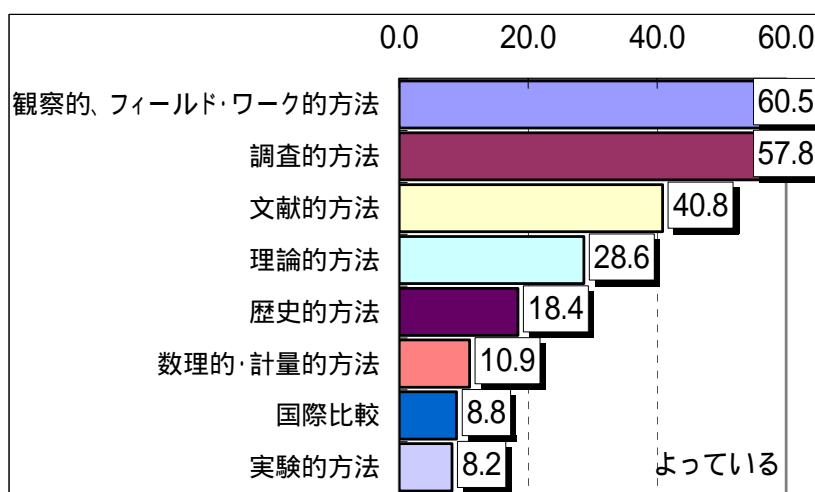
3 研究方法・研究スタイル

(1) 採用している研究方法

それでは会員が以上で挙げた関心のあるテーマを明らかにする方法としてどのような研究方法を採用しているのだろうか。今回の調査では主な研究方法として 3 点まで回答を頂いている。

単純集計結果は以下の図 2-4 にみる通りである。本学会員が採択している代表的な研究方法（上位 3 位）として挙げられるのは、「観察的、フィールド・ワーク的方法」（60.5%）、「調査的方法」（57.8%）、「文献的方法」（40.8%）である。逆に「数理的・計量的方法」（10.9%）、「国際比較」（8.8%）、「実験的方法」（8.2%）などは比較的少ないほうの部類に入る。

【図 2-4】



属性別に見てみよう。性別で見ると、上位 3 位の方法については、ほとんど性差が見られないのに対して、それ以下の研究方法については、女性会員よりも男性会員のほうが高い割合を示している。男性会員のほうが女性会員に比べて多様な研究方法を用いて問題にアプローチしているということだろうか。

年齢別には、「理論的方法」「数理的・計量的方法」「実験的方法」は若年会員層で、「観察的、フィールド・ワーク的方法」は中堅会員層で、「文献的方法」「国際比較」は熟練会員層で、それぞれ高い割合を示している。大きな差が見られなかった項目は「調査的方法」「歴史的方法」の 2 つの研究方法であった。日本子ども社会学会においては、若手会員は主として仮説-実証型の計量研究を志向し、中堅会員はフィールド（現場）に赴いて得られた質的データをもとに実態の検証を行い、熟練会員は文献調査や国際比較を通じて子ども問題にアプローチをしているという傾向を読みとることができる。若手会員は社会学・心理学の伝統的な実証研究のスタイルを踏襲し、中堅会員においては、社会学・心理学においてフィールド・ワークの手法が本格的に紹介・導入されはじめた当時（80 年代～90 年代前半）、研究者としてトレーニングを受けた者が多いためか、質的方法に拠って立つ研究者が多い。

研究分野別には、児童分野で「観察的、フィールド・ワーク的方法」（65.0%）や「歴史的方法」（28.3%）が、教育分野では「調査的方法」（70.5%）「数理的・計量的方法」

(20.5%)「国際比較」(11.4%)が、その他分野では「文献的方法」(50.0%)を採用する傾向が強いようである。

いずれにしても、それぞれの研究対象と問題関心に応じて、会員各自がふさわしい研究方法を採択しているものと思われる。

【表2-4】拠っている研究方法(%)

	性別		年齢3段階			専攻3分割		
	男	女	20歳～39歳	40歳～49歳	50歳～	児童分野	教育分野	その他
観察的、フィールドワーク的方法	63.4	60.3	60.0	73.8	51.7	65.0	56.8	59.5
調査的方法	56.1	58.6	57.8	54.8	60.3	50.0	70.5	57.1
文献的方法	39.0	39.7	33.3	38.1	48.3	38.3	36.4	50.0
理論的方法	37.8	17.2	35.6	28.6	24.1	21.7	34.1	33.3
歴史的方法	22.0	12.1	17.8	19.0	19.0	28.3	13.6	9.5
数理的・計量的方法	12.2	8.6	20.0	9.5	5.2	6.7	20.5	7.1
国際比較	11.0	6.9	4.4	7.1	13.8	8.3	11.4	7.1
実験的方法	9.8	6.9	11.1	7.1	6.9	6.7	9.1	9.5

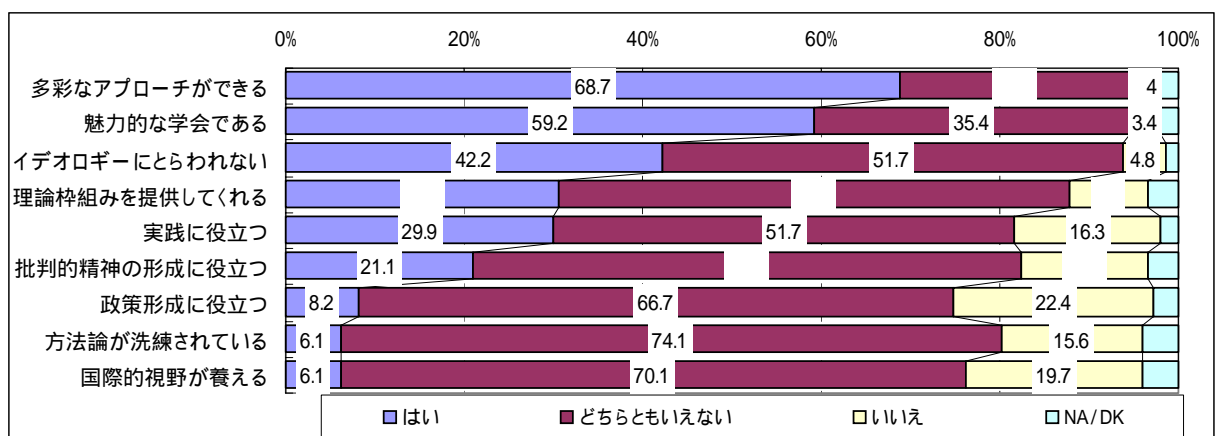
(2) 本学会の研究面での評価

日本子ども社会学会の学会員は、本学会がどのような点で自分の研究面に対して意義・貢献をもたらしていると評価しているのだろうか。以下ではこの問題について、本学会の研究面での評価として捉えてみたい。

全体的な傾向から見ると、「多彩なアプローチができる」(68.7%)、「魅力的な学会である」(59.2%)、「イデオロギーにとらわれない」(42.2%)などの点をポジティブに評価しているといえる。他方で、「政策形成に役立つ」(8.2%)、「方法論が洗練されている」(6.1%)、「国際的視野が養える」(6.1%)については積極的に肯定する回答が少なく、「どちらともいえない」「いいえ」などの回答が多い。

研究方法論上については、一方で「多彩なアプローチができる」という本学会の学際的な雰囲気肯定的に捉えながらも、しかしながら、多くの会員(68.7%)は実際の方法論について「十分に洗練されている」と答えているものが少ない(6.1%)。このことから、研究方法論上のレベル向上が課題として浮き彫りになっていると考えてよいだろう。

【図 2-5】



性別で見ると、男性会員は本学会の「イデオロギーにとらわれない」(48.8%)点を評

価する一方、女性会員は「理論枠組みを提供してくれる」（43.6%）や「批判的精神の形成に役立つ」（26.8%）を評価しているといえる。

年齢別には、若年会員層が「多彩なアプローチができる」（79.5%）や「魅力的な学会である」（71.1%）などの点を好意的に評価しているのに対して、熟練会員層は「政策形成に役に立つ」（12.5%）を挙げている点が際立った特徴であるといえる。

研究分野別では、児童分野専攻の会員は「理論枠組みを提供してくれる」（38.6%）や「批判的精神の形成に役立つ」（29.8%）など先の女性会員の回答傾向とほぼ重なる。教育分野専攻の会員では「多彩なアプローチができる」（75.6%）、「イデオロギーにとらわれない」（55.6%）、「実践に役立つ」（40.0%）を挙げる声が多い。教育分野は子ども・教育に関する学際的・事実学・実践的な研究を志向するうえで、本学会の存在意義を評価しているといえる。その他分野専攻の学会員は、他専攻の会員に比べて、最も「魅力的な学会である」と答える者が多い（70.0%）。しかし、「方法論が洗練されている」と答える者はわずか2.6%に過ぎず、児童分野・教育分野以外の専攻の会員から見ると、本学会の研究方法は未だ十分に洗練されているとはいえず、この点において、大きな課題を残しているといえるだろう。

【表2-5】本学会の研究面での評価(%)

	性別		年齢3段階			専攻3分割		
	男	女	20歳～39歳	40歳～49歳	50歳～	児童分野	教育分野	その他
多彩なアプローチができる	72.0	69.6	79.5	61.9	70.2	68.3	75.6	66.7
魅力的な学会である	59.8	64.3	71.1	51.2	57.9	57.6	55.6	70.0
イデオロギーにとらわれない	48.8	36.8	37.8	45.2	45.6	36.7	55.6	37.5
理論枠組みを提供してくれる	24.7	43.6	35.6	36.6	25.5	38.6	24.4	30.0
実践に役立つ	29.3	32.1	33.3	29.3	29.8	22.0	40.0	32.5
批判的精神の形成に役立つ	17.5	26.8	20.0	22.0	23.6	29.8	17.8	15.0
政策形成に役立つ	9.9	7.1	6.7	4.9	12.5	8.6	8.9	7.5
方法論が洗練されている	7.3	5.7	6.8	5.0	7.1	8.6	6.8	2.6
国際的視野が養える	6.2	7.4	6.8	4.9	7.3	6.9	4.5	7.7

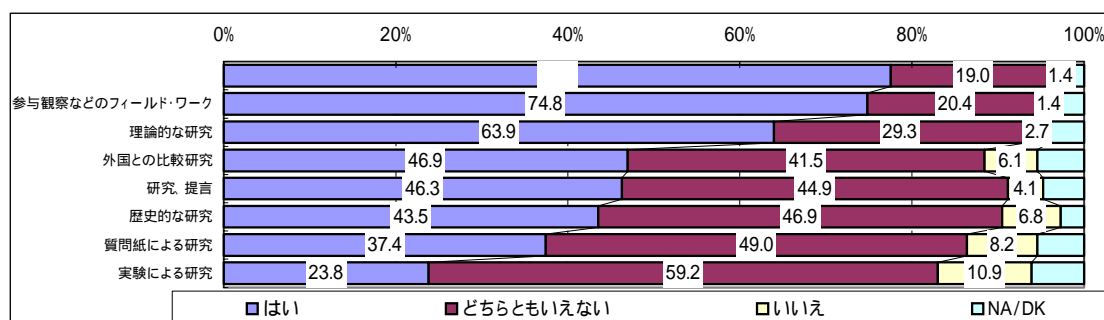
（3）発展を期待する研究スタイル

以上、各本学会員が実際に採用している研究方法や本学会の研究面に対する評価を踏まえたときに、日本子ども社会学会の会員は今後、学会全体でどのような研究スタイルでの発展が望ましいと考えているのだろうか。

図 2-6 から明らかのように、「実践的な研究」（77.6%）、「参与観察などのフィールド・ワーク」（74.8%）、「理論的な研究」（63.9%）を望む声強いことがわかる。とりわけ昨今において、子ども・教育研究の領域では研究の「実効性」（たとえば、実践志向、政策志向、臨床志向）が大きく求められるようになってきている。そういう状況のなかで、本学会においても、実践知を志向する声や参加観察やフィールド・ワークなどを通じて得られる個別・臨床的な知を志向する機運が非常に高まっているといえる。

先に見たように、現段階において本学会（の研究知）を「実践に役立つ」と考えている会員は3割弱に留まっていた。こうした実践知に対する「欲求不満」が実践的な研究への志向性を大きくしているのではないかと考えられる。特に女性会員、中堅会員、「その他領域」専攻の会員ほど、その思いを強くしているようである。

【図 2-6】



このほか、「参与観察などのフィールド・ワーク」についても、会員の性差によって大きな違いは見られないものの、熟練会員に比べて、その研究方法に慣れ親しんでいる若年・中堅会員で発展が期待されていること、「理論的な研究」は研究方法として最も志向している若年研究者層で研究発展への期待が小さく、中堅・熟練研究者の間で最も発展が期待されているテーマである。

【表2-6】発展を期待する研究 (%)

	性別		年齢3段階			専攻3分割		
	男	女	20歳～39歳	40歳～49歳	50歳～	児童分野	教育分野	その他
実践的な研究	75.6	85.7	71.1	85.7	80.4	72.9	80.0	87.5
参与観察などのフィールド・ワーク	78.0	76.4	82.2	81.0	70.4	81.0	84.4	64.1
理論的な研究	66.7	67.3	59.1	71.4	68.5	65.5	68.9	65.8
外国との比較研究	49.4	50.9	40.9	41.5	64.2	50.0	46.7	52.6
政策的な研究・提言	44.4	52.8	50.0	46.3	50.0	42.1	53.3	52.6
歴史的な研究	44.6	41.8	33.3	39.0	57.1	44.8	51.1	37.5
質問紙による研究	35.4	45.3	38.6	43.9	35.8	30.4	48.9	42.1
実験による研究	27.5	20.8	27.3	24.4	25.0	25.0	22.7	28.9

4 学会活動

(1) 重要な学会

日本子ども社会学会の会員は、本学会を含めて、どの学会を重要な学会として見なしているのだろうか。表 2-6 を見れば明らかのように、重要な学会の第 1 位～第 3 位までいずれも最上位は「日本子ども社会学会」を占めていた。日本教育社会学会は、重要な学会 1 位および 2 位において、日本子ども社会学会に次ぐ高い数値であった。

【表2-7】重要な学会名(第1位～第3位の上位3学会)

	重要な学会(第1位)	重要な学会(第2位)	重要な学会(第3位)
1	日本子ども社会学会(21.6%)	日本子ども社会学会(30.8%)	日本子ども社会学会(21.0%)
2	日本教育社会学会(18.0%)	日本教育社会学会(10.0%)	日本保育学会(11.4%)
3	日本保育学会(15.1%)	日本保育学会(6.9%)	日本教育学会(11.4%)

日本子ども社会学会を「重要な学会」と位置付ける者の述べ人数は、92 名(1 位: 30 名、2 位: 40 名、3 位: 22 名)に及び、全回答者 147 名中 62.6%が本学会を「重要な学会ベスト 3」のなかに位置付けていることがわかる。

属性別に見た場合、日本子ども社会学会を重要な学会の第 1 位とみなす会員(子社 1

位)と2位とみなす会員(子社2位)は、ともに男性会員(60.0%、66.7%)で、熟練会員が最も多い(43.3%、38.5%)。日本子ども社会学会の重要度が男性会員や熟練会員で非常に高いことは、既に米川・原・相原(1999)が日本教育社会学会の会員調査を通じて明らかにしている通りであり、今回の日本子ども社会学会の会員調査結果もこれと大きく重なる。しかし、専攻分野別にみると、子社1位はどの領域もほぼ同じであるのに対して、子社2位の会員はその他領域で低く、子社3位では児童分野専攻が最も高いという傾向が読み取れる。

また、日本子ども社会学会を重要な学会ベスト3に含めていない会員(それ以外)の属性は、女性会員よりも男性会員(66.7%)、若年層・中堅層に比べて熟練会員層(42.1%)、教育分野やその他分野に比べて、児童分野(47.4%)で高い。同じ属性をもつ者が、一方で日本子ども社会学会を「重要な学会」とみなしつつ、他方では「それ以外の学会」とみなすという面白い結果が明らかにされた。

[表2-8] 本学会を「重要な学会」とみなす会員の属性(%)

	性別		年齢3段階			専攻3分割			該当者数 (実数)
	男	女	20歳~39歳	40歳~49歳	50歳~	児童分野	教育分野	その他	
子社第1位	60.0	40.0	30.0	26.7	43.3	30.0	36.7	33.3	30
子社第2位	66.7	33.3	30.8	30.8	38.5	40.0	40.0	20.0	40
子社第3位	40.0	60.0	31.8	31.8	36.4	54.5	27.3	18.2	22
それ以外	66.7	33.3	26.3	31.6	42.1	47.4	15.8	36.8	38

さて、以上で明らかにされた分析結果を踏まえたときに、気掛かりな点として2点ほど指摘しておきたい。

第一点として、「日本子ども社会学会を重要な学会と考えている会員は62.6%である」という数値や結果の意味をどう見るのかという点である。確かに約3分の2の学会会員は、日本子ども社会学会を「重要な学会ベスト3」のなかに位置付けているのだが、果たしてこの数値に満足してよいのだろうか。試みに、日本教育社会学会が1998年に行った会員調査(日本教育社会学会50周年記念事業特別委員会,2001)によれば、日本教育社会学会を重要な学会として位置付ける者の述べ人数は、320名(1位:227名、2位:59名、3位:34名)に及び、全回答者430名中74.4%が「重要な学会ベスト3」のなかに位置付けている。もちろん単純な比較には注意が必要だが、日本教育社会学会のそれと比較すると、日本子ども社会学会の学会帰属意識はやや低いと言わざるを得ない。

第二点に、日本子ども社会学会を第1位としてよりも、第2位の重要な学会と位置付けている者が最も多い(40名)。これは先に参照した日本教育社会学会の会員調査と比較してみると一目瞭然だが、日本教育社会学会では「重要な学会第1位」として位置付けている者が最も多いのである(227名)。試みに、今回の日本子ども社会学会の会員調査において、第1位に重要として回答された学会と第2位として回答された学会とをクロスさせてみると、教育分野専攻の会員において、第1位を日本子ども社会学会、第2位を日本教育社会学会とした者は7名に留まるのに対して、第1位を日本教育社会学会、第2位を日本子ども社会学会とする者は13名を数える。また、児童分野専攻の会員についても、それと同様に、第1位を日本子ども社会学会、第2位を日本保育学会に位置付けている者はわずか1名しか存在しないのに対して、その逆のパターン(第1位を日本

保育学会、第2位を日本子ども社会学会)は6名を数える。

日本子ども社会学会のような90年以降に発足した後発学会の場合、先行する関連学会との差異化とあわせて、強い帰属意識(アイデンティフィケーション)が学会の存続・発展には不可欠な要素になってくる。後発であるがゆえに、先行関連学会からいかに独自性・存在意義を発揮・アピールするかによって、すなわち先行関連学会との差異化を通じて、帰属意識を強化していく戦略をとらざるを得ないのである。しかも、新規参入であるがゆえに、差異化・帰属意識の強化は時間をかけずに短時間で図られる必要がある。

以上の点を考慮したとき、日本子ども社会学会は果たして会員の帰属意識を目論み通り高めることに成功しただろうか。「2番目に重要な学会」としての位置付けのままでよいのか、それとも「2番目に重要な学会」であっても多くの学会員(といっても3分の2に留まるのだが...)が「重要な学会」のひとつとして位置付けていることに納得するのか。今後の学会運営のあり方とともに、会員各自の帰属意識のあり方が問われているといっていよう。

(2) 学会大会への参加

続いて「学会大会への参加」という点から見てみよう。全体で見ると、学会大会への参加は、第1位に重要であるとみなしている学会には約8割(80.3%)が参加していることがわかる。第2位の重要な学会では、約半数(55.8%)の参加になり、第3位の重要学会にもなると3割強(34.0%)しか参加していないようである。

属性別には、1位~3位の重要な学会いずれにしても、女性会員に比べて男性会員のほうが学会大会によく参加しているといえる。年齢別には、いずれの順位の学会も全体の数値と比較すると、それほど大きな違い・差異は見られない。専攻別に見ると、1位と3位の重要な学会については、児童分野の会員が他の専攻に比べて積極的に学会大会に参加しているようである。

[表2-9] 学会大会への参加(%)

	全体	性別		年齢3段階			専攻3分割		
		男	女	20歳~39歳	40歳~49歳	50歳~	児童分野	教育分野	その他
第1位の学会	80.3	89.6	80.4	86.0	82.5	87.0	91.2	85.0	78.0
第2位の学会	55.8	67.1	58.0	62.5	65.8	62.0	59.6	63.9	69.4
第3位の学会	34.0	48.4	47.2	50.0	48.3	48.8	53.1	44.8	44.0

(3) 学会発表

学会発表の有無についての傾向も学会大会への参加傾向とほぼ重なる。全体的に見ると、学会大会への参加は、第1位に重要であるとみなしている学会では約4割弱が学会発表を行っていることがわかる。第2位の重要な学会では、3割(29.9%)が学会発表を行い、第3位の重要な学会にもなると1割強(13.6%)しか学会発表をしていないようである。以上から、学会に対する帰属意識が学会大会への参加や学会発表の有無の傾向を大きく規定していると考えてよいだろう。

属性別に見ると、性別という観点から見ると、重要な学会の順位を問わず、女性会員よりも男性会員のほうが積極的に学会発表を行っているという傾向が窺える。年齢別に見る

と、第 1 位の重要な学会では熟練会員よりも若手・中堅会員で積極的に学会発表をしているのに対して、第 2 位の重要な学会では、どの年齢層もほぼ同じ割合で学会発表を行っており、第 3 位の重要な学会では若手・中堅に比べて、熟練会員のほうが学会発表を行う傾向が強いようである。専攻分野別に見ると、第 1 位の重要な学会では、児童分野専攻の者の半数（50.0%）が学会発表を行うなど、帰属意識の高い学会において、積極的に研究発表を行っている。第 2、3 位の重要な学会については、専攻別では大きな差異は認められなかった。

[表2-10] 学会発表の有無 (%)

	全体	性別		年齢3段階			専攻3分割		
		男	女	20歳～39歳	40歳～49歳	50歳～	児童分野	教育分野	その他
第1位の学会	37.4	47.2	35.2	44.2	47.4	37.5	50.0	37.8	36.6
第2位の学会	29.9	42.0	24.5	35.0	32.4	37.8	37.0	36.4	33.3
第3位の学会	13.6	24.1	11.8	18.8	14.3	27.0	21.7	19.2	20.0

(4) 学会誌をよく読むか

学会誌は学会における顔ともいえる重要な役割を担っている。学会全体が研究知、理論、パラダイムを共有するうえで、学会誌は不可欠なメディアである。また、学会誌は、学会員以外の者が図書館等で目に触れる機会が多く、そうした人たちに広く学会活動の内容を知らせる重要なメディアでもある。その学会誌が本学会員においてどの程度読まれているかを以下で分析していこう。

全体の傾向を見ると、これまでの分析の通り、重要度の高い学会（帰属意識の強い学会）ほど、「学会誌をよく読む」会員が増えていく。第 1 位に重要であるとみなしている学会のジャーナルについては、約 9 割（87.1%）の会員がよく読んでいる。第 2 位の重要な学会のジャーナルについては、4 分の 3 の会員（74.8%）がよく読み、第 3 位の重要な学会にもなると、よく読んでいる人の割合は半数強（53.7%）に留まる。

属性別に見ると、性別では、第 2 位の重要な学会で、男性会員が女性会員に比べてよくジャーナルを読んでいる割合が若干高いだけで、その他については大きな差は認められなかった。年齢別では、第 1 位の重要な学会のジャーナルについて、若手・中堅会員が熟練会員に比べて「よく読む」と回答している割合が高い。第 2 位の重要な学会のジャーナルについては、中堅会員や熟練会員が「よく読む」と回答する割合が高く、9 割近くにのぼる（若手は第 2 位の重要な学会の雑誌を読む割合が 77.5%にまで落ち込む）。第 3 位の重要な学会のジャーナルについては、若手・中堅会員に比べて、熟練会員がよく読んでいるようである（85.0%）。以上から、第 1 位に重要な学会のジャーナルをメインに読む若手会員、第 1・2 位の重要な学会のジャーナルを中心に読む（第 3 位のジャーナルはあまり読まない）中堅会員、順位を問わずどのジャーナルも満遍なくよく読んでいる熟練会員、という特徴が浮き彫りになった。

[表2-11] 学会誌をよく読むか (%)

	全体	性別		年齢3段階			専攻3分割		
		男	女	20歳～39歳	40歳～49歳	50歳～	児童分野	教育分野	その他
第1位の学会	87.1	94.6	96.4	97.7	97.4	92.3	100.0	92.1	92.5
第2位の学会	74.8	88.7	83.7	77.5	91.9	91.7	87.5	88.2	86.1
第3位の学会	53.7	77.0	80.0	78.1	67.9	85.0	81.3	64.3	88.0

専攻別で見ると、「児童分野」専攻のすべての会員（100.0%）は、第1位に重要だとみなす学会のジャーナルを「よく読んでいる」という。第2位の重要な学会については、専攻別では大きな差異は認められない。第3位の重要な学会のジャーナルについては、「教育分野」専攻で「よく読んでいる」割合が他の専攻の者に比べて明らかに低い（64.3%）。

（5）学会誌への論文の投稿

通常、学会に入会すると、その学会誌への論文を投稿する資格や機会が与えられる。学会誌に投稿し、レフリーの審査を経て、論文が掲載されることは、研究者のアカデミック・キャリアの形成にとって、非常に重要な意味をもつ。たとえば、大学院生を中心とする若手研究者であれば就職するうえで、中堅以上であれば昇進等の審査において重要なファクターになってくる（もっともこれは理想的には・・・であるが）。

学会誌への投稿を全体の傾向から見ると、重要な学会第1・2位の学会のジャーナルへの投稿はともに約1割程度で、第2位の重要な学会のジャーナルのほうで投稿がやや多い程度である。性別では男性会員のほうが女性会員に比べて学会の重要度を問わず積極的に論文の投稿を行っている。年齢別では、第1位の重要な学会のジャーナルには、中堅・熟練の会員が若手会員に比べて（わずかではあるが）より積極的に学会誌に論文を投稿しているといえる。あるいは、依頼論文との関係で、若手に比べて、中堅・熟練の会員のほうが学会誌に論文を執筆するチャンスが増えるのかもしれない。第2・3位の重要な学会のジャーナルについては、それぞれ若手会員が積極的に投稿しているといえる。就職や昇進のための「研究業績作り」との関係で、大学院生や助手など若手会員層が積極的に投稿していると考えられる。専攻別では、第1位の重要な学会のジャーナルについては「児童分野」専攻の会員（14.8%）が、第2位の重要な学会のジャーナルについては「教育分野」専攻の会員（24.2%）が比較的積極的な学会誌への論文の投稿を行っているようである。

【表2-12】学会誌への論文の投稿（%）

	全体	性別		年齢3段階			専攻3分割		
		男	女	20歳～39歳	40歳～49歳	50歳～	児童分野	教育分野	その他
第1位の学会	9.5	15.5	5.7	9.3	12.8	11.1	14.8	11.1	5.3
第2位の学会	10.9	19.1	6.1	20.0	5.4	13.6	12.7	24.2	2.9
第3位の学会	5.4	12.3	2.9	12.5	7.1	5.6	10.6	7.4	4.3

（6）学会の役職や委員（事務局員を含む）の就任

学会の役職や委員にどのような会員が就いているのか、また、それと学会の重要度との関連はどのようになっているのか。以下で見てみよう。

【表2-13】学会の役職・委員（事務局員を含む）である（%）

	全体	性別		年齢3段階			専攻3分割		
		男	女	20歳～39歳	40歳～49歳	50歳～	児童分野	教育分野	その他
第1位の学会	27.2	39.7	14.5	4.7	33.3	50.0	29.1	37.8	24.4
第2位の学会	17.7	23.9	18.4	5.0	29.7	30.2	20.4	24.2	20.6
第3位の学会	4.8	10.7	2.9	0.0	7.1	14.3	4.3	15.4	4.3

全体的な傾向としては、学会の重要度が上がれば役職・委員に就く者が多い反面、重要

度が下がれば役職や委員に就く者は減少するようである（もちろん、役職・委員に就いているからこそ、「重要な学会」になる場合もあるだろう）。最も重要な学会だとみなす学会（第1位の学会）の場合、役職や委員に就く者は27.2%、第2位の学会では17.7%、第3位の学会では4.8%まで減少する。

性別では、学会の重要度に関係なく、女性会員に比べて、男性会員のほうが学会の役職や委員に就く者の割合が高いようである。学会における支配の構造が男性中心ではないか、ジェンダーの観点から批判的に捉える必要があるのではないだろうか。年齢別では、学会の重要度に関係なく、若手会員よりも、中堅会員、中堅会員よりも熟練会員ほど役職・委員を務める会員が増えていく。本調査の自由回答欄でも、日本子ども社会学会のあり方に対して、「理事、役員等が高齢化しすぎており、現代の子どもをめぐる問題状況に柔軟に対応できていない。また、一部の大学出身者や分野への偏りを感じる。」（中堅会員・男性）や、「もっと若手にチャンスを与えてください。」（若手会員・男性）など学会運営に対する批判的な声は傾聴に値すると思われる。専攻別に比較すると、教育分野専攻の会員は、児童分野専攻やその他分野専攻の者に比べて、役職・委員に就いている割合が高いようである。

【参考文献】

- 日本教育社会学会 50 周年記念事業特別委員会（2001）『教育社会学の成熟と転換 - 日本教育社会学会会員調査報告書 -』（編集代表 米川英樹）。
- 橋本鉦一（1997）「教育社会学（会）の成立と変容 - 社会集団としての形成プロセス - 」日本教育社会学会第 49 回大会発表要旨集録 317-318 頁。
- 米川英樹・原清治・相原総一郎（1999）「会員調査にみる『知』の構造と学会の転換 会員の世代差と学会へのロイヤリティを中心に 」日本教育社会学会・編『教育社会学研究』第 64 集 75-97 頁 東洋館出版社。

（小針 誠）

第3章 大会への参加、大会評価

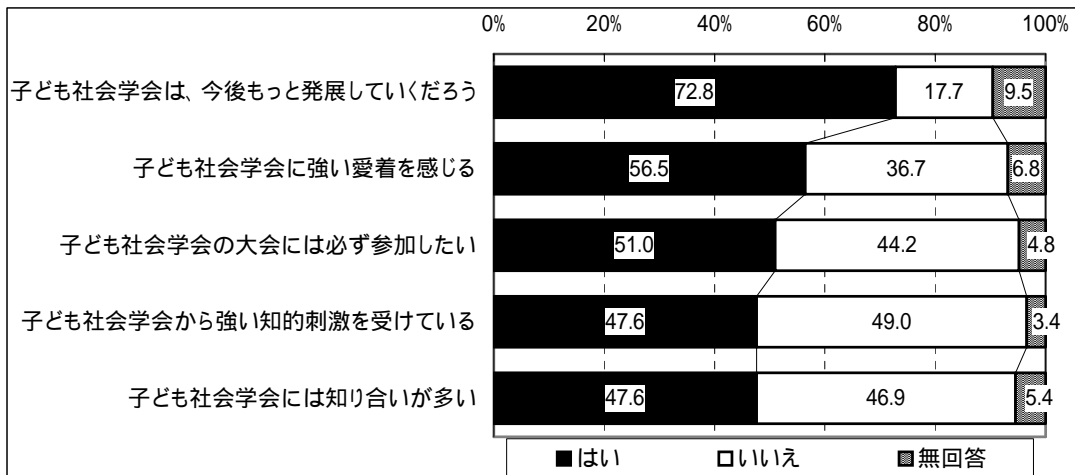
1 はじめに

本章では、会員による日本子ども社会学会への感じ方、そして学会大会への評価について報告することにある。そこで、(1)学会について、(2)大会参加の実態、(3)大会に参加してみたものの評価、の3点のテーマに分けて、学会全体の傾向とともに、会員の諸属性(性別、年齢コーホート、専攻分野、所属年数など)からその特徴を明らかにしていく。本章も、第2章に引き続く形で、分析を進めていくことにしたい。

2 会員にとっての子ども社会学会とは？

学会についての感じ方について、「あなたは、子ども社会学会をどのように評価していますか」と尋ねた以下の5項目の結果についてみていこう。全体で、質問に「はい」と回答した割合が最も高いのは、「子ども社会学会は、今後もっと発展していきましょう」(72.8%)である。会員の7割以上が、今後、子ども社会学会が発展していくものとみている。続いて、「子ども社会学会に強い愛着を感じる」(56.5%)、「子ども社会学会の大会には必ず参加したい」(51.0%)、「子ども社会学会から強い知的刺激を受けている」(47.6%)、「子ども社会学会には知り合いが多い」(47.6%)の順となっている(図3-1)。「強い愛着がある」と「学会大会には必ず参加したい」と思う会員がおおよそ半数はいるということがわかった。

【図3-1】 学会の評価(全体)



これら学会の評価を属性別にみていくと(表3-1)、女性会員に「今後もっと発展していきましょう」、「強い知的刺激を受けている」と回答する割合が男性会員よりも多い。男性会員は「学会の大会には必ず参加したい」、「知り合いが多い」の回答が女性会員よりも多かった。

年齢別では、若年会員では、「強い愛着を感じる」、「学会の大会には必ず参加したい」の回答が多い。中堅会員では、「今後もっと発展していきましょう」の回答が熟練会員

と同様に多い。熟練会員では、「知り合いが多い」の回答が多かった。この「知り合いが多い」について、所属年数についてみたところ「7年以上」の会員の59.6%が多いと回答している。学会所属年数とこれは比例する。一方、「強い愛着を感じる」は若年会員、所属年数「1～3年未満」に多い。若手・所属経験が少ない会員に愛される学会である。

専攻別では、教育分野の会員に、「強い愛着を感じる」、「学会の大会には必ず参加したい」、「知り合いが多い」の回答が多い。とくに「知り合いが多い」は児童分野（40.0%）、その他（41.0%）と比べ71.1%と突出している。一方、児童分野の会員は、専攻3分野中、評価の割合が最も低い。その他の会員は、「強い知的刺激を受けている」の回答が多い。

【表 3-1】 学会の評価×諸属性

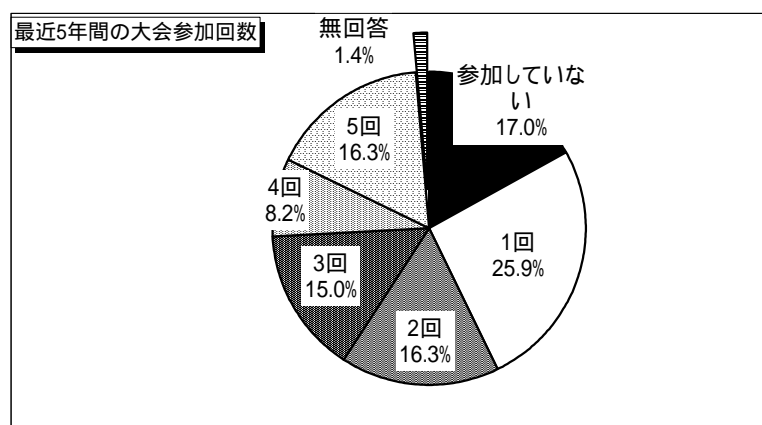
	性別		年齢3段階			所属年数リコード			専攻3分割		
	男	女	20歳～39歳	40歳～49歳	50歳～	1～3年	3～7年	7年以上	児童分野	教育分野	その他
子ども社会学会は、今後もっと発展していきだろう	78.8	85.4	78.0	82.1	80.8	80.8	82.0	78.6	81.5	80.0	79.4
子ども社会学会に強い愛着を感じる	59.8	62.0	67.4	51.3	61.1	65.4	60.8	60.3	56.6	64.4	61.5
子ども社会学会の大会には必ず参加したい	56.8	49.1	65.9	42.5	52.7	48.1	57.4	54.4	47.4	64.4	50.0
子ども社会学会から強い知的刺激を受けている	44.4	56.4	50.0	46.3	51.8	46.4	53.7	48.3	44.8	48.9	56.4
子ども社会学会には知り合いが多い	56.8	43.4	46.5	46.3	57.4	37.0	47.2	59.6	40.0	71.1	41.0

3 大会参加・報告

毎年行われる大会について、参加・報告の実態についてみていくことにしよう。

(1) 大会参加動向

【図 3-2】 最近5年間の大会参加回数（全体）



最近5年間の大会について、いくつ参加したのか（0～5回まで）、その回数を尋ねてみた。全体での結果は、図3-2である。まず、「参加していない」が17.0%、「無回答」が1.4%であった。ゆえに、残りの8割以上の会員は、最低でも1回以上、大会に参加している。回数の多い順番をみていくと、「1回」（25.9%）、「2回」（16.3%）、「5回」（16.3%）、「3回」（15.0%）、「4回」（8.2%）であった。

これらを属性別にみていく（表3-2）。ここで参加回数を「参加していない」、「1～2

回」、「3回以上」の3つのカテゴリーに分けてみた。女性会員は、「参加していない」回答も多いものの、「1~2回」の参加も多い。一方で、男性会員は「3回以上」の回答が51.2%と多い。性別によって、参加頻度が分かれている。

年齢別にみると、若年会員に「1~2回」が多く、熟練会員に「3回以上」が多い。会員所属年数でも、「1~3年未満」の会員は「1~2回」が多く、「7年以上」の会員は「3回以上」が多く、大会参加回数と会員所属年数が比例している。

専攻別でみると、その他会員に「参加していない」回答が34.1%と3分野中、最も多かった。この層は学会大会に参加しない。児童分野会員は、「1~2回」が多い。教育分野会員は、「3回以上」が多く、大会参加傾向についてみると、専攻3分野で特徴がみられる結果となった。

【表 3-2】 最近5年間の大会参加回数×諸属性

最近5年間の大会参加回数(%)	性別		年齢3段階			所属年数リコード			専攻3分割		
	男	女	20歳 ~39歳	40歳 ~49歳	50歳~	1~3年	3~7年	7年以上	児童分野	教育分野	その他
参加していない	13.4	22.8	11.4	21.4	19.0	20.7	16.7	15.0	6.8	15.6	34.1
1~2回	35.4	52.6	52.3	47.6	31.0	72.4	40.7	31.7	52.5	33.3	39.0
3回~	51.2	24.6	36.4	31.0	50.0	6.9	42.6	53.3	40.7	51.1	26.8

(2) 報告動向

大会での報告については、学会発表回数（シンポ・テーマセッション・ワークショップ除く）とシンポ・テーマセッション・ワークショップ報告回数（延べ）の2項目で尋ねてみた。全体の結果が図3-3である。

まず、学会報告回数では、「発表していない」が51.0%と半数ほどであった。大会参加の8割に比べて、報告者は少ないといえるだろう。回数別でみていくと、「1回」（17.7%）、「2回」（15.0%）、「3回」（7.5%）、「4回」（2.7%）、「5回」（2.0%）、「6回」（0.7%）、「7回以上」（2.0%）と続いている。4回以上報告経験のある会員は1割程度である。

次に、シンポジウム・テーマセッション・ワークショップの報告回数であるが、上記の報告回数よりも更に報告経験者が少ない。大会報告者が自由報告であるのに対し、こちらは報告者自体指定されているなど、いくつか制約があるからかもしれないが、「発表していない」が74.8%である。残りの25%のうち、「1回」が13.6%で、以下、「2回」（3.4%）、「3回」（2.7%）、「4回」（1.4%）、「5回」（0.7%）、「6回」（0.7%）、「7回以上」（0.7%）と続く。シンポジウム・テーマセッション・ワークショップが開催される回数自体少ないのだから、ほとんどの会員が報告することもなく、また2回以上することは難しい。

【図 3-3】 学会報告回数（全体）

2回 3回 4回 5回 6回 7回以上 無回答

属性別に大会報告回数と、シンポジウムなどの報告回数についてみてみよう。

表 3-3 は、報告回数を「発表していない」、「1～2 回」、「3 回以上」のカテゴリーに分けて、各属性の回答割合をみたものである。女性会員は、「発表していない」、「1～2 回」の回答が男性会員よりも、やや多い。男性会員が多いのは「3 回以上」である。

年齢別にみると、「発表していない」が多いのは中堅会員であった。若年会員は「1～2 回」の報告割合が 47.7%であり、若手による報告がなされているともいえる。所属年数別にこれをみると、「1～3 年未満」の会員に「発表していない」が多い。また、「7 年以上」の会員が 55.0%もいる。所属年数と報告回数は比例していない。一方で、この「7 年以上」の会員は「3 回以上」の報告する割合も 26.7%と多く、いってみれば「報告する群」と「報告しない群」の 2 派に分かれている。

専攻別にみると、その他の会員が「発表していない」が多い。大会に参加する数が少ないのだから、この結果も頷ける。児童分野が、「1～2 回」の報告が多く、教育分野が「3 回以上」の報告が多くなっている。

【表 3-3】 学会報告回数 × 諸属性

	性別		年齢3段階			所属年数リコード			専攻3分割			
	(%)	男	女	20歳 ～39歳	40歳 ～49歳	50歳～	1～3年	3～7年	7年以上	児童分野	教育分野	その他
発表していない		48.8	52.6	40.9	61.9	53.4	69.0	37.0	55.0	44.1	48.9	65.9
1～2回		31.7	38.6	47.7	23.8	27.6	31.0	51.9	18.3	45.8	28.9	19.5
3回～		19.5	8.8	11.4	14.3	19.0	0.0	11.1	26.7	10.2	22.2	14.6

【表 3-4】 シンポ等報告の有無 × 諸属性

	性別		年齢3段階			所属年数リコード			専攻3分割		
	男	女	20歳 ～39歳	40歳 ～49歳	50歳～	1～3年	3～7年	7年以上	児童分野	教育分野	その他
ある(%)	28.4	19.3	4.5	33.3	31.6	13.8	22.6	30.0	27.1	17.8	25.0

表 3-4 は、シンポジウム・テーマセッション・ワークショップの報告回数が 1 回でもある回答を「報告あり」として、各属性別に示したものである。この報告経験は、女性会員

よりも男性会員の方が多い。年齢別では、中堅・熟練会員に多い。所属年数と比例して多くなっている。専攻別では、児童分野とその他の人々の方が、教育分野と比べて多い。意外に思われるかもしれないが、教育分野の会員は大会参加や発表回数は多いものの、シンポなどの報告経験は、他の分野と比べて多くはないのである。

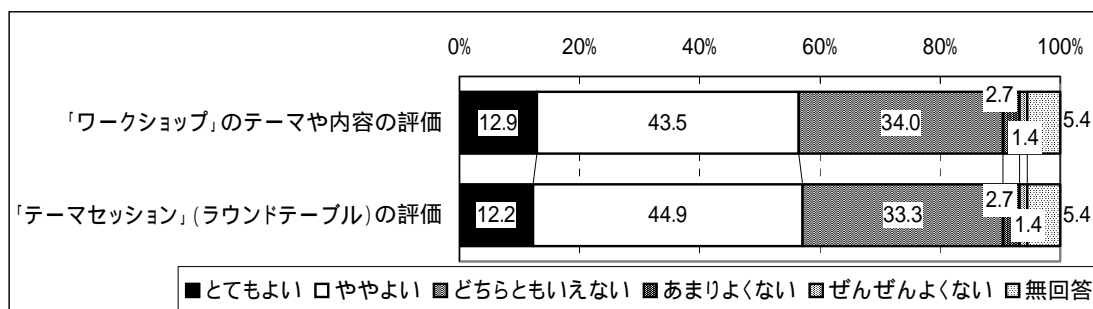
4 大会参加評価

大会に参加してみて、会員はどのような評価をもったのだろうか。

(1) 「ワークショップ」「テーマセッション」(ラウンドテーブル)への評価

図 3-4 は、「ワークショップ」のテーマや内容と、「テーマセッション」(ラウンドテーブル)の評価についての結果である。両方とも、「よい」と思う肯定派が 6 割弱、「どちらともいえない」と思う中間派が 3 割強、「よくない」と思う否定派と「無回答」層でおよそ 1 割となっている。

【図 3-4】「ワークショップ」「テーマセッション」(ラウンドテーブル)の評価(全体)



【表 3-5】「ワークショップ」「テーマセッション」(ラウンドテーブル)の評価 × 諸属性

	性別		年齢3段階			所属年数リコード			専攻3分割		
	男	女	20歳 ~39歳	40歳 ~49歳	50歳~	1~3年	3~7年	7年以上	児童分野	教育分野	その他
「よい(とても+やや)」(%)											
「ワークショップ」のテーマや内容	55.7	67.3	59.1	55.0	64.8	53.6	61.5	61.4	62.5	62.8	52.5
「テーマセッション」(ラウンドテーブル)	56.3	66.7	56.8	61.0	64.2	46.4	65.4	63.2	62.5	59.1	59.0

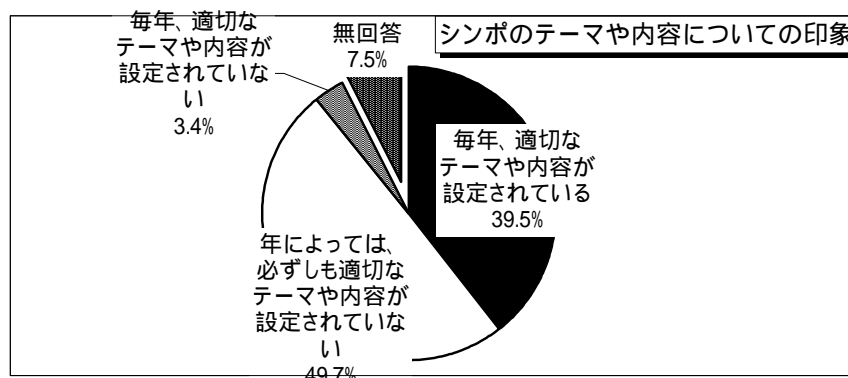
「よい(とても+やや)」と評価した回答を各属性別にみたものが、表 3-5 である。「ワークショップ」「テーマセッション」(ラウンドテーブル)の内容について、男性会員よりも女性会員の方が肯定している。年齢別では、若年会員よりも、熟練会員の方が肯定している。所属年数別では、「1~3年未満」の会員よりも、「3年以上」の会員が肯定している。専攻別では、児童分野の会員の肯定が目立つ。「ワークショップ」については、その他の人々の評価が低い。

(2) シンポジウムの印象

シンポのテーマや内容についての印象はどう思っているのだろうか。全体の結果が図 3-5 である。「毎年、適切なテーマや内容が設定されている」が 39.5%、「年によっては、

必ずしも適切なテーマや内容が設定されていない」が 49.7%、「毎年、適切なテーマや内容が設定されていない」が 3.4%、「無回答」が 7.5%となっている。総じていえば、内容について全面的に異義を唱えているわけではないものの、多数の支持を獲得しているともいえない。およそ半数の会員が「毎年、適切なテーマや内容が設定されていない」との印象をもっている。これは、シンポジウムのテーマを設定する際に考慮すべき結果であろう。同じくこの結果から、会員の多様な関心を網羅することのできる「適切なテーマとは一体何か」という問題も露になったのではないかとも思われる。

【図 3-5】 シンポのテーマや内容についての印象（全体）



属性別にみていくと（表 3-6）、女性会員に「毎年、適切なテーマや内容が設定されている」と回答されているが、男性会員では、「毎年、適切なテーマや内容が設定されていない」「毎年、適切なテーマや内容が設定されていない」の回答が多い。男性会員には、シンポジウムの印象はよくないようだ。

年齢別・所属年数別では、大きな差異が見られてはいないが、中堅会員と「3～7年未満」の会員に、「毎年、適切なテーマや内容が設定されている」がやや多く、若年会員と「1～3年未満」の会員に、「毎年、適切なテーマや内容が設定されていない」がやや多くみられている。

一方、専攻別では差異がみられる。その他の人々が「毎年、適切なテーマや内容が設定されている」とよい印象を持っているのに対して、児童分野では「毎年、適切なテーマや内容が設定されていない」と回答する。専攻によって評価が真二つに分かれている。その中間に教育分野は位置している。よい印象（46.5%）、わるい印象（53.5%）と半々といったところであろうか。

【表 3-6】 シンポのテーマや内容についての印象 × 諸属性

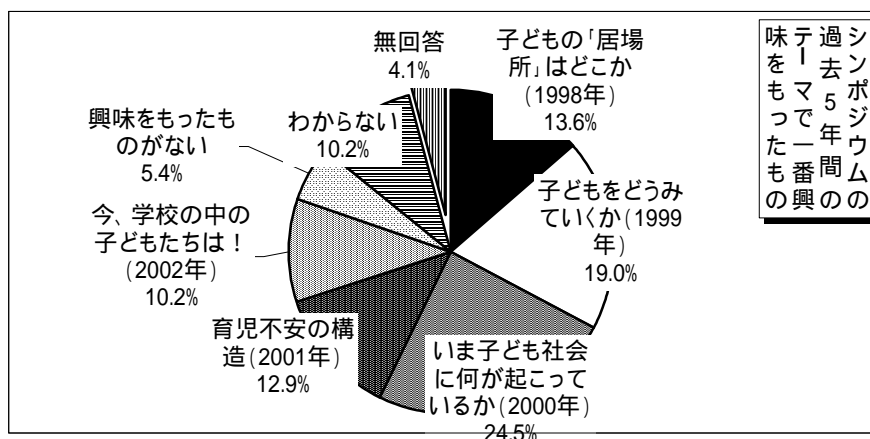
シンポのテーマや内容についての印象(%)	性別		年齢3段階			所属年数リコード			専攻3分割		
	男	女	20歳～39歳	40歳～49歳	50歳～	1～3年	3～7年	7年以上	児童分野	教育分野	その他
毎年、適切なテーマや内容が設定されている	38.0	50.0	41.9	45.0	41.5	42.3	45.1	40.4	29.8	46.5	58.3
年によっては、必ずしも適切なテーマや内容が設定されていない	55.7	50.0	55.8	50.0	54.7	57.7	51.0	54.4	64.9	48.8	41.7
毎年、適切なテーマや内容が設定されていない	6.3	0.0	2.3	5.0	3.8	0.0	3.9	5.3	5.3	4.7	0.0

(3) 興味をもったシンポジウムのテーマ

評価の分かれるシンポジウムのテーマであるが、ここで各会員がシンポジウムの過去 5 年間のテーマで一番興味をもったものについて尋ねてみた。全体の結果が図 3-6 である。まず、「興味をもったものがない」(5.4%)、「わからない」(10.2%)、「無回答」(4.1%)と約 2 割はテーマについて回答されなかったことを確認しておこう。

残り 8 割の中で、5 つのテーマをみていくと、「いま子ども社会に何が起きているか(2000年)」(24.5%)が最も多い。続いて、「子どもをどうみていくか - 方法としてのフィールド・ワークの可能性(1999年)」(19.0%)、「子どもの「居場所」はどこか(1998年)」(13.6%)、「育児不安の構造(2001年)」(12.9%)、「今、学校の中の子どもたちは!(2002年)」(10.2%)の順に興味をもたれている。最近 2 年間(2001年と 2002年)のシンポジウムのテーマは、あまり興味をもってもらえなかったようだ。

【図 3-6】 シンポジウムの過去 5 年間のテーマで一番興味をもったもの(全体)



この傾向を属性別で見ると(表 3-7)、まず、どの属性であっても「いま子ども社会に何が起きているか(2000年)」への回答が多く、上位を占めていることがわかる。このテーマはどの層にも興味を持たれたテーマである。次に、このテーマ以外で興味を持たれた上位の項目について、各属性による比較をしてみたい。こちらは属性によって、興味が異なっている。

女性会員では、「育児不安の構造(2001年)」が第 2 位なのに対し、男性会員では、「子どもをどうみていくか - 方法としてのフィールド・ワークの可能性(1999年)」が第 2 位である。男女間で、興味を引くところが異なる。

興味をもったテーマの第 2 位について、年齢別で見ると、若年会員は「育児不安の構造(2001年)」、中堅会員は「子どもをどうみていくか - 方法としてのフィールド・ワークの可能性(1999年)」、熟練会員は「子どもの「居場所」はどこか(1998年)」である。所属年数別では、「1~3年未満」は「今、学校の中の子どもたちは!(2002年)」、「3~7年未満」は「育児不安の構造(2001年)」と最近のテーマを選ぶ傾向にある。「7年

以上」となると、「子どもをどうみていくか - 方法としてのフィールド・ワークの可能性（1999年）」に興味をもっている。

専攻別でみると、児童分野では「子どもをどうみていくか - 方法としてのフィールド・ワークの可能性（1999年）」に興味を持つ。教育分野では「今、学校の中の子どもたちは！（2002年）」に興味を持つ。その他の人々は「育児不安の構造（2001年）」に興味を持つ。

【表 3-7】 シンポジウムの過去 5 年間のテーマで一番興味をもったもの × 諸属性

(%)	性別		年齢3段階			所属年数リコード			専攻3分割		
	男	女	20歳 ~ 39歳	40歳 ~ 49歳	50歳~	1~3年	3~7年	7年以上	児童分野	教育分野	その他
子どもの「居場所」はどこか(1998年)	11.7	17.2	6.8	11.9	22.2	3.4	16.7	17.5	10.7	15.9	17.1
子どもをどうみていくか(1999年)	24.7	13.8	18.2	23.8	18.5	10.3	20.4	24.6	26.8	15.9	14.6
いま子ども社会に何が起きているか(2000年)	26.0	24.1	20.5	23.8	31.5	37.9	18.5	24.6	28.6	27.3	19.5
育児不安の構造(2001年)	7.8	22.4	20.5	11.9	9.3	13.8	20.4	7.0	10.7	6.8	24.4
今、学校の中の子どもたちは！(2002年)	10.4	12.1	13.6	9.5	7.4	17.2	9.3	8.8	7.1	18.2	7.3
興味をもったものがない	9.1	1.7	11.4	7.1	0.0	3.4	7.4	5.3	10.7	4.5	0.0
わからない	10.4	8.6	9.1	11.9	11.1	13.8	7.4	12.3	5.4	11.4	17.1

このように最近 5 年間のシンポジウムのテーマをみても、興味の持ち方が各会員で違う。「いま子ども社会に何が起きているか（2000年）」の評判はよかったと判断できるが、その前後の年のテーマについては、性別・年齢・所属年数・専攻によって反応が異なっている。会員の評価が分かれている以上、シンポジウムのテーマを設定することは非常に難しい。もちろん、テーマだけではなく、実際にシンポジウムで何が提起され、議論がなされたのが最も重要であることはいままでの間もないが。

5 まとめにかえて

以上、本章では、会員による日本子ども社会学会への感じ方、そして学会大会への参加や報告回数の実態、「テーマセッション」「ワークショップ」「シンポジウム」の内容や評価についてみてきた。会員の属性によって、いくつかの項目では、とくに大会への受けとめ方や評価の仕方が異なっていることを明らかにできたと思う。

決して一枚岩とはいえない学会への評価・態度をもっている会員たちの集まりの中で、日本子ども社会学会は一つの組織として 10 年目を迎えようとしている。調査結果であらわれた多様な実態を、どのように解釈するかによって、今後の学会の運営方針も大きく変わっていくことだろう。果たして、今後はどのような方向に進むのであろうか。

多くの会員が見通している意見 - 「子ども社会学会は、今後もっと発展していきましょう」（全体の 72.8%） - 、これを実現させるためには、何をしたらよいのか。会員各自が考え、皆で議論していく課題である。

（浜島幸司）

第4章 学会運営、事務局への要望

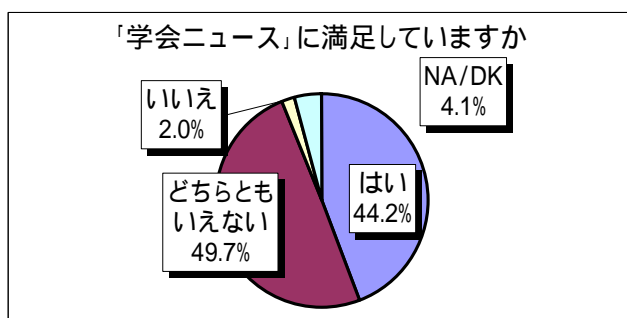
本章の主題は、今回実施した会員調査より、学会運営や事務局に対する学会員の要望を読みとることである。こうした一連の仕事は、学会を運営していく上での顔でもあり、裏方でもあるため様々な要望があると思われる。

ここでは、それぞれの質問項目で取り上げられている事項の現状と、調査の結果をまとめていく。そして、そこから読みとることのできる学会員の要望をみていく。

1 学会ニュースについて

本学会では学会員に向けて「学会ニュース」を年に1回発行している。主な内容は、次回の学会大会の案内と前回の学会大会、総会、予算、決算の報告、各種委員会からのお知らせ、新入会者の紹介などである。最新号は、2002年9月20日発行の第9号である。

【図 4-1】



全体では「満足していますか」との問いに対して「どちらともいえない」とする人が最も多い(49.7%)。続いて、「はい」と答えた人(44.2%)が多く、「いいえ」と回答した人は少なかった(2.0%)。

【表 4-1】「学会ニュース」に満足していますか

	性別		年齢 3 段階			専攻 3 分割		
	男	女	20 歳 ~ 39 歳	40 歳 ~ 49 歳	50 歳 ~	児童分野	教育分野	その他
はい	48.7	40.4	51.2	41.5	46.4	39.7	64.3	36.6
どちらともいえない	48.7	59.6	44.2	58.5	51.8	55.2	35.7	63.4
いいえ	2.6	0.0	4.7	0.0	1.8	5.2	0.0	0.0

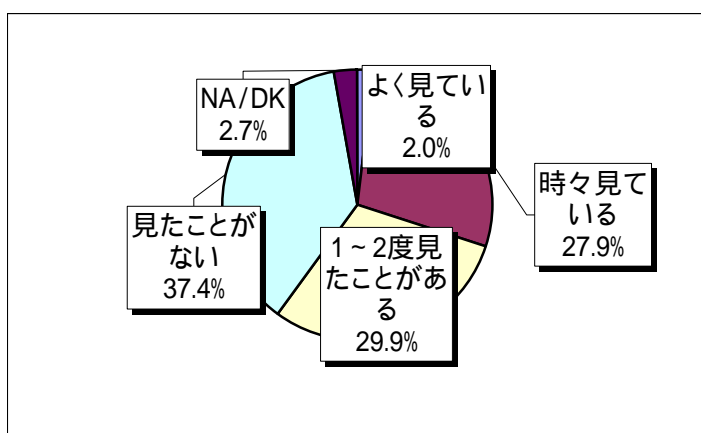
属性別に見ると、表 4-1 のとおりである。肯定的評価が高いのは、性別では男性会員(48.7%)、年齢 3 段階別では若年層(51.2%)、専攻 3 分割では教育分野(64.3%)である。これは他の質問項目との関連から考えると、男性会員、教育分野では役職経験者が多いからであり、若年層では事務局員として直接、学会ニュースの編集に携わっている者がいるからであろう。しかし、多くの会員からは「どちらともいえない」と評価されている。

自由記述では、「もっと国際社会の子どもの動き、情報をのせて欲しい」「内容に偏りがかなりある。様々な编者からの執筆を望む」「会員の小文や消息を載せてほしい」などがあった。自由記述で要望されていた内容を簡単にまとめると、現在の連絡事項だけでなく、研究情報の掲載、執筆者層の拡大、会員交流の要素を持たせるという 3 点について要望が寄せられていた。

2 学会のホームページについて

本学会のホームページは、1999年に発足したメディア活用委員会によって、管理・運営がなされている。ホームページは2000年4月に立ち上げられ、2002年6月から2003年4月で5000件を超えるアクセスがあった。この期間の1日平均アクセス数は、おおよそ16件程度である。主なコンテンツは、本学会の紹介、学会大会の案内や、学会紀要の目次一覧、入退会や所属変更等の事務手続きの案内である。現在、入会手続きに必要な資料は、全てホームページよりダウンロードが可能である。

【図4-2】「ホームページ」をよくみますか



全体的に見ると「見たことがない」が最も多く(37.4%)、続いて「1~2度見たことがある」(29.9%)、「時々見ている」(27.9%)となっている。そして、「よく見ている」学会員は少ない(2.0%)。こうしてみると、半数以上の会員が、1回は学会のホームページを見ていることになるが、頻繁に閲覧されていない。

【表4-2】「ホームページ」をよくみますか

	性別		年齢3段階			専攻3分割		
	男	女	20歳~39歳	40歳~49歳	50歳~	児童分野	教育分野	その他
よく見ている	2.5	1.7	2.3	2.4	1.8	0.0	4.5	2.4
時々見ている	36.7	19.0	45.5	28.6	16.1	28.1	38.6	19.0
1~2度見たことがある	27.8	37.9	27.3	38.1	28.6	35.1	25.0	31.0
見たことがない	32.9	41.4	25.0	31.0	53.6	36.8	31.8	47.6

属性別に見ると、男性会員では「時々見ている」が最も多く(36.7%)、女性会員では「見たことがない」が多い(41.4%)。年齢3段階別では、若年層が「時々見ている」(45.5%)、中堅層が「1~2度見たことがある」(38.1%)、熟練層では「見たことがない」(53.6%)が最も多くなっており、性別と年齢の先有傾向が良く反映されている。専攻別では、児童分野とその他の分野で「見たことがない」が多く(それぞれ36.8%と47.6%)、教育分野では「時々見ている」(38.6%)が最も多い。

自由記述では、「私的要素が強い」「あまり更新されていない」「掲載事項についての責任が不明確」「研究・近著の情報、関連学会の情報を掲載して欲しい」という意見が寄せられた。

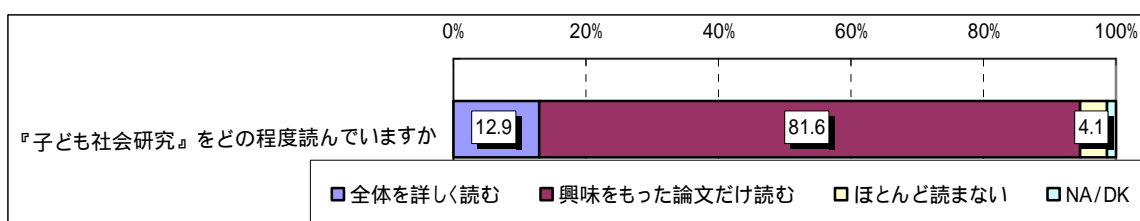
3 学会誌について

本学会の学会誌『子ども社会研究』は、年に1回、学会大会の開催に併せて刊行されており、学会員には1冊ずつ配布される。また、書店や事務局を通じた購入も可能である。創刊号は1995年6月に刊行され、最新号は2002年6月に発行された8号である。

学会誌をどの程度読んでいますか、との問いに、全体では「興味をもった論文だけ読む」という回答が最も多く(81.6%)、「全体を詳しく読む」(12.9%)、「ほとんど読まない」(4.1%)と続く。

属性別では、性別、年齢3段階、専攻3分割に関係なく「興味を持った論文だけ読む」が最も多い。強いていえば、若年層と、児童分野の会員が詳しく読んでいます。

【図4-3】『子ども社会研究』をどの程度読んでいますか

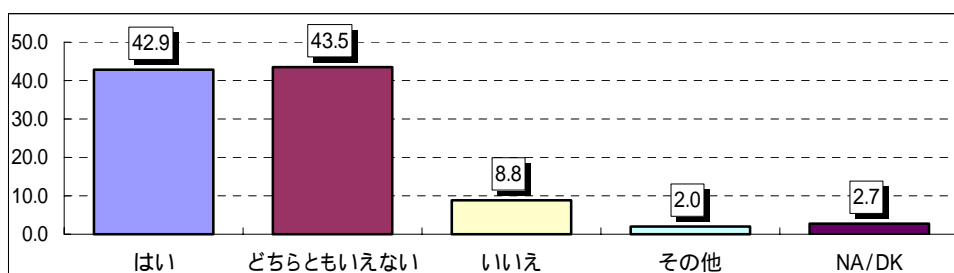


【表4-3】

『子ども社会研究』をどの程度読んでいますか

	性別		年齢3段階			専攻3分割		
	男	女	20歳~39歳	40歳~49歳	50歳~	児童分野	教育分野	その他
全体を詳しく読む	12.3	12.1	17.8	11.9	10.5	15.3	11.4	11.9
興味をもった論文だけ読む	82.7	84.5	77.8	83.3	86.0	83.1	81.8	83.3
ほとんど読まない	4.9	3.4	4.4	4.8	3.5	1.7	6.8	4.8

【図4-4】『子ども社会研究』で、特集を組むべきだと思いますか



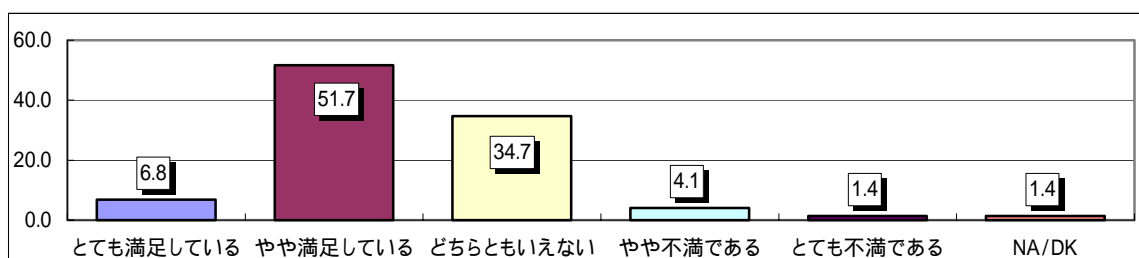
【表4-4】『子ども社会研究』で、特集を組むべきだと思いますか

	性別		年齢3段階			専攻3分割		
	男	女	20歳~39歳	40歳~49歳	50歳~	児童分野	教育分野	その他
はい	43.8	42.1	33.3	48.8	50.0	54.2	41.9	31.7
どちらともいえない	41.3	50.9	46.7	43.9	42.9	35.6	44.2	58.5
いいえ	12.5	5.3	17.8	7.3	3.6	10.2	11.6	4.9
その他	2.5	1.8	2.2	0.0	3.6	0.0	2.3	4.9

学会誌で特集を組むことについては「どちらともいえない」が最も多く(43.5%)、次に「はい」が多い(42.9%)。「いいえ」(8.8%)、「その他」(2.9%)は少ない。性別では、男性会員の方に賛成が多く、年齢3段階では若年層よりも熟練層の方に賛成が多い。専攻3分割では児童分野で半数以上が特集を組むべきだとなっており、逆に、その他の分野では半数以上が、どちらともいえないとしている。

自由記述をみると、「時には特集を組むのも良い」という特集を組む頻度に関する意見や、「保育について」というテーマに関する意見、「組むべき。依頼論文と投稿論文の両方が必要」という論文の掲載手続きに関する意見が寄せられている。

【図 4-5】『子ども社会研究』の内容に満足していますか



【表 4-5】『子ども社会研究』の内容に満足していますか

	性別		年齢3段階			専攻3分割		
	男	女	20歳~39歳	40歳~49歳	50歳~	児童分野	教育分野	その他
とても満足している	6.2	8.6	11.1	4.8	5.3	6.8	4.5	9.5
やや満足している	46.9	58.6	62.2	52.4	43.9	52.5	54.5	50.0
どちらともいえない	38.3	31.0	20.0	33.3	49.1	33.9	36.4	35.7
やや不満である	6.2	1.7	4.4	7.1	1.8	5.1	4.5	2.4
とても不満である	2.5	0.0	2.2	2.4	0.0	1.7	0.0	2.4

内容の満足度については、「やや満足している」が最も多く(51.7%)、次に「どちらともいえない」が多い(34.7%)。続いて、「とても満足している」(6.8%)、「やや不満である」(4.1%)、「とても不満である」(1.4%)となっている。

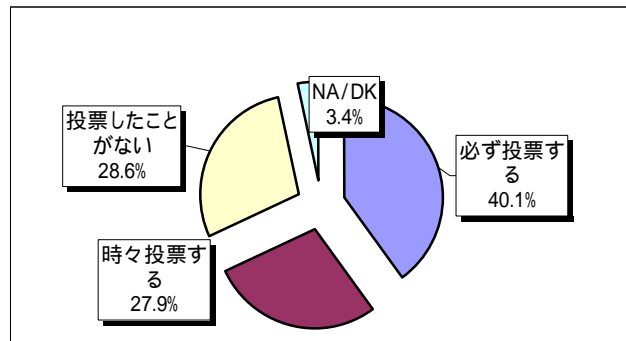
性別では、男性会員より女性会員の満足度が高い。年齢3段階では、熟練層より若年層の満足度が高い。専攻3分割では、あまり差がない。

自由記述では、「表紙の字体に抵抗を感じる」という装幀に関する意見、「研究情報だけでなく研究動向を掲載して欲しい」「社会学系統の内容が多すぎる」「子どもに関わる緊急課題を対話形式で掲載」「外国の文献を紹介して欲しい」という内容に関する意見、「風評が良くない」「内容をもっと高度なものにしたい」という評価に関する意見、「英文抄録を各論文の直後に掲載して欲しい」「特集を組み、依頼論文を掲載」「抜き刷りを購入できるようにして欲しい」「編集委員会に偏りがある」「投稿の時期を11月末に戻して欲しい」という編集等に関する意見が寄せられた。

4 理事選挙について

本学会の学会運営は、学会員の選挙により選出された15名の当選理事と、当選理事の互選による会長1名、会長が推薦する5名程度の推薦理事によって構成される理事会によって行われている。

【図 4-6】理事選挙でどの程度投票しますか



理事選挙の全体的な傾向としては、「必ず投票する」が最も多く(40.1%)、続いて「投票したことがない」(28.6%)、「時々投票する」(27.9%)となっている。

【表 4-6】理事選挙でどの程度投票しますか

	性別		年齢 3 段階			専攻 3 分割		
	男	女	20 歳 ~ 39 歳	40 歳 ~ 49 歳	50 歳 ~	児童分野	教育分野	その他
必ず投票する	51.9	28.1	36.4	38.1	49.1	34.5	60.5	31.7
時々投票する	27.8	28.1	20.5	28.6	36.4	36.2	23.3	24.4
投票したことがない	20.3	43.9	43.2	33.3	14.5	29.3	16.3	43.9

属性別に見ると、男性会員の半数以上が「必ず投票する」と回答しており(51.9%)、逆に、女性会員は半数近くが「投票したことがない」と回答している(43.9%)。年齢別 3 段階では、若年層は「投票したことがない」が最も多く(43.2%)、熟練層では「必ず投票する」が多い(49.1%)。児童分野では「時々投票する」(36.2%)、教育分野では「必ず投票する」(60.5%)、その他では「投票したことがない」(43.9%)が最も多くなっている。

5 役職経験者について

【表 4-7】理事、評議委員、監査、各種委員、事務局員の経験がありますか

	全体	性別		年齢 3 段階			専攻 3 分割		
		男	女	20 歳 ~ 39 歳	40 歳 ~ 49 歳	50 歳 ~	児童分野	教育分野	その他
ある	25.2	36.3	10.5	18.2	14.3	39.3	19.0	40.9	17.1
ない	74.8	63.8	89.5	81.8	85.7	60.7	81.0	59.1	82.9

役職経験者は、性別では女性会員より男性会員の方が多い(36.3%)。年齢 3 段階では熟練層が多く(39.3%)、専攻 3 分割では教育分野が多い(40.9%)。

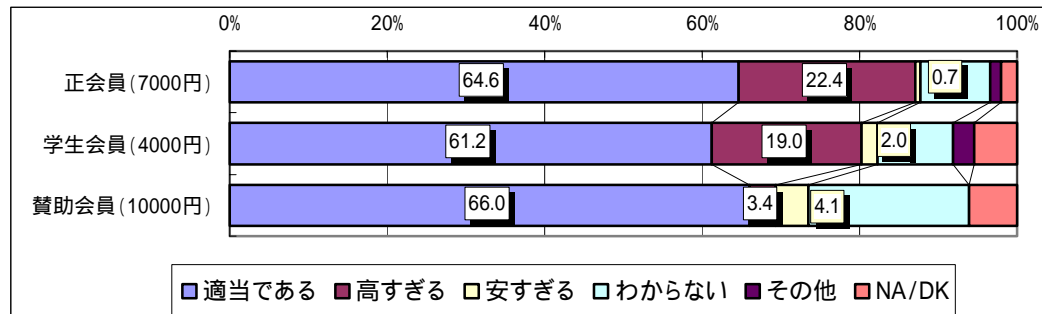
こうしてみると、理事選挙によく投票している会員層と、役職を経験している会員層が一致していることが分かる。

6 学会費について

全体では、正会員、学生会員、賛助会員ともに「適当である」とする回答が最も多い（それぞれ 64.6%、61.2%、66.0%）。

また、いずれの会員層においても、「適当である」とした学会員が多い。

【図 4-7】学会費について



【表 4-8】学会費について

		性別		年齢 3 段階			専攻 3 分割		
		男	女	20 歳 ~ 39 歳	40 歳 ~ 49 歳	50 歳 ~	児童分野	教育分野	その他
正会員 (7000 円) は、	適当である	65.4	66.7	66.7	64.3	67.9	61.0	75.0	63.4
	高すぎる	27.2	19.3	20.0	26.2	23.2	28.8	15.9	22.0
	安すぎる	1.2	0.0	0.0	0.0	1.8	0.0	2.3	0.0
	わからない	4.9	12.3	11.1	7.1	7.1	10.2	4.5	12.2
	その他	1.2	1.8	2.2	2.4	0.0	0.0	2.3	2.4
学生会員 (4000 円) は、	適当である	64.9	64.3	60.5	67.5	65.5	63.8	69.0	61.5
	高すぎる	22.1	17.9	14.0	22.5	23.6	22.4	21.4	15.4
	安すぎる	3.9	0.0	2.3	0.0	3.6	3.4	0.0	2.6
	わからない	6.5	14.3	16.3	7.5	7.3	8.6	4.8	17.9
	その他	2.6	3.6	7.0	2.5	0.0	1.7	4.8	2.6
賛助会員 (10000 円) は、	適当である	79.2	58.2	71.4	70.7	70.4	70.2	76.2	64.1
	高すぎる	1.3	7.3	2.4	4.9	3.7	3.5	2.4	5.1
	安すぎる	5.2	3.6	0.0	0.0	11.1	5.3	4.8	2.6
	わからない	14.3	30.9	26.2	24.4	14.8	21.1	16.7	28.2

7 自由記述について

最後に自由記述みていく。自由記述では、大きく分けると、交流に関する意見、大会運営に関する意見、人事に関する意見、研究に関する意見、という4つに分けることができた。ここでは、それぞれについて、なるべく多くの自由記述を紹介したうえで、本章のテーマである学会運営や事務局に対する要望という観点から見ていきたい。

(1) 交流に関する意見

自由記述：「教育社会学会色が強くなっている。シンポジウムやワークショップ等で、意識的に多領域や方法等を取り上げていくことで魅力が増す」「教育、社会教育、医学（臨床）、生理学、法学等の他分野との積極的連携が必要」「子ども社会に対する学際的なアプローチを持ち続けていくべき。現場と問題の共有化を図る」「研究者と実践者の交流をもっと大切にしてほしいです」「比較的多様な分野の会員が集まっているため、多様な討議やアドバイスを得られる」「多様性が特色」「学会が、現場実践の理論的支えになるように願う」「学際的研究の発展が期待される」

こうしてみると、本学会の設立時に企図した子ども研究に対して多様なアプローチをとるといふ試みは、一応の成果を収めているといえよう。これからも、多くの研究領域や、教育、実践等の現場との交流を担っていくことが、本学会の特色でもあり、期待されている役割でもある。

(2) 大会運営に関する意見

自由記述：「学会大会の開催を8月にしてはどうか」「大会での発表の資料を、後で入手できないか」「参加の有無にかかわらず、学会の抄録集を事前に申し込みたい」「教育社会学会が親学会でないことの周知させる」「理事、役員等の高齢化」「シンポジウムで、不勉強で一般的な意見が多くみられた」「他学会と開催日が重なる」「若い人が少ない、雰囲気がかたい」「事務局の対応が適切かつ迅速」「事務局員負担が過剰ではないか心配」「テーマの継続」「全国を視野に入れた運営」「シンポジウムの題目に魅力がない。題目と演者を公募したらどうか」「現場と直結する<臨床>の時間を学会のプログラムに入れることを望む」「若い研究者の登龍門にしたい」「本来会員となるべき人々が未参加、会員数の増加を図るべき」「ていねいな会の運営に感動」「大会が毎年いろんなところで開かれているのがよい」

気になる意見としては、大会開催の日程に関することである。本学会は、基本的には6月の第2、第4土曜日を含む土・日曜日を開催日として、大会校と調整を図っている。確かに、6月は教育関連の学会が多く開催されている。これは、8月に開催されている日本教育学会との日程が重ならないように、時期的に前へ、ずらしている学会の開催日が6月頃になっているためと考えられる。これに伴い、発表申込が3月であることも、やや、中途半端な感じもある。また、以前は、小学校・中学校・高等学校の多くで、第2、第4土曜日が休みであったために、学校現場に所属する会員が参加しやすいように配慮したためである。

しかし、本学会大会は既に9回を数えており、6月開催が定着したようでもある。大会の開催時期は、大変重要な問題である。6月開催を継続するのか、他の時期に移行するのかに

については、慎重に議論する必要がある。

(3) 人事に関する意見

自由記述：「特定の人との関係者が多過ぎる。仲間以外にも建設的な意見を出すべき」「特集やテーマを決めるとき、全体のバランスをとるべき」「社会学系統の研究者の集まりという感じがする。『子ども社会』学で『子ども』社会学ではない」「社会学が多い。広く人材を求めるべき」「学会運営がオープンでよい」「自由な雰囲気の研究の情報交換ができる」「新しい学会の自由度をもち続けてほしい」「一部の大学出身者や、分野への偏りを感じる」「若手にチャンス。一部の大学にかたよりすぎ」「発表の内容、発表者、パネリスト、司会等に片寄りを感じる」

ここでも、教育社会学の関係者が多すぎるといった意見が見受けられた。これは、本学会の設立の過程から考えるとやむを得ないという面もあるだろう。しかし、学会員になることや、学会発表、ラウンドテーブル等の発表、理事選挙は、全ての学会員に等しくチャンスが与えられている。そのように考えると、非難されるというよりもむしろ、教育社会学の関係者が活発に研究活動や学会運営に携わり、本学会を支えているという見方もできないだろうか。

(4) 研究に関する意見

自由記述：「研究が表面的。単なる業績稼ぎの発表が多い。自分も反省」「『子ども』の社会学なのか、『子ども社会』の学なのかという課題を深め、両者の緊張関係を保ちたい」「小学校就学前に関する部会が弱い」「研究紀要等、研究レベルが今一歩。しかし、今後の発展が期待できる」「何物にもとられることのない研究姿勢が魅力」「質問紙による調査、実験、外国との比較などの方法を“客観的”であるとして無反省に取り組むものが多い。子ども社会や子どもそのものの現実の在り様を真正面から真摯にとりくむべき」「『ただ調べただけ』の発表が多い」「海外との比較研究やアンケート調査の発表に対する自己省察が欠けている」「学問的に意義ある討論が成立しにくい」「実践者の報告が少ない」「子どもの問題を社会的にとらえることは今後ますます必要になる」「<教育>という面からの迫り方が多すぎ。子どものくらしの面からの迫り方が少なすぎ」「方法論として、事例研究、参与観察、エスノグラフィーについて取り上げてほしい。テーマとして外国籍児童生徒、ニューカマーの子どもを取り上げてほしい」「若い会員の実践的研究が欲しい」「ポレミックなイシューを課題研究で取り上げて欲しい」「教育現場と政策など、理論もしっかり押さえてほしい」

ここでは、研究対象や研究方法、研究のレベルに関する意見が寄せられている。なかでも、研究のレベルに関する意見は手厳しい面もあるが、自分と専攻分野が異なる研究者や、実践現場に所属する学会員の発表に対して、自らの専攻分野の基準を一律に押しつけ、研究レベルが低いと見なすことを戒めなければ、本学会の特色である多様性が失われてしまうことになりかねない。しかし同時に、現在寄せられている厳しい省察を求める声を無視しては、本学会の学問研究の発展はないだろう。困難な課題ではあるが、両者のバランスをとっていくことが、本学会の存在意義と発展のポイントとなりそうである。

8 まとめ

本章では、ここまで学会運営や事務局への要望に関する各質問項目を見てきた。ここでは、最後のまとめとして、多く寄せられていた2つの要望についてふれておく。

1つめは、本学会が持っている3つのメディアの内容についての要望である。

現状では、学会ニュースでは、学会大会で開催されたワークショップやシンポジウムの報告、予算や決算を含む総会の報告が掲載されている。ホームページには、入退会や、所属の変更などの事務的なことや、過去の学会大会のプログラム、学会紀要の目次一覧、役員一覧などの全般的な情報が掲載されている。学会誌『子ども社会研究』には、研究論文、実践論文、研究情報、研究ノート、書評などが掲載されている。

今回の学会員調査で、上記の3つのメディアに欠如、もしくは不足している内容として、会員間の交流、研究者と現場の相互交流、国際的、現代的な子どもに関わる情報、書籍に関する情報、関連学会の情報等が指摘された。

学会誌や学会ニュースは、紙幅の増加はそのまま必要経費の増加につながる。ホームページは会員以外にも情報が伝わってしまう面がある。また、いずれの要望をかなえるにしても、理事や事務局、各種委員の負担を増やすことになる。

しかし、これらの要望のなかには、比較的簡単に実現できそうなものもあるので今後に期待したい。

2つめは、人事に関する要望である。自由記述の至る箇所で、人事面での偏りを批判する意見が記されていた。

しかしながら、先にも述べたように、本学会では、学会員になること、研究発表やワークショップ等を開催すること、理事選挙で投票することは、原則として全学会員に平等である。もちろん、本学会創設の経緯と経過の期間を考慮すれば、若干の偏りは、やむを得ないだろう。

その一方で、理事選挙の投票率が芳しくないことも、今回の調査で明らかになった事実である。理事選挙によく投票している会員層と、役職を経験している会員層が重なっていることを考えれば、人事面での偏り以上に、理事選挙の投票率の方が問題のようである。また、本学会の決算を見れば明らかのように、理事会開催にあたって理事への交通費は全く支給されていない。

こうした点を考慮すれば、一方的な非難は少し行き過ぎのようでもある。学会運営に参加する機会は等しく開かれているのだから、むしろ、自主的かつ活発に本学会を支えてくれているのは、未だ、一部の会員層にすぎず、今後、更に多くの学会員の手によって、学会運営が行われていくよう期待すべきなのかもしれない。

本学会の学会運営に対して、自由記述をはじめとして多くの要望が寄せられた。そこには、多くの学会員が、本学会に対して積極的に関わろうとしている意識が感じられた。こうして寄せられた要望を少しずつでも実現していくことが、本学会の更なる発展のポイントといえるのではないだろうか。

(中田周作)

1 学会発足時の「呼びかけ」に照らした学会の現状

手元に、平成6年4月20日付で、本学会の発起人によって出された文書がある。「『日本子ども社会学会』入会のお誘い」というタイトルが付されたこの文書は、学会発足に際して発起人たちが、広く、関係する人々に入会を呼びかけた文書である（以下、「呼びかけ」と記載）。入会を呼びかける以上は、学会として何を目指し、何をしようとするのか、目的やビジョンの提示が必要である。この文書には、その目的やビジョンが書かれている。

発足から10年近くを経て、この目的やビジョンはどうなったのか。「10年」という区切りは、学会としての自省の区切りでもある。今回、実施された会員調査も、自省としての意味をもっていよう。会員調査の結果から知ることのできる学会の今は、発足時の目的やビジョンに照らしてどのような状況にあるのか。小論では、発足時の目的・ビジョンと調査の結果とを引き比べつつ、学会としての自省につながる知見をまとめてみたい。

ただ、その際、気がかりなのは、『報告書』の他の部分でも言及されていることと思うが、有効回答率の低さである（29.4%）。その点で以下の記述も、結果の代表性に問題が残されていることを承知しながらの整理である。

1 子どもの現状を的確に捉えるために……

「呼びかけ」を読み返して強く印象づけられるのは、本学会が、日本の子どもたち、それも決して好ましいとはいえない状況にある子どもたちを知ることに関心を持って発足した点である。「呼びかけ」は、「『日本の子どもは今危機にある。』『子どもは今見えなくなりつつある。』こう語られて既に久しいものがあります。」という一文から始まっている。そして、にもかかわらず、「研究成果を交流させ、子ども研究を統合的な視点から深め進めることは、まだ十分とはいえない」と述べている。危機にあり、見えなくなりつつあると言われる子どもたちの現状を捉えたい。互いに交流を重ねるなかで、子どもたちの現状を的確に描きたい。学会の目的は、そこにあったものと推測される。

この点を踏まえて今回の調査結果をみると、次のような結果が目にとまる。第一は、会員が関心をもっている研究分野についてである。調査では、発足当時に作成した「子ども社会学会」の研究分野について、会員に関心度を尋ねている。その結果において、「とても関心がある」会員の割合が特に高かった項目をあげると、「子どもと親、家族」（68.7%）、「子どもの遊び集団と環境」（63.9%）、「子ども自身の文化」（58.5%）の3つである。会員の関心は、現実の子どもとそれをとりまく環境に向けられている。子どもたちの今を捉えることに会員の関心は集まっている。「子どもの現状を的確に描く」という学会発足時の目的は、今なお、会員に共有されていると言えそうである。

この点が確認できるのは、会員が主にとっている研究方法である。「3つまで」という条件で尋ねた研究方法で中心を占めていたのは、「観察・フィールドワーク」（60.5%）と「調査的方法」（57.8%）である。本学会には、子どもの現状把握につながる方法をとっている会員が多い。この点も、本学会が、子どもの現状の的確な把握を目指す学会で

あることを示している。

ちなみに、過去5年間の「シンポジウム」のテーマについて、最も多くの会員の興味を惹いていたのが、「いま子ども社会に何が起きているのか」(24.5%)であり、次いで「子どもをどうみていくか」である。この点にも、上記の傾向が現れている。

2 「総合性」「多様性」を大事にして……

「呼びかけ」において強調されているのが、本学会の「総合性」「多様性」である。「『子ども社会学会』とは、「子ども社会」を総合的に研究する学会」であるとは、「呼びかけ」における本学会の定義である。また、「呼びかけ」では、研究方法が「多岐にわたり、きわめて学際的なものとなる」ことが示され、「社会学」以下、方法を提供してくれる14の学問が列挙されている。この点に、本学会が「総合性」と「多様性」を重視しつつ発足したことが窺える。

では、その現状はどうか。会員に「現在の専攻」を尋ねた結果をみると、「その他」を含めて選択肢としてあげた22の項目すべてに誰かが答えている。しかも、「保育学・幼児教育学」(16.3%)あるいは「教育社会学」(14.3%)に若干の“集中”がみられるものの、あとは多くの学問に“散在”している。「大学・短大・専修学校の専任」「研究所の専任・専従」の会員に主な「担当授業科目」を尋ねた結果でも、選択肢としてあげた22の項目のうち、19の項目に誰かが答えている。ここでも何かに“集中”するというよりも、多くに“散在”する状況にある。これをみる限り、本学会の会員の学問的バックグラウンドは多様である。多様なアカデミック・ワールドを背景にしつつ、会員が集まっているのが本学会である。本学会では「多彩なアプローチができる」とする会員の割合が7割近く(68.7%)に及んでいる点にも、このことは示されている。そしてこの点において、本学会は、「多様性」重視という当初のビジョンを、今も有している。

ただ、そうしたなかで気がかりなのは、学会としての「核」の所在である。確かに「子ども社会」を対象としている点で会員の関心はある程度、集約されている。しかし、それは研究の対象においてである。後からみるように、本学会の会員はアカデミズム志向である。アカデミックな志向の強い人々が、それぞれのアカデミック・ワールドを背景にしつつ集まっているのが本学会だとしたら、また、そのアカデミック・ワールドが多様であるとしたら、「多様性」は「求心力を欠いた多様性」になりはしまいか。「多様性」は決して「総合性」ではない。果たして本学会が、発足した当時にビジョンとして描いたように、「子ども社会」を「総合的」に研究する「学際的」な学会となり得ているかどうか、その点については留保が必要なようである。

3 実践的・臨床的な研究をも巻き込んで……

ところで、今も触れたところであるが、調査の結果をみて予想外だったのは、アカデミックな学問研究の場をバックグラウンドとする会員の多さである。会員の「最終学歴」は、博士課程42.9%、修士課程39.5%となっている。会員の61.2%が高等教育機関勤務で

あり、15.0%が大学院生である。むろん、学会は、アカデミズムに依拠する組織・機関であり、会員のバックグラウンドがアカデミックな学問研究の場にあって不思議はない。しかし、翻って「呼びかけ」を読むと、そこには「実践的・臨床的な、アクチュアルな研究をも含む」ことが謳われている。具体的には、大学教員、大学院生のみならず、学校教育実践家、社会教育実践家、福祉関係者など各領域からの参加を求めている。本学会のそのようなビジョンは、どうなったのか。実際には、実践家の参加が少なく、実践とのつながりも希薄なようである。

このことに関連して調査結果の「入会の理由」をみると、「自分の研究に役立てるため」(71.4%)、「『子どもに関する研究』の最先端の情報を得るため」(49.0%)、「自分の研究成果を発表するため」(38.1%)という理由が、「職場や教育現場での実践に役立てるため」(21.1%)という理由を大きく上回っている。ここで言われている「研究」には、「実践的・臨床的な、アクチュアルな研究」も含まれている可能性がないわけではないが、みるところ、本学会はアカデミックな研究志向が強いようである。そしてその分、逆に、当初意図していた「実践的・臨床的な研究」を十分に取込み得ていないようである。

ちなみに、会員もこのことに気づき、意識しているようである。この点は、「今後、どのようなスタイルの研究が発展することを期待するか」を尋ねた質問の結果に現れている。すなわち、4人に3人までが(77.6%)が「実践的な研究」の発展を期待しており、この割合は、他のスタイルの場合よりも高くなっている。

4 学会としての「自省」のために

以上、学会発足時の「呼びかけ」に照らして、本学会の現状をスケッチしてみた。その結果は……、たとえば、「子どもの現状を的確に捉えるために」発足した本学会は、今もその志を継いでいた。「多様性」を重視する姿勢も、そのまま活かされていた。しかし、その多様性がともすると中心を失い、当初、構想されたような「総合性」に行き着かない現状が見て取れた。また、アカデミックな学問研究においては会員を惹きつけていたが、「実践的・臨床的な研究を巻き込んで……」という当初の構想においては未だ不十分なところを残していた。

冒頭にも述べたように、本調査には学会としての自省の意味が込められている。小論では、調査の結果が自省につながるよう、あえて学会発足時の目的・ビジョンを持ち出した。むろん、発足時の目的・ビジョンはあくまでもその時点のものであって、必ずしもそれにこだわる必要はない。新たな目的・ビジョンを掲げて新たな出発をしても構わない。

調査の結果をみると「60%」という割合がマジック・ナンバーのように見えてくる。学会の「学会らしさ」を示す「大会」へ「必ず参加したい」という会員の割合は51.0%、「『子ども社会研究』の内容に満足している」会員の割合は58.5%、「理事選挙」に投票する会員の割合は、「必ず」と「時々」を合わせて68.0%である。このように並べてみると、会員の6割前後が本学会に目を向けている。ちなみに、「年会費」が「適当である」

とする会員の割合もほぼ6割（64.6%）となっている。「子ども社会学会に強い愛着を感じる」という会員の割合もほぼ6割である（56.5%）。

多分、この調査に回答を寄せた会員は、学会への関与が強い会員であろう。そのことを考えると「60%」という数字は、さらに割り引く必要がある。学会が、会員の望む姿になっているかどうか。発足当初の目的・ビジョンにこだわるのか、それとも新たな目的・ビジョンを打ち出すのか、その判断には、会員のこうした状況も考慮する必要がある。「60%」というのは、評価で言えば「可」と「不可」の境目である。調査の結果では「可」でもなし、「不可」でもなし、というのが本学会の現状である。回答を寄せなかった「声なき会員」のことも考えに入れれば、「やや不可」というのが現実である。

こうした学会の現状に、どのように応えていくのか。発足当初の目的・ビジョンをどう考えるかも含めて、調査結果を前に、筆者自身、複雑な思いでいる。「自省」を今後はどうつなげるか、学会としても難しい現状にあると言えそうである。

（飯田浩之）

2 「子ども社会・学会」の専門性と実践性を問う

1 はじめに

調査専門委員会の委員からの精密な分析が行われているのでここでは 1994 年以来学会にかかわってきたということから感想風に簡単ではあるが以下述べてみたい。

2 データのもつ意味は重いということ

今回のデータは学会の会員全体の意見を反映しているものではないとしても、学会に積極的に今後とも関わろうとしている「層」の考えとして読む必要があり、これからラウンドテーブルなどをとおしてテーマを特化して突っ込んだ議論が必要である。例えば専攻分野の裾野の広さからみて「保育学/幼児教育学」と「教育社会学」をメルクマールとしない学際性を軸にした議論を期待したい。

3 「子ども社会・学会」の専門性と実践性を問うために

専攻分野の分布は理解できた。ではその「分野」のさらなる領域にはどんなものがあるのか知りたい。～学研究～専攻～専修というかつての「講座制」に回帰するのでなく、会員の関心どころ、特化されたトピックがあると思う。～学でもなく、～論もなく、～についての研究でもない。～の研究という具体的なトピックがあるはずである。それこそ子ども社会の「諸問題」を顕わしていると考えられるのである。

また、研究の方法論はどうだろうか？教育学研究に 4 領域があると一般的に指摘されてきた。*理論的研究 *実証的研究 *実験的研究 *歴史的研究である。今回の調査では、「研究活動の研究手法」についても訊いている。観察/フィールドワーク(61%)について、調査的方法(58%)である。問題はこの先であろう。私たちが議論したいのはそれぞれの研究方法が子どもの(子ども社会の)実態をどう明らかにできたのかできなかったのか、という議論である。そこへ導くおおいなる基礎データを提供したのである。

さらに、今後議論していきたい項目として会員の「現在の所属分野」と「授業担当科目」との関連性である。履修学生(一般人、科目等履修生)はどんな目的で履修したのか、資格をとるためなのか、教養のためかなど、あるいは子ども学の学位を目指すのか。

対象によって「指導方法」も異なるであろう。つまり、<教養-資格-専門>によって会員は大学における「教育実践」と「指導原理」を峻別しているのではないか？所属部局分野と担当科目と履修生の「重層的な実践」の構造を議論していきたいものである。

この問題は「子ども社会学教育」の課題につながると思われる。

4 子ども社会学会の「学際性」と魅力の構造

子ども社会学会に対する評価に注目したい。多彩なアプローチができる(69%)のは学際的な学会を意味している。魅力的な学会の割合も 6 割近い。また学際的であることは「イデオロギー」に捕われないことでもあろう(4 割強)。そこでさらに突っ込んで、アプローチが学際的であることが子ども社会の何がどうわかったのか、またその「成果」はなんのためにあるのか、まで言及できるのかという課題である。

子ども「問題」を対象とした研究は「ゾレン」性を帯びる。一度ザインとゾレンという

古くて新しい問題についても議論していいのではないか。

5 展望

27%の回収率はまあまあではないか？すでに指摘されているように回答した会員は学会に魅力をもち積極的に関わってきたかこれからさらに関わろうとする問題意識の強い層である。一般会員と役職会員（経験者）との意識のズレ、子どもの現実構成を的確に捕らえようとする学会の姿勢、自分の研究のための学会、などなど学会の将来を占う基礎データを出した。これからどういう議論ができるのか、という強い課題意識にいま囚われている。学会というアカデミズムの水準を維持していかなければならない。そのことは会員の研究に役立つ学会でなければならぬだろう。しかしいっぽうで子どもの現実、解決を要請する問題が私たちの眼前にある。

会員のそれぞれの「生産点」と「知」の交歓を追いもとめる議論が提起されることを期待したい。子ども社会学会の個性は専門性の「拡がり」と「具体的諸問題」との「緊張関係」にあると考えている。

この「緊張関係」は無論、「知」に裏づけられたものであるがゆえに、また学会の活性源でもある。

（望月重信）

3 「役職等経験者」はどんな人たちか？

1 はじめに

学会のありようを考えると、理事などの役職者がどんな人たちであり、学会にどの程度愛着を持ち、学会にどのように関与し、学会をどう評価し、学会に何を期待しているか、といった実態をデータから読みとることは、きわめて重要であると考えられる。

本調査の結果によれば、「理事、評議員、監査、各種委員、事務局員」の経験がある会員は、有効回答者 147 人のうち、36 人（24.5%）であり、それらの経験がない会員は 107 人（72.8%）である。なお、無回答が 4 人（2.7%）となっている。

本節では、上記のような役職等の経験がある会員を「役職等経験者」（36 人）、それらの経験がない会員を「一般会員」（107 人）と呼ぶこととし、両者の間に際立った差が見られる質問項目を取り出すことによって、日本子ども社会学会の「役職等経験者」の特徴を見出したい。ここで取り上げる質問項目は、原則として、統計上の有意差（5%水準以下）が認められたもののみとする。なお、本節で用いる%は、各質問項目ごとに無回答を除いて算出されている。また、図表は用いず、%を表示する場合は実数も示すことによって、わずか 36 人という少数の「役職等経験者」のイメージが不当にゆがめられないよう注意したい。

2 調査の結果

(1) 属性等からみた特徴

役職等経験が少ない女性

全回答者の性別を見ると、男性会員 56.5%、女性会員 39.5%である（無回答 4.1%）。ところが、「一般会員」と「役職等経験者」とでは、男女の割合が大きく異なる。「一般会員」では男女それぞれ 50.0%（102 人中各 51 人）であるが、「役職等経験者」では男性 82.9%（35 人中 29 人）、女性 17.1%（35 人中 6 人）となる。このように「役職等経験者」の中では、女性の割合がきわめて低い。

なお、性別に「役職等経験者」の占める率を見ると、男性 36.8%（80 人中 29 人）、女性 10.5%（57 人中 6 人）となり、女性の%の低さが目立っている（すでに述べたように、無回答を除いて%が算出されており、以下のデータも同様である）。

役職等経験者の高齢化

65 歳以上のいわゆる高齢者会員は、全回答者のうち 12.9%（147 人中 19 人）である。これに対して、「一般会員」と「役職等経験者」を比べると、65 歳以上の割合は 8.5%（106 人中 9 人）と 25.0%（36 人中 9 人）となる。「役職等経験者」の高齢化の度合いは相当高く、4 人に一人は高齢者である。「理事」だけを取り出せば、高齢者の割合はもっと高くなるであろう。

なお、20~29 歳の会員は、「一般会員」では 10.4%（106 人中 11 人）であるが、「役職等経験者」では 16.7%（36 人中 6 人）とわずかながら高い割合を占めている。これは、「事務局員」が含まれているためであろう。

また、各年齢層別に「役職等経験者」の占める率を見ると、20~39 歳 18.2%（44 人中

8人)、40~49歳14.8%(42人中6人)、50歳以上39.3%(56人中22人)である(20~39歳については、「事務局員」の占める率の高さを考慮する必要がある)。とくに65歳以上の高齢者を取り出すと、「役職等経験者」の占める率は50%(18人中9人)となる。

役職等経験者に多い教育社会学専攻

全回答者に占める教育社会学専攻の割合は、14.3%(147人中21人)である。ところが、「一般会員」と「役職等経験者」を比べると、教育社会学専攻の割合は6.5%(107人中7人)と38.9%(36人中14人)となる。このように「役職等経験者」の中では、教育社会学専攻の割合がきわめて高い。この点については、日本子ども社会学会発足時に主導的な役割(発起人等)を果たした会員に教育社会学を専攻する人が多かった事実を考慮する必要がある。これまで事務局を引き受けた大学の研究室が教育社会学であったため、「事務局員」も同じ専攻であることに目を向ける必要もあろう。

なお、全回答者中16.3%(147人中24人)ともっとも高い割合を占める保育学・幼児教育学専攻の割合は、「一般会員」では18.7%(107人中20人)であるが、「役職等経験者」では8.3%(36人中3人)とかなり少なくなっている。

また、専攻別に「役職等経験者」の占める率を見ると、とくに会員数の多い専攻では、教育社会学66.7%(21人中14人)、保育学・幼児教育学13.0%(23人中3人)、児童文化11.1%(9人中1人)などとなり、教育社会学専攻の%の高さが際立っている。

本学会所属年数が長い役職等経験者

日本子ども社会学会所属年数が7年以上の会員が全回答者中に占める割合は、40.8%(147人中60人)である。これに対して、「一般会員」と「役職等経験者」を比べると、7年以上の人の割合は、34.9%(106人中37人)と62.9%(35人中22人)となる。このように「役職等経験者」の中には、本学会所属年数の長い人が多い。

(2) 日本子ども社会学会への「役職等経験者」の愛着・関与度

データをもとに、いくつかの特徴を列挙しよう。なお、ここでも、取り上げる質問項目は、「一般会員」と「役職等経験者」との間に顕著な差が見られるものだけである。

本学会への愛着が強い

「日本子ども社会学会に強い愛着を感じている」人は、「一般会員」では55.4%(101人中56人)であるが、「役職等経験者」では75.8%(33人中25人)である。「役職等経験者」の本学会への愛着度は、かなり高いといえよう。

本学会に知り合いが多い

「日本子ども社会学会に知り合いが多い」人は、「一般会員」では39.2%(102人中40人)であるが、「役職等経験者」では85.3%(34人中29人)である。「役職等経験者」は、本学会に知り合いを多く持つ傾向が強く見られる。

大会への参加意志が強い

「日本子ども社会学会の大会に必ず参加したい」人は、「一般会員」では44.1%（102人中45人）であるが、「役職等経験者」では77.1%（35人中27人）である。このように「役職等経験者」の中には、大会参加意志の強い人がかなり多いようである。

大会参加回数が多い

最近5年間の大会参加回数が5回の人、は、「一般会員」では7.5%（106人中8人）であるが、「役職等経験者」では44.4%（36人中16人）である。このように「役職等経験者」は、実際にも大会によく参加している。

学会発表回数が多い

学会発表（シンポジウム・テーマセッション・ワークショップを除く）を1回もしていない人は、「一般会員」では59.4%（106人中63人）であるが、「役職等経験者」では25.0%（36人中9人）である。学会発表回数が4回以上の人、は、「一般会員」では3.7%（106人中4人）であるが、「役職等経験者」では19.6%（36人中7人）である。「役職等経験者」は、大会によく参加するだけでなく、研究発表も比較的良好にしている。

理事選挙で必ず投票する人が多い

理事選挙で必ず投票する人は、「一般会員」では32.7%（107人中35人）であるが、「役職等経験者」では68.6%（35人中24人）である。このように「役職等経験者」は、理事選挙でもよく投票している。

学会の「ホームページ」を見る人が比較的多い

「学会のホームページをよく見るか」という問いに「よく見ている」「時々見ている」と答えた人（合計）は、「一般会員」では26.1%（107人中28人）であるが、「役職等経験者」では45.7%（35人中16人）である。このように「一般会員」よりも「役職等経験者」の方が、「ホームページ」を見る人の割合が高くなっている。

重要な学会（第一位）として日本教育社会学会を挙げる人が多い

全回答者について、重要な学会（第一位）として挙げられた学会名を見ると、日本子ども社会学会21.2%（137人中29人）、日本教育社会学会18.2%（137人中25人）、日本保育学会15.3%（137人中21人）が上位（3位まで）を占めている。ところが、「一般会員」と「役職等経験者」を比べると、これらの学会が重要な学会（第一位）として挙げられる割合は、かなり異なってくる。「一般会員」では、日本子ども社会学会21.6%（102人中22人）、日本保育学会18.6%（102人中19人）、日本教育社会学会9.8%（102人中10人）であるが、これに対して「役職等経験者」では、日本教育社会学会42.9%（35人中15人）、日本子ども社会学会20.0%（35人中7人）、日本保育学会5.7%（35人中2人）となる。「役職等経験者」の場合、重要な学会（第一位）として日本教育社会学会を挙げる人の割合が飛び抜けて高い。

また、「日本子ども社会学会」を重要な学会（第二位）として挙げた人の割合は、「一

般会員」では 25.8% (93 人中 24 人) であるが、「役職等経験者」では 42.9% (35 人中 15 人) となっている。

このように、「役職等経験者」の中には、親学会として日本教育社会学会を意識している人が多く、日本子ども社会学会を 2 番目の学会と受けとめている人が多いのであるが、しかし、同時に、上述のように、その人たちが日本子ども社会学会に強い愛着を持ち深く関与しているという実態に注目する必要がある。

(3) 日本子ども社会学会に対する評価

次の 2 つの項目について、「役職等経験者」と「一般会員」との間に、回答の際立った違いが見られた。

「方法論が洗練されていない」

「役職等経験者」は、「一般会員」に比べて、「方法論が洗練されている」という項目に「いいえ」と答える傾向が強い。「一般会員」では 10.9% (101 人中 11 人) であるが、「役職等経験者」では 33.3% (36 人中 12 人) となる。「役職等経験者」の中には、日本子ども社会学会の方法論の現状について、かなりきびしく批判的な評価をしている人が少なくない。なお、「方法論が洗練されている」に「はい」と答えた人は、「役職等経験者」(8.3%、36 人中 3 人) も「一般会員」(5.9%、101 人中 6 人) も少なく、「どちらともいえない」という回答が、「役職等経験者」(58.3%) よりも「一般会員」(83.2%) に相対的に多くなっている。

「イデオロギーにとらわれない」

「役職等経験者」は、「一般会員」に比べて、「イデオロギーにとらわれない」という項目に「はい」と答える傾向が強い。「一般会員」では 37.1% (105 人中 39 人) であるが、「役職等経験者」では 61.1% (36 人中 22 人) となる。「役職等経験者」の中では、日本子ども社会学会がイデオロギーにとらわれない学会であると評価する人の割合がかなり高い。

なお、「多彩なアプローチができる」に「はい」と答えた人は「一般会員」66.8%、「役職等経験者」80.6%、「国際的視野が養える」に「いいえ」と答えた人は「一般会員」16.7%、「役職等経験者」31.4%であり、「一般会員」と「役職等経験者」との間には、有意ではないが多少の%の差が見られることをつけ加えておきたい。

(4) 関心のある研究分野

本学会員が関心を持つ研究分野を見ると、「一般会員」と「役職等経験者」との間に著しい差がある項目が一つ見出された。それは、「中学生・高校生の生活と文化」である。この分野に「とても関心がある」人は、「一般会員」では 28.8% (104 人中 30 人) であるが、「役職等経験者」では 59.4% (32 人中 19 人) である。この点については、「役職等経験者」の中で高い割合を占める教育社会学専攻の人たちの多くが、この分野に関心を持っていることを考慮する必要がある。仮に、たとえば、本学会で一番高い割合を占め

る保育学・幼児教育学専攻の人たちがもっと多く役職等に就くとすれば、「幼児の生活と指導」が多くなるのかもしれない。

(5) 発展が期待される研究スタイル

本学会で今後発展が期待される研究スタイルを見ると、「一般会員」と「役職等経験者」との間に著しい差がある項目が一つ見出された。それは、「歴史的な研究」である。この研究スタイルの発展に期待する人は、「一般会員」では37.5%（104人中39人）であるが、「役職等経験者」では63.9%（36人中23人）である。このように「役職等経験者」の中には、今後発展が期待される研究スタイルとして「歴史的な研究」を重視する人が相当多いのである。

(6) 学会費の適切さ

本学会の正会員の年会費（7000円）についてたずねた質問項目を見ると、「一般会員」と「役職等経験者」との間に、かなり差が見出される。「一般会員」では「適当である」58.9%（107人中63人）、「高すぎる」28.0%（107人中30人）、「わからない」11.2%（107人中12人）と%がかなりばらつくが、「役職等経験者」では「適当である」に%が集中し、88.9%（36人中32人）となっている。5000円から7000円に値上げされた理由については、「役職等経験者」の中にはその議論に直接加わった人が多いが、そうした議論が「一般会員」には十分伝わっていないようにも思われる。ここには、「役職者」と「一般会員」との間のコミュニケーションの問題があるのかもしれない。

3 考察

(1) 本学会発足時の事情に由来する問題

本学会発足前に開かれた準備会等の会合に発起人として参加した人たちは、あの独特の熱を帯びた雰囲気は今も記憶していることだろう。「子どもを研究する新しい学際的な学会を創るんだ!」という意気込みは、発起人たちの間にあふれていた。発起人の多くは、たしかに、教育社会学を専攻していたが、多様な研究内容と多彩な研究方法を特徴とする学会を生み出すために、児童文学、児童文化、児童心理学、発達心理学、臨床心理学、幼児教育学、保育学、家政学、児童保健学、児童精神医学、思春期精神医学、文化人類学、教育人類学、児童福祉、音楽教育、美術教育、体育学、国語科教育、社会科教育、子ども論、青少年論、社会教育学、ジェンダー論、社会学、心理学、教育学など、そして実践現場の人たちも含めて、幅広く入会を呼びかける努力を惜しまなかった。その結果、本学会はさまざまな専門分野の会員を含むユニークな学会として出発することができたが、同時に、教育社会学を中心とする発起人たちが、理事会や紀要編集委員会の中核的なメンバーとして参画することとなった。

発起人たちは、もちろん、自己負担で準備会等の会合に参加したが、学会発足後も、この「自己負担による参加」は、理事会出席、紀要編集委員会出席などにも受け継がれ、今日に至っている。事務局員の旅費だけは当初から学会予算より支出されたが、理事会、紀要編集委員会、選挙管理委員会への出席には、少なくとも2002（平成14）年度までは、旅費は支出されずにきた。

学会発足当初の台所事情は、あまりにも苦しいものであった。発足後1,2年は院生にアルバイト代を払えないため奉仕活動を求めたこともあった。人件費を十分に確保することができなかったのである。消耗品費も不十分なため、たとえばコピー用紙をはじめ種々の物品は、学会発足後数年間は、事務局を置く大学の研究室のものを使用していた。事務上のミスも少なくなかったが、事務局の実情を知る理事会は、温かい目で見守った。今日では、事務局も整備され、学会費の納入状況も良好になり、若い会員の入会も順調になり、学会発足後何年間か続いた事務局の不備な状況は、かなり解消されたといっていよいであろう。それとともに、理事会を中心とする学会運営も、ほぼ軌道に乗ってきたと考えられる。

今回の調査結果では、上述のように、「役職等経験者」の多くは、日本子ども社会学会に強い愛着を持ち、大会によく参加し、研究発表もよくしている。このような「役職等経験者」の本学会への愛着・関与度の高さについては、本学会発足時からの発起人たちの意気込みと苦勞を考慮することが必要であろう。

とにかく、手元にあるものなら何でも使って作った掘建て小屋が、当時の本学会だったといってもよいであろう。もちろん、この小屋は、戦後の焼け跡に作られたようなものではなかったが、しかし、学会運営も大会の持ち方も、きわめてプラグマティックであった。

とはいえ、本学会が発足後すでに10年を経過した今日、「温故」に頼るだけでは、新たな学会の前進がないこともたしかである。もちろん、10年という時間は、歴史と呼ぶにはあまりにも短い。しかし、今後の学会の世代交代をよりよく進めるためにも、本学会の中に古きをたずねて新しきを知る作業は、やはり欠かせないように思われる。その中には、故藤本浩之輔先生（京都大学教授・教育人間学）のご尽力を記憶と記録にとどめるだけでなく、その精神を生かした研究、とりわけ「子ども自身の文化」研究を一層発展させることなども含まれるであろう。

だが、「子ども自身の文化」については、この分野に「とても関心がある」人は、「役職等経験者」では48.6%（35人中17人）、「一般会員」では65.0%（103人中67人）となっており、またこの分野を「研究がまだ弱い」と思う人は、「役職等経験者」では25.0%（36人中9人）、「一般会員」では17.8%（107人中19人）となっている。つまり、「役職等経験者」の「子ども自身の文化」に対する関心度は、「一般会員」に比べて高いわけではなく（むしろ低く）、また「一般会員」よりもずっと強くこの分野を「研究がまだ弱い」と思っているわけでもないのである。「役職等経験者」の多くが故藤本浩之輔先生の遺志を引き継いで「子ども自身の文化」研究を推進することに意を用いているとは必ずしもいえない事態に対して、日本子ども社会学会会員はどう向き合えばよいのであろうか。

会員の多くが「研究がまだ弱い」分野として挙げたのは、「子どもの福祉と社会教育活動」（32.0%）、「子ども自身の文化」（19.7%）、「児童文化とマスコミ」（19.0%）などであったが、「子ども自身の文化」も含めて、これらの分野の研究に取り組む有為な会員の輩出は、とくに役職者たちによって、学会の課題として自覚される必要がある。

（2）「役職等経験者」がかかえる高齢化の問題

学会運営の中核を担った発起人たちは、学会発足時から10年を経た今日、高齢化が目立ち始めている。10年前でさえ、すでに還暦を過ぎた人もいたのであるから、年長の人が

ちは70歳を超えている。もちろん、65歳以上の高齢者もますます増えている。

これらのすでに高齢期にある人たちは、今なお現役として研究成果を報告する活動も行っており、本学会への関与の状況から見ても、きわめて意欲的な人が多い。これらの人たちの尽力が、本学会の発展を支えてきたといっても過言ではないであろう。とにかく、本学会には、研究好きで世話好きな高齢者が多いのである。「現代日本の子どものことが気になる祖父」（祖母はやや弱い）というイメージが生きているようにも思われる。高齢化社会における学会のあり方を考えると、それはプラスの方向で評価されるべきことなのかもしれない。

日本教育社会学会が50周年記念事業として実施した会員調査の結果によれば、日本子ども社会学会の重要度を認め関心を持つ日本教育社会学会員は、「男性に多く、55～64歳や65歳以上の年齢層に多く、筑波・広島、早・慶・立教・上智・日女の私立大学および東大以外の旧帝大出身者に多い」という傾向が見られた（『教育社会学の成熟と転換 日本教育社会学会会員調査報告書』2001、58ページ）。日本教育社会学会会員に限定した話ではあるが、この調査結果にも、日本子ども社会学会が男性の高齢者の関心を引く傾向がよく示されている。

それにしても、「研究好きのおじいさん・おばあさん」の学会発表の機会は保障されねばならないが、しかし、学会役職者の世代交代も避けて通れない問題であることはたしかであろう。

（3）日本子ども社会学会への評価と期待

本学会への評価

日本子ども社会学会の評価に関しては、全回答者の場合、「多彩なアプローチができる」（68.7%）と「魅力的な学会である」（59.2%）が、過半数の賛意を得た項目であった。この傾向は、「一般会員」にも「役職等経験者」にも共通に見られた。

これに対して、「一般会員」と「役職等経験者」の間に違いが見られたのは、次の2つの項目である。

一つは、「方法論が洗練されていない」である（「一般会員」10.9%、「役職等経験者」33.3%）。「役職等経験者」の中に方法論の不十分さを指摘する人が相対的に多いのは、おそらく、本学会における研究発表を他の学会のそれと比較して出てくる評価によるものと推測される。紀要編集委員会の中でも、とくに大学院生等の投稿論文について、今までしばしば「研究の枠組みが不十分である」「調査方法がずさんである」「データの扱い方に問題がある」「調査結果の考察があいまいである」といった指摘が出ていたことと合わせて考えると、本学会として、方法論のあり方がないがしろにできない問題であることは否定しえないであろう。さらにいえば、それは、「多彩なアプローチができる」とことと（それぞれのアプローチの）「方法論が洗練されている」とことをいかに両立させるか、という問題にもつながるように思われる。

もう一つは、「イデオロギーにとらわれない」である（「一般会員」37.1%、「役職等経験者」61.1%）。「役職等経験者」にそのように考える人が多いのは、これまで他の学会でイデオロギー問題（とくに右翼・左翼の政治的イデオロギーの対立）に悩まされた経験を持つ人が少なくないためであると推測される。だが、「イデオロギーとは何か？」と

改めて考えてみると、この問いに答えることの難しさを感じる人は多いにちがいない。とりわけ、「役職等経験者」に多い高齢者が経験してきた上述の意味でのイデオロギーと若い世代の人たちがとらえようとするイデオロギーとでは、同じ言葉を使っても、レベルが異なるようにも思われる。筆者の私見を述べることを許していただくならば、本学会は、「子どもに関するイデオロギー」を暴くことに力を注ぐ必要があるが、同時に、「子どもに関する思想」をどのようにしてよりよく育て上げていくかについて、本学会として知恵を絞っていく必要があるのではなからうか。

それにしても、2つの項目から見る限り、高齢者の割合が高い「役職等経験者」の知恵をこれからもしばらくの間は必要としていると考えた方がよい面と、ある意味では若い世代の人たちがそうした古い知恵を乗り越えて行かねばならぬ面と、両面があるのかもしれない。

本学会への期待

本学会で今後発展が期待される研究スタイルとしては、全回答者の場合、「実践的な研究」(77.6%)、「参与観察などのフィールド・ワーク」(74.8%)、「理論的な研究」(63.9%)の3項目が過半数の賛意を得ている。この傾向は、「一般会員」にも「役職等経験者」にも共通に見られた。

これに対して、「一般会員」と「役職等経験者」の間に際立った差のある項目が一つ見出された。それは、「歴史的な研究」である(「一般会員」37.5%、「役職等経験者」63.9%)。すでに見たように、「役職等経験者」の中には、今後の研究スタイルとして「歴史的な研究」にとくに期待する人が多いのである。たしかに、子ども研究の基礎として、「子どもに関する歴史的な研究」が不可欠であることは、誰もが認めざるをえないであろう。何よりも「子ども史」がしっかり根づいていないと、本学会における研究発表の多くを占める「子どもの現在に関する研究」が根無し草になってしまう、と危惧する人は少なくないように思われる。

この点からすれば、「一般会員」よりも「役職等経験者」の方が、本学会の問題点の側面をより鋭く把握しているといえるのかもしれない。

(4) 役職者と一般会員間のコミュニケーションの問題

正会員の年会費(7000円)が適当であるかどうかという質問項目については、「役職経験者」と「一般会員」とでは、評価が異なっていた。「役職経験者」の場合は、「適当である」という回答が圧倒的に多かったが、「一般会員」の回答にはかなりばらつきがあった。「役職者」は5000円から7000円への値上げの議論に加わっており、それなりに理解も得られていると考えられるが、「一般会員」はそうした議論のプロセスからはずれているのではないかと推測される。この学会費に関する質問への回答は、「役職者」と「一般会員」間のコミュニケーションの問題を象徴的に示してくれているのかもしれない。「役職者」が反省すべき点であろう。

4 おわりに

(1) 高齢者の一人として思うこと

高齢者の一人に数えられる筆者は、「役職等経験者」（4人に一人は高齢者）の一人として本調査の質問項目に回答した。以上に示されたような回答の特徴は、筆者自身の回答とほぼ似通ったものだといってもよい。こうして書き終わって読み返してみると、何か自己弁護をしているようにも思われてくる。学会運営を担う次世代の会員の方々にお願いしたいのは、少なくとも研究に関する限り、高齢者が自由に発表できる場を確保することを考えていただきたい、ということである。ただし、学会運営にかかわる役職者の中にどのくらいの割合まで高齢者が含まれてもよいかについては、もう少し議論して共通理解を得るようにしていただけたら、と希望するものである。本学会の場合、高齢者の「知のリビドー」は「力のリビドー」よりも強いのではないか（「性のリビドー」についてはよくわからない）、そして子どもに帰った高齢者の「知」の遊びの機会が提供されてもよいのではないかと筆者自身は考えているのだが。

とはいえ、本学会が高齢者以外の世代の会員の声を十分反映していないのではないかと疑ってみることは、本学会の役職に就いている高齢者に一番必要なのだ、と肝に銘じるべきなのかもしれない。とにかく、世代交代をどのように進めるか、その中で、本学会の「研究がまだ弱い部分」をどう育てるか、という課題に知恵を絞って取り組むべき時機が到来していることだけは、たしかかなように思われる。

（2）子ども研究への2つのスタンス

もう一つ、ぜひ、ふれておきたいことがある。非常に大ざっぱな言い方だが、本学会には、2種類の人がいるように思われる。すなわち、「教育にかかわる立場から子どもを研究しようとする人」と「子どもを子どもとして研究しようとする人」である。たしかに、両者の間には、「子どもへのスタンス」に違いがあるようである。この違いは、本学会の会員の考え方に微妙に影響を与えているように思われる。

本調査の結果によれば、過去5年間に一番興味をもったシンポジウムとして「いま、子ども社会に何が起きているのか」（2000年、於広島大学）を挙げる人が最も多かった（24.5%）。このシンポジウムに興味をもたれた理由は、本調査の質問項目からは明らかでない。だが、その企画に携わった筆者が苦慮したのは、上述のような「子どもへのスタンス」の違いをどうすれば浮き彫りにできるか、ということだった。そこで、パネラーには「教育」実践家や「教育」研究者が入るようにし、指定討論者に「子ども自身の文化」研究者を据えて、両者の「スタンスの違い」が明確になるような議論を期待したのである。議論のなかでは、「こうなってほしい」という子どもへの大人の視線が「教育」研究者の提案の中に感じとれたのに対して、「子ども自身の文化」研究者からは、「今のままの君でいいんだよ」という言葉で表現されるような子どもへの視線の重要性が提起されたのである。

筆者自身は、これからも、この種の問題に意識的でありたい、と考えている。それは、「子ども社会とは何か？」という問いにつながっており、日本子ども社会学会が避けて通れない課題が、ここにあると考えるからである。

（原田 彰）

調査票と全体集計

日本子ども社会学会・会員調査

「日本子ども社会学会」は、2003年に第10回大会を迎えます。そこで記念事業として、会員の皆様を対象に、「日本子ども社会学会・会員調査」を行い、これからの本学会のあり方を検討するための資料と致したいと思っております。この調査の回答は無記名で、統計的に処理しますので、回答いただいた方にご迷惑をおかけすることは一切ありません。学会の発展のために、調査にご協力いただきますようお願い致します。記入済みの調査票は、同封の返信用封筒に入れ、10月29日（火）までにご返送下さい。平成14年9月 将来構想委員会

調査内容についてのお問い合わせは、下記をお願いします。

調査専門委員会 武内 清（上智大学文学部教育学科）

Tel 03-3238-3649

Fax 03-3238-3980

E-mail fwne3137@mb.infoweb.ne.jp

あなた自身のことをお聞きします。

有効回答数 147名

とくに断りのない場合は、この数を100.0%とした値を（）内に、算出している

1 性別

1 男（56.5%） 2 女（39.5%） NA/DK（4.1%）

2 年齢

1 20歳～29歳（12.2%） 2 30歳～35歳（11.6%） 3 36歳～39歳（6.8%）
4 40歳～45歳（16.3%） 5 46歳～49歳（12.2%） 6 50歳～54歳（12.9%）
7 55歳～60歳（10.9%） 8 61歳～64歳（3.4%） 9 65歳以上（12.9%）
NA/DK（0.7%）

3 最終学歴（中退を含む）

1 大学院博士課程（42.9%） 2 大学院修士課程（39.5%）
3 4年制大学（16.3%） 4 短期大学（0.7%）
5 専修学校・専門学校（0.0%） 6 高校（0.0%） 7 中学校（0.7%）
8 その他（0.0%） NA/DK（0.0%）

4 最終学歴の大学院（大学）の種類

1 国公立大学（71.4%）
2 私立大学（25.9%）
3 外国（1.4%） 4 その他（0.0%） NA/DK（1.4%）

5 現在の専攻（主なもの一つ）

- | | |
|--|-------------------------------|
| 01 児童文学（ 3.4%） | 02 児童文化（ 6.8%） |
| 03 児童精神医学・児童保健学・精神医学（ 0.7%） | |
| 04 児童心理学（ 1.4%） | 05 保育学・幼児教育学（16.3%） |
| 06 発達心理学・教育心理学（ 5.4%） | 07 障害児心理・障害児教育（ 2.7%） |
| 08 児童相談・教育相談（ 0.0%） | 09 臨床心理学・カウンセリング（ 2.7%） |
| 10 子ども論・青少年論（ 4.1%） | 11 音楽教育・美術教育（ 1.4%） |
| 12 特別活動・生徒指導（ 0.0%） | 13 学校教育（ 6.1%） 14 社会教育（ 4.8%） |
| 15 教育社会学（14.3%） | 16 教育学・比較教育（ 4.1%） |
| 17 教育人類学・文化人類学（ 2.7%） | 18 社会福祉・児童福祉（ 4.8%） |
| 19 ジェンダー論（ 4.1%） | 20 社会学（ 1.4%） 21 心理学（ 0.7%） |
| 22 体育学（ 1.4%） | 23 家政学・家族関係学（ 3.4%） |
| 24 現職教員及び諸団体で活躍している
現在関心をもっている専攻や研究領域を具体的に（ 6.8%） | |
| 25 その他 具体的に（ 3.4%） | NA/DK（ 0.0%） |

6 本学会所属年数

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1 1年未満（ 8.8%） | 2 1年以上3年未満（11.6%） |
| 3 3年以上5年未満（20.4%） | 4 5年以上7年未満（17.0%） |
| 5 7年以上（40.8%） | NA/DK（ 1.4%） |

7 現在の所属

- | | | |
|---|------------------------------------|---------------------------------|
| } | 1 大学・短大・専修学校の専任（61.2%） | |
| | 2 研究所の専任・専従（ 1.4%） | |
| | 3 大学・短大・専修学校の非常勤（ 4.8%） | 4 大学院生・研究生（15.0%） |
| | 5 小学校・中学校・高等学校（ 5.4%） | 6 幼稚園、保育園（保育所）（ 3.4%） |
| | 7 行政職（ 2.0%） | 8 民間企業（ 0.7%） 9 その他 具体的に（ 3.4%） |
| | | NA/DK（ 2.7%） |
| | | |
| → | 8（7で1と2と答えた人に） 職業上の地位（100.0%=N 92） | |
| | 1 教授または教授相当（46.7%） | 2 助教授または助教授相当（27.2%） |
| | 3 専任講師または講師相当（18.5%） | 4 助手または助手相当（ 4.3%） NA/DK（ 2.2%） |
| → | 9（7で1と2と答えた人に）（100.0%=N 92） | |

A 所属部局の分野

- | | | |
|--------------------------------|--------------------|----------------|
| 01 教員養成系（一般学部の教職課程担当含む）（37.0%） | | |
| 02 教育学系（教員養成系以外）（10.9%） | | |
| 03 福祉系（ 7.6%） | 04 社会学系（ 3.3%） | 05 心理学系（ 4.3%） |
| 06 文学系（ 6.5%） | 07 芸術系（ 0.0%） | |
| 08 児童・保育系（14.1%） | 09 家政系・生活科学（ 5.4%） | |
| 10 その他 具体的に（ 8.7%） | NA/DK（ 2.2%） | |

B 主な授業担当科目は何ですか(1つ選択)

- | | |
|-------------------------------|---------------------------|
| 01 児童文学 (4.3%) | 02 児童文化 (5.4%) |
| 03 児童精神医学・児童保健学・精神医学 (0.0%) | |
| 04 児童心理学 (1.1%) | 05 保育学・幼児教育学 (19.6%) |
| 06 発達心理学・教育心理学 (4.3%) | 07 障害児心理・障害児教育 (0.0%) |
| 08 児童相談・教育相談 (0.0%) | 09 臨床心理学・カウンセリング (2.2%) |
| 10 子ども論・青少年論 (3.3%) | 11 音楽教育・美術教育 (0.0%) |
| 12 特別活動・生徒指導 (1.1%) | 13 学校教育 (3.3%) |
| 14 社会教育 (3.3%) | 15 教育社会学 (15.2%) |
| 16 教育学・比較教育 (5.4%) | 17 教育人類学・文化人類学 (0.0%) |
| 18 社会福祉・児童福祉 (7.6%) | 19 ジェンダー論 (0.0%) |
| 20 社会学 (3.3%) | 21 心理学 (1.1%) |
| 22 体育学 (1.1%) | 23 家政学・家族関係学 (3.3%) |
| 24 その他 具体的に (9.8%) | 25 授業担当科目はない (4.3%) |
- NA/DK (1.1%)

ご研究についてお聞きします。

10 下記の1～10は、学会発足時に作成した「子ども社会学会」10の研究分野です。
(各分野の内容については、添付資料(10ページ)を参照してください)

A あなたは、次のような分野に関心がありますか。それぞれについてあてはまるところを
つけて下さい。

	とても関心がある	少し関心がある	関心がない	NA/DK
01 子ども自身の文化	(58.5%)	(34.0%)	(3.4%)	(4.1%)
02 児童文化とマスコミ	(42.9%)	(49.0%)	(4.1%)	(4.1%)
03 子どもの遊び集団と環境	(63.9%)	(28.6%)	(3.4%)	(4.1%)
04 子どもと親、家族	(68.7%)	(22.4%)	(4.8%)	(4.1%)
05 幼児の生活と指導	(37.4%)	(42.2%)	(13.6%)	(6.8%)
06 子どもと学校	(47.6%)	(40.1%)	(5.4%)	(6.8%)
07 中学生・高校生の生活と文化	(35.4%)	(43.5%)	(16.3%)	(4.8%)
08 子どもの福祉と社会教育活動	(28.6%)	(51.7%)	(15.0%)	(4.8%)
09 子どもの社会史	(33.3%)	(45.6%)	(16.3%)	(4.8%)
10 帰国生と子どもに関する国際比較	(6.1%)	(46.3%)	(39.5%)	(8.2%)
11 その他(略)				

B 上記の中で、本学会の研究がまだ弱い部分はどれだと思いますか。主なもの2つの番号を記入してください。

- 01 子ども自身の文化 (19.7%)
- 02 児童文化とマスコミ (19.0%)
- 03 子どもの遊び集団と環境 (6.1%)
- 04 子どもと家族 (14.3%)
- 05 幼児の生活と指導 (14.3%)
- 06 子どもと学校 (6.8%)
- 07 中学生・高校生の生活と文化 (8.8%)
- 08 子どもの福祉と社会教育活動 (32.0%)
- 09 子どもの社会史 (15.6%)
- 10 帰国生と子どもに関する国際比較 (14.3%)
- 11 その他 (4.8%)

11 あなたの研究活動は、主にどのような研究方法によっていますか。あてはまる番号に3つまでをつけてください。(100.0%=N 146)

- 1 理論的方法 (70.7%)
- 2 調査的方法 (41.5%)
- 3 歴史的方法 (81.0%)
- 4 数理的・計量的方法 (88.4%)
- 5 文献的方法 (58.5%)
- 6 観察的、フィールド・ワーク的方法 (38.8%)
- 7 実験的方法 (91.2%)
- 8 国際比較 (90.5%)
- 9 その他 具体的に(略)

12 あなたが現在、所属している学会(子ども社会学会を含む)は何ですか。重要な上位3つまでの学会名を書き、(1)から(5)までの問いの当てはまる番号にをつけてください。

学会名の記述については<別紙>参照

12 あなたが現在、所属している学会（子ども社会学会を含む）は何ですか。重要な上位3つまでの学会名を書き、（1）から（5）までの問いの当てはまる番号に をつけてください。

重要な学会名	(1) 昨年、学会大会に参加した	(2) 昨年、学会大会で発表した	(3) その学会誌をよく読む	(4) 昨年、その学会誌に投稿した	(5) 現在、その学会の役職や委員（事務局員含む）である
1位 () 学会	1 はい (80.3%) 2 いいえ (13.6%) NA/DK (6.1%)	1 はい (37.4%) 2 いいえ (51.0%) NA/DK (11.6%)	1 はい (87.1%) 2 いいえ (4.1%) NA/DK (8.8%)	1 はい (9.5%) 2 いいえ (77.6%) NA/DK (12.9%)	1 はい (27.2%) 2 いいえ (63.3%) NA/DK (9.5%)
2位 () 学会	1 はい (55.8%) 2 いいえ (32.0%) NA/DK (12.2%)	1 はい (29.9%) 2 いいえ (53.7%) NA/DK (16.3%)	1 はい (74.8%) 2 いいえ (10.9%) NA/DK (14.3%)	1 はい (10.9%) 2 いいえ (72.1%) NA/DK (17.0%)	1 はい (17.7%) 2 いいえ (64.6%) NA/DK (17.7%)
3位 () 学会	1 はい (34.0%) 2 いいえ (36.1%) NA/DK (29.9%)	1 はい (13.6%) 2 いいえ (52.4%) NA/DK (34.0%)	1 はい (53.7%) 2 いいえ (15.0%) NA/DK (31.3%)	1 はい (5.4%) 2 いいえ (60.5%) NA/DK (34.7%)	1 はい (4.8%) 2 いいえ (60.5%) NA/DK (34.7%)

13 あなたが「子ども社会学会」へ入会されたのはどのような理由からですか。当てはまる番号すべてに をつけてください。

- 1 自分の研究成果を発表するため (38.1%)
- 2 自分の研究に役立てるため (71.4%)
- 3 自分の就職・昇進・転職に役立てるため (3.4%)
- 4 職場や教育現場での実践に役立てるため (21.1%)
- 5 「子どもに関する研究」の最先端の情報を得るため (49.0%)
- 6 知り合いからすすめられて (46.9%)
- 7 その他 具体的に (略)

NA/DK (0.7%)

14 あなたは、子ども社会学会をどのように評価していますか。それぞれについて、あてはまる番号に をつけて下さい。

	はい	どちらとも いえない	いいえ	NA/DK
1 魅力的な学会である	(59.2%)	(35.4%)	(3.4%)	(2.0%)
2 政策形成に役立つ	(8.2%)	(66.7%)	(22.4%)	(2.7%)
3 実践に役立つ	(29.9%)	(51.7%)	(16.3%)	(2.0%)
4 批判的精神の形成に役立つ	(21.1%)	(61.2%)	(14.3%)	(3.4%)
5 多彩なアプローチができる	(68.7%)	(25.9%)	(3.4%)	(2.0%)
6 理論枠組みを提供してくれる	(30.6%)	(57.1%)	(8.8%)	(3.4%)
7 方法論が洗練されている	(6.1%)	(74.1%)	(15.6%)	(4.1%)
8 イデオロギーにとらわれない	(42.2%)	(51.7%)	(4.8%)	(1.4%)
9 国際的視野が養える	(6.1%)	(70.1%)	(19.7%)	(4.1%)

15 あなたは、今後、本学会ではどのようなスタイルの研究が発展することを期待しますか。それぞれについて、あてはまる番号に をつけてください。

	はい	どちらとも いえない	いいえ	NA/DK
1 歴史的な研究	(43.5%)	(46.9%)	(6.8%)	(2.7%)
2 実践的な研究	(77.6%)	(19.0%)	(1.4%)	(2.0%)
3 政策的な研究、提言	(46.3%)	(44.9%)	(4.1%)	(4.8%)
4 理論的な研究	(63.9%)	(29.3%)	(2.7%)	(4.1%)
5 質問紙による調査	(37.4%)	(49.0%)	(8.2%)	(5.4%)
6 参与観察などのフィールド・ワーク	(74.8%)	(20.4%)	(1.4%)	(3.4%)
7 実験による研究	(23.8%)	(59.2%)	(10.9%)	(6.1%)
8 外国との比較研究	(46.9%)	(41.5%)	(6.1%)	(5.4%)
9 その他(具体的に) 略				

16 あなたの子ども社会学会への愛着や関与度に関しておうかがいします。

	はい	いいえ	NA/DK
1 子ども社会学会に強い愛着を感じる	(56.5%)	(36.7%)	(6.8%)
2 子ども社会学会から強い知的刺激を受けている	(47.6%)	(49.0%)	(3.4%)
3 子ども社会学会には知り合いが多い	(47.6%)	(46.9%)	(5.4%)
4 子ども社会学会の大会には必ず参加したい	(51.0%)	(44.2%)	(4.8%)
6 子ども社会学会は、今後もっと発展していきだろう	(72.8%)	(17.7%)	(9.5%)

17 あなたは、最近5年間に本学会の大会にどの程度参加していますか。

(最近5年間の大会は、1998年は宮城教育大学、1999年は龍谷大学、2000年は広島大学、2001年は明治学院大学、2002年は岡山大学で開かれています)

- | | | |
|-------------------|--------------|--------------|
| 1 参加していない (17.0%) | 2 1回 (25.9%) | 3 2回 (16.3%) |
| 4 3回 (15.0%) | 5 4回 (8.2%) | 6 5回 (16.3%) |
| NA/DK (1.4%) | | |

18 あなたは本学会で何回発表していますか。〔シンポジウム、テーマセッション(9回からラウンドテーブルに名称変更)、ワークショップを除く〕

- | | | |
|-------------------|---------------|--------------|
| 1 発表していない (51.0%) | | |
| 2 1回 (17.7%) | 3 2回 (15.0%) | |
| 4 3回 (7.5%) | 5 4回 (2.7%) | 6 5回 (2.0%) |
| 7 6回 (0.7%) | 8 7回以上 (2.0%) | NA/DK (1.4%) |

19 あなたは本学会のワークショップ、テーマセッション(ラウンドテーブル)、シンポジウムで、報告したことがありますか。ある方はその回数(延べ)をお答え下さい。

- | | | |
|--------------|---------------|--------------|
| 1 ない (74.8%) | 2 1回 (13.6%) | 3 2回 (3.4%) |
| 4 3回 (2.7%) | 5 4回 (1.4%) | 6 5回 (0.7%) |
| 7 6回 (0.7%) | 8 7回以上 (0.7%) | NA/DK (2.0%) |

20 あなたは、本学会の「ワークショップ」のテーマや内容をどう評価しますか。

- | | | |
|---------------------|-------------------|--------------|
| 1 とてもよい (12.9%) | 2 ややよい (43.5%) | |
| 3 どちらともいえない (34.0%) | | |
| 4 あまりよくない (2.7%) | 5 ぜんぜんよくない (1.4%) | NA/DK (5.4%) |

21 あなたは、本学会での「テーマセッション」(ラウンドテーブル)をどう評価しますか。

- | | | |
|---------------------|-------------------|--------------|
| 1 とてもよい (12.2%) | 2 ややよい (44.9%) | |
| 3 どちらともいえない (33.3%) | | |
| 4 あまりよくない (2.7%) | 5 ぜんぜんよくない (1.4%) | NA/DK (5.4%) |

22 あなたは、本学会のシンポジウムのテーマや内容についてどのような印象をお持ちですか。

- | | | |
|---|--|--|
| 1 毎年、適切なテーマや内容が設定されている (39.5%) | | |
| 2 年によっては、必ずしも適切なテーマや内容が設定されていない (49.7%) | | |
| 3 毎年、適切なテーマや内容が設定されていない (3.4%) | | |
| NA/DK (7.5%) | | |

23 あなたは、本学会シンポジウムの過去5年間のテーマで一番興味をもったのはどれですか。1つを選んでをつけて下さい。

- 1 子どもの「居場所」はどこか (1998年、宮城教育大学) (13.6%)
- 2 子どもをどうみていくか - 方法としてのフィールド・ワークの可能性 (1999年、龍谷大学) (19.0%)
- 3 いま子ども社会に何が起きているか (2000年、広島大学) (24.5%)
- 4 育児不安の構造 (2001年、明治学院大学) (12.9%)
- 5 今、学校の中の子どもたちは! (2002年、岡山大学) (10.2%)
- 6 興味をもったものがない (5.4%)
- 7 わからない (10.2%) NA/DK (4.1%)

24 あなたは本学会の「学会ニュース」に満足していますか。

- 1 はい (44.2%)
- 2 どちらともいえない (49.7%)
- 3 いいえ (2.0%) NA/DK (4.1%)

ご意見やご希望があれば、自由にお書きください。

略

25 学会の「ホームページ」に関しておたずねします。

あなたは、学会のインターネットのホームページをよくみますか。

- 1 よく見ている (2.0%)
 - 2 時々見ている (27.9%)
 - 3 1~2度見たことがある (29.9%)
 - 4 見たことがない (37.4%)
- NA/DK (2.7%)

学会のホームページについて、ご意見やご希望があれば、自由にお書きください。

略

26 本学会誌『子ども社会研究』についておたずねします。

あなたは『子ども社会研究』をどの程度読んでいますか。

- 1 全体を詳しく読む (12.9%)
- 2 興味をもった論文だけ読む (81.6%)
- 3 ほとんど読まない (4.8%) NA/DK (1.4%)

『子ども社会研究』で、特集を組むべきだと思いますか。

- 1 はい (42.9%)
 - 2 どちらともいえない (43.5%)
 - 3 いいえ (8.8%)
 - 4 その他 具体的に (2.0%)
- NA/DK (2.7%)

『子ども社会研究』の内容に満足していますか。

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1 とても満足している (6.8%) | 2 やや満足している (51.7%) |
| 3 どちらともいえない (34.7%) | |
| 4 やや不満である (4.1%) | 5 とても不満である (1.4%) |
- NA / DK (1.4%)

学会誌 (『子ども社会研究』) に関して、意見があればお書き下さい。

略

27 本学会の理事選挙についておたずねします。あなたは本学会の理事選挙でどの程度投票しますか。

- | | |
|---------------------|-------------------|
| 1 必ず投票する (40.1%) | 2 時々投票する (27.9%) |
| 3 投票したことがない (28.6%) | NA / DK (3.4%) |

28 本学会の理事、評議員、監査、各種委員、事務局員の経験がありますか。

- | | | |
|--------------|--------------|-----------------|
| 1 ある (24.5%) | 2 ない (72.8%) | NA / DK (2.7%) |
|--------------|--------------|-----------------|

29 現在の学会の年会費 (正会員 7000 円、学生会員 4000 円、賛助会員 10000 円) について、どのように感じていますか。

A 正会員 (7000 円) について

- | | | |
|-----------------|--------------------|-----------------|
| 1 適当である (64.6%) | 2 高すぎる (22.4%) | 3 安すぎる (0.7%) |
| 4 わからない (8.8%) | 5 その他 具体的に (1.4%) | NA / DK (2.0%) |

B 学生会員 (4000 円) について

- | | | |
|-----------------|--------------------|-----------------|
| 1 適当である (61.2%) | 2 高すぎる (19.0%) | 3 安すぎる (2.0%) |
| 4 わからない (9.5%) | 5 その他 具体的に (2.7%) | NA / DK (5.4%) |

C 賛助会員 (10000 円) について

- | | | |
|-----------------|--------------------|-----------------|
| 1 適当である (66.0%) | 2 高すぎる (3.4%) | 3 安すぎる (4.1%) |
| 4 わからない (20.4%) | 5 その他 具体的に (0.0%) | NA / DK (6.1%) |

30 本学会 (「日本子ども社会学会」) の研究の現状に対する意見も含めて、本学会に対する印象、感想、問題点を自由にお書きください。

回答あり (25.9% N=38) 回答内容については略

~ご協力ありがとうございました~

添付資料（子ども社会学会の10の研究分野、質問10参照）

1．子ども自身の文化

主体的な文化創造者である子ども独自の表現文化について。たとえば、子どもの伝承遊び、子どもの持つ表現性や創造性などの研究。

2．児童文化とマスコミ

大人がマスコミや子ども産業を通して与える子ども文化について。たとえば子どもテレビ番組、児童文学、児童劇、子どもの遊具などの研究。

3．子どもの遊び集団と環境

子どもの仲間や遊びの問題、さらには子どもをとりまく自然環境などについて。たとえば、遊び仲間の実態、遊びの理論と実態と指導、遊び環境、自然破壊や都市計画との関係などの研究。

4．子どもと家族

幼児や子どもの育つ家族や家庭生活、及びそのしつけや教育について。たとえば家族の人間関係、家族の文化や生活、家族の子ども観、家族のしつけ観などの研究。

5．幼児の生活と指導

家庭外での幼児の生活と指導について。たとえば乳幼児の健康と保育、幼稚園・保育所の教育理念、そのカリキュラムや指導の実態などの研究。

6．子どもと学校

とくに小学校・中学校における子どもの学習と生活とその指導について。たとえば学力・意欲・思考、学習指導や特別活動の理論と指導、学校・学級の集団生活、いじめや不登校、受験産業や学習塾、教育機器・コンピュータと子どもの思考などの研究。

7．中学生・高校生の生活と文化

とくに中学生・高校生の生活と文化、およびその指導について。たとえば、6に挙げられたものの中学・高校段階での研究、その他、中学・高校生の逸脱行動、中学・高校生の生徒文化、ジェンダーの問題、進路指導、部活動、ボランティア活動などの研究。

8．子どもの福祉と社会教育活動

福祉や社会教育活動の面からとらえられた子どもについて。たとえば子ども会・ボーイスカウトなどの各種青少年団体、野外活動、青少年の福祉問題、青少年の人権問題などの研究。

9．子どもの社会史

子どもの生活や育児と子ども観の歴史的変遷について。たとえば子どもの生活史、遊びの歴史、育児観・子ども観の歴史的変遷などの研究。

10．帰国生と子どもに関する国際比較

帰国生の問題、及び、子どもの生活や意識に関する国際比較について。たとえば帰国生の適応問題、帰国生の外国体験、日本の子どもや教育の国際比較などの研究。

クロス集計表
欠損値を抜いたの%表記

N=		性別		年齢3段階			専攻3分割			
		83	58	45	42	59	60	45	42	
		男	女	20歳 ~39歳	40歳 ~49歳	50歳~	児童 分野	教育 分野	その他	
1	性別	男	100.0	0.0	48.9	58.5	68.5	55.4	72.7	48.8
	女	0.0	100.0	51.1	41.5	31.5	44.6	27.3	51.2	
2	年齢	20歳~29歳	12.0	14.0	40.0	0.0	0.0	8.5	22.2	7.1
		30歳~35歳	7.2	19.3	37.8	0.0	0.0	10.2	8.9	16.7
		36歳~39歳	7.2	7.0	22.2	0.0	0.0	11.9	4.4	2.4
		40歳~45歳	16.9	17.5	0.0	57.1	0.0	13.6	13.3	23.8
		46歳~49歳	12.0	12.3	0.0	42.9	0.0	15.3	8.9	11.9
		50歳~54歳	10.8	15.8	0.0	0.0	32.2	15.3	11.1	11.9
		55歳~60歳	12.0	8.8	0.0	0.0	27.1	8.5	11.1	14.3
		61歳~64歳	4.8	1.8	0.0	0.0	8.5	5.1	2.2	2.4
		65歳以上	16.9	3.5	0.0	0.0	32.2	11.9	17.8	9.5
3	最終学歴	大学院博士課程	55.4	27.6	62.2	38.1	30.5	35.0	57.8	38.1
		大学院修士課程	28.9	56.9	35.6	47.6	37.3	50.0	28.9	35.7
		4年制大学	15.7	13.8	2.2	14.3	28.8	13.3	13.3	23.8
		短期大学	0.0	1.7	0.0	0.0	1.7	0.0	0.0	2.4
		中学校	0.0	0.0	0.0	0.0	1.7	1.7	0.0	0.0
4	最終学歴の大学院(大学)の種類	国公立大学	79.5	67.2	80.0	61.9	75.4	62.7	84.4	73.2
		私立大学	20.5	29.3	17.8	38.1	22.8	37.3	15.6	22.0
		外国	0.0	3.4	2.2	0.0	1.8	0.0	0.0	4.9
5	現在の専攻(主なもの一つ)	児童文学	1.2	3.4	2.2	4.8	3.4	8.3	0.0	0.0
		児童文化	7.2	5.2	0.0	9.5	10.2	16.7	0.0	0.0
		児童精神医学・児童保健学・精神医学	1.2	0.0	2.2	0.0	0.0	1.7	0.0	0.0
		児童心理学	0.0	3.4	2.2	0.0	1.7	3.3	0.0	0.0
		保育学・幼児教育学	14.5	20.7	20.0	16.7	13.6	40.0	0.0	0.0
		発達心理学・教育心理学	6.0	5.2	6.7	4.8	3.4	13.3	0.0	0.0
		臨床心理学・カウンセリング	2.4	1.7	0.0	4.8	3.4	6.7	0.0	0.0
		子ども論・青少年論	4.8	3.4	6.7	0.0	5.1	10.0	0.0	0.0
		音楽教育・美術教育	2.4	0.0	0.0	0.0	3.4	0.0	4.4	0.0
		学校教育	8.4	1.7	0.0	11.9	6.8	0.0	20.0	0.0
		社会教育	4.8	5.2	4.4	0.0	8.5	0.0	15.6	0.0
		教育社会学	18.1	10.3	20.0	11.9	11.9	0.0	46.7	0.0
		教育学・比較教育	4.8	3.4	11.1	0.0	1.7	0.0	13.3	0.0
		教育人類学・文化人類学	2.4	3.4	2.2	7.1	0.0	0.0	0.0	9.5
		社会福祉・児童福祉	4.8	3.4	0.0	7.1	6.8	0.0	0.0	16.7
		ジェンダー論	3.6	5.2	6.7	0.0	5.1	0.0	0.0	14.3
		社会学	1.2	1.7	2.2	2.4	0.0	0.0	0.0	4.8
		心理学	1.2	0.0	0.0	2.4	0.0	0.0	0.0	2.4
		体育学	2.4	0.0	0.0	0.0	3.4	0.0	0.0	4.8
		家政学・家族関係学	1.2	6.9	4.4	2.4	3.4	0.0	0.0	11.9
現職教員及び諸団体に活躍している	7.2	6.9	4.4	11.9	5.1	0.0	0.0	23.8		
その他	0.0	8.6	4.4	2.4	3.4	0.0	0.0	11.9		
6	本学会所属年数	1年未満	4.9	15.5	20.5	7.1	1.7	8.5	9.1	9.5
		1年以上3年未満	8.6	15.5	18.2	11.9	6.9	10.2	9.1	16.7
		3年以上5年未満	23.5	19.0	31.8	11.9	17.2	27.1	18.2	14.3
		5年以上7年未満	11.1	27.6	13.6	31.0	10.3	18.6	13.6	19.0
		7年以上	51.9	22.4	15.9	38.1	63.8	35.6	50.0	40.5
7	現在の所属	大学・短大・専修学校の専任	71.6	49.1	51.1	59.5	76.4	66.1	65.1	56.1
		研究所の専任・専従	1.2	1.8	0.0	4.8	0.0	1.7	0.0	2.4
		大学・短大・専修学校の非常勤	3.7	7.0	4.4	2.4	7.3	3.4	7.0	4.9
		大学院生・研究生	9.9	24.6	40.0	7.1	0.0	15.3	18.6	12.2
		小学校・中学校・高等学校	3.7	8.8	4.4	9.5	3.6	1.7	4.7	12.2
		幼稚園、保育園(保育所)	2.5	5.3	0.0	7.1	3.6	3.4	0.0	7.3
		行政職	2.5	1.8	0.0	2.4	3.6	3.4	2.3	0.0
		民間企業	1.2	0.0	0.0	0.0	1.8	1.7	0.0	0.0
		その他	3.7	1.8	0.0	7.1	3.6	3.4	2.3	4.9

クロス集計表
欠損値を抜いたの%表記

N=		性別		年齢3段階			専攻3分割				
		83	58	45	42	59	60	45	42		
		男	女	20歳 ~39歳	40歳 ~49歳	50歳~	児童 分野	教育 分野	その他		
8	職業上の地位 (q7 1と2に答えたひと)	教授または教授相当	51.7	32.1	0.0	28.0	83.7	41.0	50.0	56.5	
		助教授または助教授相当	34.5	21.4	36.4	52.0	11.6	28.2	32.1	26.1	
		専任講師または講師相当	12.1	35.7	54.5	16.0	2.3	28.2	10.7	13.0	
		助手または助手相当	1.7	10.7	9.1	4.0	2.3	2.6	7.1	4.3	
9	A 所属部局の分野 (q7 1と2に答えたひと)	教員養成系(一般学部の教職課程相当含む)	39.7	33.3	30.4	37.0	40.5	35.9	41.4	33.3	
		教育学系(教員養成系以外)	10.3	13.3	17.4	3.7	11.9	0.0	27.6	8.3	
		福祉系	5.2	13.3	8.7	11.1	7.1	5.1	3.4	20.8	
		社会学系	3.4	3.3	4.3	3.7	2.4	5.1	0.0	4.2	
		心理学系	3.4	3.3	4.3	0.0	7.1	10.3	0.0	0.0	
		文学系	6.9	6.7	4.3	7.4	7.1	5.1	10.3	4.2	
		児童・保育系	13.8	13.3	17.4	25.9	4.8	25.6	6.9	4.2	
		家政系・生活科学	3.4	10.0	4.3	3.7	7.1	2.6	0.0	16.7	
		その他	12.1	3.3	8.7	7.4	9.5	10.3	6.9	8.3	
		B 主な授業担当科目(1つ選択) (q7 1と2に答えたひと)	児童文学	3.4	6.7	4.3	7.4	2.3	7.5	0.0	4.0
			児童文化	3.4	6.7	0.0	3.7	9.3	12.5	0.0	0.0
児童心理学	1.7		0.0	0.0	3.7	0.0	2.5	0.0	0.0		
保育学・幼児教育学	16.9		26.7	26.1	18.5	16.3	42.5	0.0	4.0		
発達心理学・教育心理学	5.1		3.3	4.3	3.7	4.7	10.0	0.0	0.0		
臨床心理学・カウンセリング	1.7		0.0	0.0	0.0	4.7	5.0	0.0	0.0		
子ども論・青少年論	5.1		0.0	0.0	3.7	4.7	2.5	3.6	4.0		
特別活動・生徒指導	0.0		0.0	0.0	0.0	2.3	0.0	3.6	0.0		
学校教育	5.1		0.0	4.3	3.7	2.3	0.0	10.7	0.0		
社会教育	3.4		3.3	4.3	0.0	4.7	0.0	7.1	4.0		
教育社会学	20.3		6.7	17.4	11.1	16.3	2.5	42.9	4.0		
教育学・比較教育	5.1		6.7	8.7	7.4	2.3	5.0	7.1	4.0		
社会福祉・児童福祉	6.8		6.7	0.0	11.1	9.3	0.0	0.0	28.0		
社会学	5.1		0.0	4.3	3.7	2.3	2.5	0.0	8.0		
心理学	1.7		0.0	4.3	0.0	0.0	2.5	0.0	0.0		
体育学	1.7		0.0	0.0	0.0	2.3	0.0	0.0	4.0		
家政学・家族関係学	0.0		10.0	4.3	3.7	2.3	0.0	0.0	12.0		
その他	8.5	13.3	4.3	14.8	9.3	5.0	14.3	12.0			
授業担当科目はない	3.4	10.0	13.0	3.7	2.3	0.0	7.1	12.0			
10	A 子ども自身の文化	とても関心がある	70.4	50.0	54.5	70.7	58.2	67.8	59.5	52.5	
		少し関心がある	27.2	44.4	36.4	29.3	40.0	32.2	33.3	42.5	
		関心がない	2.5	5.6	9.1	0.0	1.8	0.0	7.1	5.0	
児童文化とマスコミ	とても関心がある	46.3	38.2	40.0	48.8	46.3	51.7	45.2	34.1		
	少し関心がある	48.8	58.2	48.9	51.2	51.9	44.8	50.0	61.0		
	関心がない	5.0	3.6	11.1	0.0	1.9	3.4	4.8	4.9		
子どもの遊び集団と環境	とても関心がある	69.5	61.1	56.8	76.2	66.7	68.4	67.4	63.4		
	少し関心がある	26.8	35.2	36.4	19.0	33.3	28.1	30.2	31.7		
	関心がない	3.7	3.7	6.8	4.8	0.0	3.5	2.3	4.9		
子どもと家族	とても関心がある	67.9	78.2	70.5	83.3	64.8	73.7	68.2	72.5		
	少し関心がある	27.2	18.2	25.0	16.7	25.9	21.1	27.3	22.5		
	関心がない	4.9	3.6	4.5	0.0	9.3	5.3	4.5	5.0		
幼児の生活と指導	とても関心がある	35.8	49.0	43.2	42.5	36.5	54.5	20.9	41.0		
	少し関心がある	45.7	43.1	38.6	45.0	50.0	34.5	60.5	43.6		
	関心がない	18.5	7.8	18.2	12.5	13.5	10.9	18.6	15.4		
子どもと学校	とても関心がある	56.8	43.1	47.7	48.8	56.9	41.8	72.1	41.0		
	少し関心がある	37.0	54.9	47.7	46.3	35.3	49.1	25.6	53.8		
	関心がない	6.2	2.0	4.5	4.9	7.8	9.1	2.3	5.1		
中学生・高校生の生活と文化	とても関心がある	44.4	29.6	40.0	31.7	39.6	30.4	56.8	25.0		
	少し関心がある	38.3	55.6	33.3	51.2	50.9	42.9	31.8	65.0		
	関心がない	17.3	14.8	26.7	17.1	9.4	26.8	11.4	10.0		

クロス集計表
欠損値を抜いたの%表記

N=		性別		年齢3段階			専攻3分割		
		83	58	45	42	59	60	45	42
		男	女	20歳 ~39歳	40歳 ~49歳	50歳~	児童 分野	教育 分野	その他
子どもの福祉と社会教育活動	とても関心がある	30.9	28.3	20.0	37.5	33.3	25.0	32.6	34.1
	少し関心がある	48.1	64.2	60.0	50.0	51.9	62.5	46.5	51.2
	関心がない	21.0	7.5	20.0	12.5	14.8	12.5	20.9	14.6
子どもの社会史	とても関心がある	40.7	24.5	31.8	27.5	43.6	42.1	35.7	24.4
	少し関心がある	38.3	62.3	45.5	52.5	45.5	45.6	45.2	53.7
	関心がない	21.0	13.2	22.7	20.0	10.9	12.3	19.0	22.0
帰国生と子どもに関する国際比較	とても関心がある	6.3	8.0	9.1	12.5	0.0	7.4	9.5	2.6
	少し関心がある	46.3	56.0	43.2	50.0	56.0	53.7	47.6	48.7
	関心がない	47.5	36.0	47.7	37.5	44.0	38.9	42.9	48.7
B 研究がまだ弱い部分(2つまで選択)	子ども自身の文化	21.7	15.5	11.1	26.2	22.0	20.0	13.3	26.2
	児童文化とマスコミ	19.3	20.7	20.0	21.4	16.9	15.0	17.8	26.2
	子どもの遊び集団と環境	7.2	5.2	8.9	7.1	3.4	6.7	2.2	9.5
	子どもと家族	10.8	20.7	15.6	19.0	10.2	13.3	11.1	19.0
	幼児の生活と指導	13.3	15.5	17.8	19.0	8.5	23.3	6.7	9.5
	子どもと学校	8.4	5.2	8.9	4.8	6.8	5.0	8.9	7.1
	中学生・高校生の生活と文化	7.2	12.1	6.7	9.5	10.2	11.7	6.7	7.1
	子どもの福祉と社会教育活動	33.7	27.6	33.3	23.8	37.3	20.0	51.1	28.6
	子どもの社会史	19.3	6.9	15.6	9.5	20.3	21.7	17.8	4.8
	帰国生と子どもに関する国際比較	14.5	15.5	22.2	9.5	11.9	11.7	20.0	11.9
	その他	4.8	5.2	4.4	4.8	3.4	3.3	4.4	7.1
11 自分の研究方法;理論的方法	よっていない	62.2	82.8	64.4	71.4	75.9	78.3	65.9	66.7
	よっている	37.8	17.2	35.6	28.6	24.1	21.7	34.1	33.3
自分の研究方法;調査的方法	よっていない	43.9	41.4	42.2	45.2	39.7	50.0	29.5	42.9
	よっている	56.1	58.6	57.8	54.8	60.3	50.0	70.5	57.1
自分の研究方法;歴史的方法	よっていない	78.0	87.9	82.2	81.0	81.0	71.7	86.4	90.5
	よっている	22.0	12.1	17.8	19.0	19.0	28.3	13.6	9.5
自分の研究方法;数理的・計量的方法	よっていない	87.8	91.4	80.0	90.5	94.8	93.3	79.5	92.9
	よっている	12.2	8.6	20.0	9.5	5.2	6.7	20.5	7.1
自分の研究方法;文献的方法	よっていない	61.0	60.3	66.7	61.9	51.7	61.7	63.6	50.0
	よっている	39.0	39.7	33.3	38.1	48.3	38.3	36.4	50.0
自分の研究方法;観察的 、フィールド・ワーク的方法	よっていない	36.6	39.7	40.0	26.2	48.3	35.0	43.2	40.5
	よっている	63.4	60.3	60.0	73.8	51.7	65.0	56.8	59.5
自分の研究方法;実験的方法	よっていない	90.2	93.1	88.9	92.9	93.1	93.3	90.9	90.5
	よっている	9.8	6.9	11.1	7.1	6.9	6.7	9.1	9.5
自分の研究方法;国際比較	よっていない	89.0	93.1	95.6	92.9	86.2	91.7	88.6	92.9
	よっている	11.0	6.9	4.4	7.1	13.8	8.3	11.4	7.1
12 重要な学会(第1位)	日本子ども社会学会	23.1	21.4	20.9	20.0	23.6	15.8	26.8	24.4
	日本教育社会学会	23.1	10.7	27.9	10.0	16.4	5.3	48.8	4.9
	日本児童文学学会	6.4	3.6	2.3	7.5	9.1	15.8	0.0	0.0
	日本乳幼児教育学会	0.0	1.8	0.0	0.0	1.8	0.0	0.0	2.4
	日本保育学会	12.8	19.6	14.0	17.5	14.5	33.3	2.4	2.4
	日本発達心理学会	3.8	5.4	9.3	2.5	0.0	10.5	0.0	0.0
	日本家政学会	0.0	3.6	2.3	2.5	0.0	0.0	0.0	4.9
	日本教育心理学会	0.0	1.8	0.0	0.0	1.8	1.8	0.0	0.0
	日本教育学会	1.3	0.0	0.0	0.0	1.8	1.8	0.0	0.0
	日本子ども家庭福祉学会	1.3	0.0	0.0	0.0	3.6	0.0	0.0	4.9
	日本社会福祉学会	1.3	3.6	0.0	5.0	1.8	0.0	0.0	7.3
	日本社会教育学会	3.8	3.6	4.7	0.0	5.5	0.0	9.8	2.4
	日本教育メディア学会	0.0	1.8	0.0	2.5	0.0	1.8	0.0	0.0
	日本国際教育学会	0.0	1.8	0.0	2.5	0.0	0.0	0.0	2.4
	日本児童青年精神医学会	1.3	0.0	0.0	0.0	1.8	0.0	0.0	2.4
	日本社会科教育学会	1.3	0.0	0.0	2.5	0.0	0.0	2.4	0.0
	日本生涯教育学会	0.0	1.8	2.3	0.0	0.0	0.0	2.4	0.0
	日本心理学会	0.0	1.8	0.0	0.0	1.8	1.8	0.0	0.0
	日本精神分析学会	1.3	0.0	2.3	0.0	0.0	1.8	0.0	0.0

クロス集計表
欠損値を抜いての%表記

N=		性別		年齢3段階			専攻3分割		
		83	58	45	42	59	60	45	42
		男	女	20歳 ~39歳	40歳 ~49歳	50歳~	児童 分野	教育 分野	その他
	日本体育学会	1.3	0.0	0.0	0.0	1.8	0.0	0.0	2.4
	日本体験学習学会	0.0	1.8	0.0	0.0	1.8	0.0	0.0	2.4
	日本調理科学学会	0.0	1.8	0.0	2.5	0.0	0.0	0.0	2.4
	日本特殊教育学会	1.3	1.8	2.3	2.5	0.0	0.0	0.0	4.9
	日本犯罪心理学会	1.3	0.0	0.0	0.0	1.8	1.8	0.0	0.0
	日本物理学会	1.3	0.0	0.0	2.5	0.0	0.0	0.0	2.4
	日本民族学会	1.3	1.8	2.3	2.5	0.0	0.0	0.0	4.9
	日本幼少児健康教育学会	1.3	0.0	0.0	0.0	1.8	0.0	0.0	2.4
	日本余暇学会	1.3	0.0	0.0	0.0	1.8	1.8	0.0	0.0
	日本笑い学会	1.3	0.0	0.0	2.5	0.0	0.0	0.0	2.4
	SRCD学会	1.3	0.0	0.0	0.0	1.8	1.8	0.0	0.0
	アジア民間生活学会	1.3	0.0	0.0	2.5	0.0	0.0	0.0	2.4
	異文化間教育学会	0.0	1.8	2.3	0.0	0.0	0.0	2.4	0.0
	絵本学会	0.0	1.8	0.0	0.0	1.8	1.8	0.0	0.0
	小児看護学会	0.0	1.8	2.3	0.0	0.0	0.0	0.0	2.4
	心理臨床学会	0.0	0.0	0.0	0.0	1.8	1.8	0.0	0.0
	数学教育学会	1.3	0.0	2.3	0.0	0.0	0.0	0.0	2.4
	生徒指導学会	1.3	0.0	0.0	2.5	0.0	0.0	2.4	0.0
	生命倫理学会	0.0	1.8	2.3	0.0	0.0	0.0	0.0	2.4
	大学美術教育学会	1.3	0.0	0.0	2.5	0.0	0.0	2.4	0.0
	舞踊学会	0.0	1.8	0.0	0.0	1.8	0.0	0.0	2.4
	北海道子ども学会	2.6	0.0	0.0	5.0	0.0	1.8	0.0	2.4
	野外文化教育学会	0.0	1.8	0.0	2.5	0.0	0.0	0.0	2.4
昨年、学会大会に参加した(第1位)	はい	89.6	80.4	86.0	82.5	87.0	91.2	85.0	78.0
	いいえ	10.4	19.6	14.0	17.5	13.0	8.8	15.0	22.0
昨年、学会大会で発表した(第1位)	はい	47.2	35.2	44.2	47.4	37.5	50.0	37.8	36.6
	いいえ	52.8	64.8	55.8	52.6	62.5	50.0	62.2	63.4
その学会誌をよく読む(第1位)	はい	94.6	96.4	97.7	97.4	92.3	100.0	92.1	92.5
	いいえ	5.4	3.6	2.3	2.6	7.7	0.0	7.9	7.5
昨年、その学会誌に投稿した(第1位)	はい	15.5	5.7	9.3	12.8	11.1	14.8	11.1	5.3
	いいえ	84.5	94.3	90.7	87.2	88.9	85.2	88.9	94.7
現在、その学会の役職や委員 (事務局員含む)である(第1位)	はい	39.7	14.5	4.7	33.3	50.0	29.1	37.8	24.4
	いいえ	60.3	85.5	95.3	66.7	50.0	70.9	62.2	75.6
重要な学会(第2位)	日本子ども社会学会	35.1	26.0	30.0	31.6	29.4	28.1	43.2	22.2
	日本教育社会学会	12.2	8.0	7.5	5.3	15.7	3.5	18.9	11.1
	日本児童文学学会	0.0	6.0	0.0	2.6	3.9	5.3	0.0	0.0
	日本乳幼児教育学会	4.1	4.0	5.0	5.3	2.0	8.8	0.0	0.0
	日本保育学会	5.4	8.0	5.0	7.9	7.8	8.8	0.0	11.1
	日本発達心理学会	1.4	0.0	0.0	2.6	0.0	1.8	0.0	0.0
	日本家政学会	0.0	10.0	5.0	5.3	2.0	3.5	0.0	8.3
	日本教育心理学会	1.4	2.0	0.0	2.6	2.0	1.8	2.7	0.0
	日本教育学会	4.1	2.0	2.5	5.3	3.9	3.5	8.1	0.0
	日本子ども家庭福祉学会	1.4	0.0	0.0	2.6	0.0	0.0	0.0	2.8
	日本社会福祉学会	1.4	0.0	0.0	0.0	3.9	0.0	0.0	5.6
	日本教育方法学会	2.7	2.0	0.0	5.3	2.0	3.5	2.7	0.0
	日本赤ちゃん学会	1.4	0.0	0.0	2.6	0.0	0.0	0.0	2.8
	日本イギリス児童文学学会	0.0	2.0	0.0	2.6	0.0	1.8	0.0	0.0
	日本音楽学会	1.4	0.0	0.0	0.0	2.0	1.8	0.0	0.0
	日本カウンセリング学会	0.0	2.0	0.0	0.0	2.0	1.8	0.0	0.0
	日本家庭科教育学会	0.0	2.0	2.5	0.0	0.0	0.0	0.0	2.8
	日本教育経営学会	2.7	0.0	2.5	0.0	2.0	0.0	5.4	0.0
	日本教育メディア学会	1.4	0.0	0.0	2.6	0.0	0.0	0.0	2.8
	日本高等教育学会	2.7	0.0	2.5	0.0	2.0	0.0	5.4	0.0
	日本児童青年精神医学会	1.4	0.0	0.0	0.0	2.0	1.8	0.0	0.0
	日本社会学会	2.7	0.0	5.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.6

クロス集計表
欠損値を抜いたの%表記

N=	性別		年齢3段階			専攻3分割			
	83	58	45	42	59	60	45	42	
	男	女	20歳 ~39歳	40歳 ~49歳	50歳~	児童 分野	教育 分野	その他	
日本社会心理学会	1.4	0.0	2.5	0.0	0.0	0.0	2.7	0.0	
日本社会政策学会	0.0	2.0	0.0	2.6	0.0	0.0	0.0	2.8	
日本社会福祉文献学会	0.0	2.0	0.0	0.0	2.0	0.0	0.0	2.8	
日本シミュレーション&ゲーミング学会	1.4	0.0	0.0	2.6	0.0	0.0	2.7	0.0	
日本心理学会	1.4	0.0	2.5	0.0	0.0	1.8	0.0	0.0	
日本デュイ学会	1.4	0.0	2.5	0.0	0.0	1.8	0.0	0.0	
日本特別活動学会	1.4	0.0	2.5	0.0	0.0	1.8	0.0	0.0	
日本人間性心理学会	0.0	2.0	0.0	2.6	0.0	1.8	0.0	0.0	
日本比較教育学会	0.0	2.0	2.5	0.0	0.0	0.0	0.0	2.8	
日本文学協会	1.4	0.0	2.5	0.0	0.0	1.8	0.0	0.0	
日本マスコミュニケーション学会	0.0	2.0	0.0	2.6	0.0	1.8	0.0	0.0	
日本民俗学会	1.4	2.0	2.5	2.6	0.0	0.0	0.0	5.6	
日本幼少児健康教育学会	0.0	2.0	2.5	0.0	0.0	1.8	0.0	0.0	
ISSBD学会	1.4	0.0	0.0	0.0	2.0	1.8	0.0	0.0	
栄養改善学会	0.0	2.0	0.0	2.6	0.0	0.0	0.0	2.8	
玩具人形学会	1.4	0.0	0.0	0.0	2.0	1.8	0.0	0.0	
玩具福祉学会	1.4	0.0	0.0	0.0	2.0	0.0	2.7	0.0	
九州教育学会	0.0	2.0	2.5	0.0	0.0	0.0	2.7	0.0	
教育史学会	0.0	2.0	2.5	0.0	0.0	0.0	0.0	2.8	
国際幼児教育学会	0.0	2.0	0.0	0.0	2.0	1.8	0.0	0.0	
社会事業史学会	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0	1.8	0.0	0.0	
社会分析学会	0.0	2.0	2.5	0.0	0.0	0.0	0.0	2.8	
図書館情報学会	1.4	0.0	0.0	0.0	2.0	1.8	0.0	0.0	
箱庭療法学会	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0	1.8	0.0	0.0	
福祉教育ボランティア学習学会	1.4	0.0	2.5	0.0	0.0	0.0	2.7	0.0	
母性衛生学会	0.0	2.0	2.5	0.0	0.0	0.0	0.0	2.8	
野外教育学会	1.4	0.0	0.0	0.0	2.0	1.8	0.0	0.0	
昨年、学会大会に参加した(第2位)	はい	67.1	58.0	62.5	65.8	62.0	59.6	63.9	69.4
	いいえ	32.9	42.0	37.5	34.2	38.0	40.4	36.1	30.6
昨年、学会大会で発表した(第2位)	はい	42.0	24.5	35.0	32.4	37.8	37.0	36.4	33.3
	いいえ	58.0	75.5	65.0	67.6	62.2	63.0	63.6	66.7
その学会誌をよく読む(第2位)	はい	88.7	83.7	77.5	91.9	91.7	87.5	88.2	86.1
	いいえ	11.3	16.3	22.5	8.1	8.3	12.5	11.8	13.9
昨年、その学会誌に投稿した(第2位)	はい	19.1	6.1	20.0	5.4	13.6	12.7	24.2	2.9
	いいえ	80.9	93.9	80.0	94.6	86.4	87.3	75.8	97.1
現在、その学会の役職や委員 (事務局員含む)である(第2位)	はい	23.9	18.4	5.0	29.7	30.2	20.4	24.2	20.6
	いいえ	76.1	81.6	95.0	70.3	69.8	79.6	75.8	79.4
重要な学会(第3位)	日本子ども社会学会	12.5	33.3	21.9	24.1	18.6	24.5	19.4	16.0
	日本教育社会学会	1.6	5.6	9.4	0.0	0.0	0.0	6.5	4.0
	日本児童文学学会	3.1	0.0	0.0	6.9	2.3	4.1	0.0	4.0
	日本乳幼児教育学会	3.1	2.8	6.3	3.4	0.0	6.1	0.0	0.0
	日本保育学会	7.8	16.7	9.4	10.3	14.0	16.3	6.5	8.0
	日本発達心理学会	1.6	5.6	3.1	0.0	4.7	6.1	0.0	0.0
	日本家政学会	0.0	2.8	3.1	0.0	0.0	2.0	0.0	0.0
	日本教育心理学会	3.1	0.0	0.0	6.9	0.0	2.0	0.0	4.0
	日本教育学会	15.6	5.6	9.4	13.8	11.6	4.1	25.8	8.0
	日本社会教育学会	3.1	2.8	0.0	3.4	4.7	0.0	3.2	8.0
	日本教育方法学会	1.6	0.0	0.0	0.0	2.3	0.0	0.0	4.0
	日本赤ちゃん学会	1.6	0.0	3.1	0.0	0.0	2.0	0.0	0.0
	日本音楽教育学会	1.6	0.0	0.0	0.0	2.3	2.0	0.0	0.0
	日本カウンセリング学会	0.0	0.0	0.0	0.0	2.3	2.0	0.0	0.0
	日本家族社会学会	1.6	2.8	3.1	3.4	0.0	0.0	0.0	8.0
	日本学校保健学会	1.6	0.0	0.0	0.0	2.3	2.0	0.0	0.0
	日本教育経営学会	1.6	0.0	0.0	0.0	2.3	0.0	3.2	0.0
	日本教育相談学会	0.0	2.8	0.0	0.0	2.3	2.0	0.0	0.0

クロス集計表
欠損値を抜いての%表記

N=		性別		年齢3段階			専攻3分割			
		83	58	45	42	59	60	45	42	
		男	女	20歳 ~39歳	40歳 ~49歳	50歳~	児童 分野	教育 分野	その他	
	日本高等教育学会	1.6	0.0	0.0	0.0	2.3	0.0	3.2	0.0	
	日本小児保健学会	1.6	0.0	0.0	3.4	0.0	2.0	0.0	0.0	
	日本体育学会	1.6	5.6	3.1	0.0	4.7	0.0	0.0	12.0	
	日本大学教育学会	1.6	0.0	3.1	0.0	0.0	0.0	3.2	0.0	
	日本デュイ学会	3.1	0.0	3.1	0.0	2.3	4.1	0.0	0.0	
	日本特別活動学会	1.6	0.0	0.0	0.0	2.3	0.0	3.2	0.0	
	日本発達障害学会	1.6	0.0	0.0	0.0	2.3	0.0	0.0	4.0	
	日本犯罪社会学会	1.6	0.0	3.1	0.0	0.0	0.0	3.2	0.0	
	日本比較教育学会	1.6	0.0	3.1	0.0	0.0	0.0	3.2	0.0	
	日本福祉文化学会	0.0	2.8	0.0	3.4	0.0	2.0	0.0	0.0	
	日本マスコミュニケーション学会	3.1	0.0	3.1	0.0	2.3	4.1	0.0	0.0	
	アニメーション学会	0.0	5.6	3.1	0.0	2.3	2.0	0.0	4.0	
	異文化間教育学会	0.0	2.8	0.0	0.0	0.0	2.0	0.0	0.0	
	栄養食品学会	0.0	2.8	0.0	3.4	0.0	0.0	0.0	4.0	
	応用心理学会	1.6	0.0	0.0	0.0	2.3	0.0	0.0	4.0	
	関西教育学会	1.6	0.0	3.1	0.0	0.0	0.0	3.2	0.0	
	九州教育学会	1.6	0.0	3.1	0.0	0.0	0.0	3.2	0.0	
	教育工学会	1.6	0.0	0.0	3.4	0.0	0.0	0.0	4.0	
	教育史学会	1.6	0.0	0.0	0.0	2.3	0.0	3.2	0.0	
	子ども学会	1.6	0.0	0.0	0.0	2.3	2.0	0.0	0.0	
	生涯学習学会	1.6	0.0	0.0	3.4	0.0	0.0	3.2	0.0	
	青年育成学会	1.6	0.0	0.0	0.0	2.3	0.0	3.2	0.0	
	生物物理学会	1.6	0.0	0.0	3.4	0.0	0.0	0.0	4.0	
	全国大学国語教育学会	1.6	0.0	3.1	0.0	0.0	2.0	0.0	0.0	
	中国四国心理学会	1.6	0.0	0.0	3.4	0.0	2.0	0.0	0.0	
	臨床心理学会	1.6	0.0	0.0	3.4	0.0	0.0	3.2	0.0	
	日本 学会(判読できず)	1.6	0.0	0.0	0.0	2.3	2.0	0.0	0.0	
	昨年、学会大会に参加した(第3位)	はい	48.4	47.2	50.0	48.3	48.8	53.1	44.8	44.0
		いいえ	51.6	52.8	50.0	51.7	51.2	46.9	55.2	56.0
	昨年、学会大会で発表した(第3位)	はい	24.1	11.8	18.8	14.3	27.0	21.7	19.2	20.0
		いいえ	75.9	88.2	81.3	85.7	73.0	78.3	80.8	80.0
	その学会誌をよく読む(第3位)	はい	77.0	80.0	78.1	67.9	85.0	81.3	64.3	88.0
		いいえ	23.0	20.0	21.9	32.1	15.0	18.8	35.7	12.0
	昨年、その学会誌に投稿した(第3位)	はい	12.3	2.9	12.5	7.1	5.6	10.6	7.4	4.3
		いいえ	87.7	97.1	87.5	92.9	94.4	89.4	92.6	95.7
	現在、その学会の役職や委員 (事務局員含む)である(第3位)	はい	10.7	2.9	0.0	7.1	14.3	4.3	15.4	4.3
		いいえ	89.3	97.1	100.0	92.9	85.7	95.7	84.6	95.7
13	自分の研究成果を発表するため	あてはまらない	66.3	52.6	37.8	66.7	77.6	61.7	53.3	70.7
		あてはまる	33.7	47.4	62.2	33.3	22.4	38.3	46.7	29.3
	自分の研究に役立てるため	あてはまらない	24.1	31.6	31.1	28.6	25.9	26.7	28.9	29.3
		あてはまる	75.9	68.4	68.9	71.4	74.1	73.3	71.1	70.7
	自分の就職・昇進・転職に役立てるため	あてはまらない	96.4	96.5	91.1	97.6	100.0	100.0	91.1	97.6
		あてはまる	3.6	3.5	8.9	2.4	0.0	0.0	8.9	2.4
	職場や教育現場での実践に 役立てられるため	あてはまらない	75.9	82.5	91.1	66.7	77.6	81.7	86.7	65.9
		あてはまる	24.1	17.5	8.9	33.3	22.4	18.3	13.3	34.1
	「子どもに関する研究」の最先端の 情報を得るため	あてはまらない	50.6	52.6	55.6	45.2	50.0	53.3	53.3	43.9
		あてはまる	49.4	47.4	44.4	54.8	50.0	46.7	46.7	56.1
	知り合いからすすめられて	あてはまらない	59.0	43.9	48.9	54.8	53.4	56.7	31.1	70.7
		あてはまる	41.0	56.1	51.1	45.2	46.6	43.3	68.9	29.3
14	魅力的な学会である	はい	59.8	64.3	71.1	51.2	57.9	57.6	55.6	70.0
		どちらともいえない	35.4	33.9	22.2	43.9	42.1	39.0	40.0	27.5
		いいえ	4.9	1.8	6.7	4.9	0.0	3.4	4.4	2.5
	政策形成に役立つ	はい	9.9	7.1	6.7	4.9	12.5	8.6	8.9	7.5
		どちらともいえない	65.4	71.4	77.8	61.0	67.9	65.5	73.3	67.5
		いいえ	24.7	21.4	15.6	34.1	19.6	25.9	17.8	25.0

クロス集計表
欠損値を抜いたの%表記

N=		性別		年齢3段階			専攻3分割		
		83	58	45	42	59	60	45	42
		男	女	20歳 ~39歳	40歳 ~49歳	50歳~	児童 分野	教育 分野	その他
実践に役立つ	はい	29.3	32.1	33.3	29.3	29.8	22.0	40.0	32.5
	どちらともいえない	53.7	51.8	51.1	48.8	56.1	54.2	48.9	55.0
	いいえ	17.1	16.1	15.6	22.0	14.0	23.7	11.1	12.5
批判的精神の形成に役立つ	はい	17.5	26.8	20.0	22.0	23.6	29.8	17.8	15.0
	どちらともいえない	67.5	58.9	60.0	56.1	70.9	54.4	71.1	67.5
	いいえ	15.0	14.3	20.0	22.0	5.5	15.8	11.1	17.5
多彩なアプローチができる	はい	72.0	69.6	79.5	61.9	70.2	68.3	75.6	66.7
	どちらともいえない	23.2	28.6	15.9	33.3	28.1	26.7	22.2	30.8
	いいえ	4.9	1.8	4.5	4.8	1.8	5.0	2.2	2.6
理論枠組みを提供してくれる	はい	24.7	43.6	35.6	36.6	25.5	38.6	24.4	30.0
	どちらともいえない	63.0	50.9	53.3	51.2	69.1	50.9	66.7	62.5
	いいえ	12.3	5.5	11.1	12.2	5.5	10.5	8.9	7.5
方法論が洗練されている	はい	7.3	5.7	6.8	5.0	7.1	8.6	6.8	2.6
	どちらともいえない	72.0	84.9	75.0	70.0	83.9	75.9	79.5	76.9
	いいえ	20.7	9.4	18.2	25.0	8.9	15.5	13.6	20.5
イデオロギーにとらわれない	はい	48.8	36.8	37.8	45.2	45.6	36.7	55.6	37.5
	どちらともいえない	45.1	59.6	55.6	45.2	54.4	58.3	42.2	55.0
	いいえ	6.1	3.5	6.7	9.5	0.0	5.0	2.2	7.5
国際的視野が養える	はい	6.2	7.4	6.8	4.9	7.3	6.9	4.5	7.7
	どちらともいえない	69.1	77.8	68.2	80.5	70.9	69.0	77.3	74.4
	いいえ	24.7	14.8	25.0	14.6	21.8	24.1	18.2	17.9
15 歴史的な研究	はい	44.6	41.8	33.3	39.0	57.1	44.8	51.1	37.5
	どちらともいえない	48.2	50.9	55.6	53.7	39.3	48.3	44.4	52.5
	いいえ	7.2	7.3	11.1	7.3	3.6	6.9	4.4	10.0
実践的な研究	はい	75.6	85.7	71.1	85.7	80.4	72.9	80.0	87.5
	どちらともいえない	22.0	14.3	26.7	14.3	17.9	25.4	17.8	12.5
	いいえ	2.4	0.0	2.2	0.0	1.8	1.7	2.2	0.0
政策的な研究、提言	はい	44.4	52.8	50.0	46.3	50.0	42.1	53.3	52.6
	どちらともいえない	49.4	45.3	47.7	48.8	46.3	52.6	44.4	42.1
	いいえ	6.2	1.9	2.3	4.9	3.7	5.3	2.2	5.3
理論的な研究	はい	66.7	67.3	59.1	71.4	68.5	65.5	68.9	65.8
	どちらともいえない	29.6	30.9	38.6	23.8	29.6	31.0	28.9	31.6
	いいえ	3.7	1.8	2.3	4.8	1.9	3.4	2.2	2.6
質問紙による研究	はい	35.4	45.3	38.6	43.9	35.8	30.4	48.9	42.1
	どちらともいえない	56.1	47.2	50.0	48.8	56.6	62.5	44.4	44.7
	いいえ	8.5	7.5	11.4	7.3	7.5	7.1	6.7	13.2
参与観察などのフィールド・ワーク	はい	78.0	76.4	82.2	81.0	70.4	81.0	84.4	64.1
	どちらともいえない	19.5	23.6	15.6	19.0	27.8	17.2	13.3	35.9
	いいえ	2.4	0.0	2.2	0.0	1.9	1.7	2.2	0.0
実験による研究	はい	27.5	20.8	27.3	24.4	25.0	25.0	22.7	28.9
	どちらともいえない	60.0	69.8	63.6	58.5	65.4	60.7	63.6	65.8
	いいえ	12.5	9.4	9.1	17.1	9.6	14.3	13.6	5.3
外国との比較研究	はい	49.4	50.9	40.9	41.5	64.2	50.0	46.7	52.6
	どちらともいえない	43.2	43.4	45.5	53.7	34.0	46.4	42.2	42.1
	いいえ	7.4	5.7	13.6	4.9	1.9	3.6	11.1	5.3
16 子ども社会学会に強い愛着を感じる	はい	59.8	62.0	67.4	51.3	61.1	56.6	64.4	61.5
	いいえ	40.2	38.0	32.6	48.7	38.9	43.4	35.6	38.5
	子ども社会学会から強い 知的刺激を受けている	はい	44.4	56.4	50.0	46.3	51.8	44.8	48.9
子ども社会学会には知り合いが多い	いいえ	55.6	43.6	50.0	53.7	48.2	55.2	51.1	43.6
	はい	56.8	43.4	46.5	46.3	57.4	40.0	71.1	41.0
子ども社会学会の大会には 必ず参加したい	いいえ	43.2	56.6	53.5	53.7	42.6	60.0	28.9	59.0
	はい	56.8	49.1	65.9	42.5	52.7	47.4	64.4	50.0
子ども社会学会は、 今後もっと発展していこう	いいえ	43.2	50.9	34.1	57.5	47.3	52.6	35.6	50.0
	はい	78.8	85.4	78.0	82.1	80.8	81.5	80.0	79.4
	いいえ	21.3	14.6	22.0	17.9	19.2	18.5	20.0	20.6

クロス集計表
欠損値を抜いたの%表記

N=		性別		年齢3段階			専攻3分割			
		83	58	45	42	59	60	45	42	
		男	女	20歳 ~39歳	40歳 ~49歳	50歳~	児童 分野	教育 分野	その他	
17	最近5年間の大会参加回数	参加していない	13.4	22.8	11.4	21.4	19.0	6.8	15.6	34.1
	1回	18.3	35.1	36.4	26.2	19.0	33.9	15.6	26.8	
	2回	17.1	17.5	15.9	21.4	12.1	18.6	17.8	12.2	
	3回	19.5	8.8	18.2	14.3	13.8	20.3	15.6	7.3	
	4回	11.0	5.3	4.5	9.5	10.3	13.6	6.7	2.4	
	5回	20.7	10.5	13.6	7.1	25.9	6.8	28.9	17.1	
18	学会発表回数(シンポ・テーマセッション・ワークショップ除く)	発表していない	48.8	52.6	40.9	61.9	53.4	44.1	48.9	65.9
	1回	17.1	21.1	25.0	11.9	17.2	25.4	17.8	7.3	
	2回	14.6	17.5	22.7	11.9	10.3	20.3	11.1	12.2	
	3回	8.5	5.3	9.1	4.8	8.6	6.8	8.9	7.3	
	4回	3.7	1.8	2.3	2.4	3.4	0.0	6.7	2.4	
	5回	2.4	1.8	0.0	4.8	1.7	1.7	2.2	2.4	
	6回	1.2	0.0	0.0	0.0	1.7	0.0	0.0	2.4	
	7回以上	3.7	0.0	0.0	2.4	3.4	1.7	4.4	0.0	
19	シンポ・テーマセッション・ワークショップ報告回数(延べ)	ない	71.6	80.7	95.5	66.7	68.4	72.9	82.2	75.0
	1回	14.8	14.0	4.5	26.2	12.3	15.3	8.9	17.5	
	2回	3.7	3.5	0.0	4.8	5.3	8.5	0.0	0.0	
	3回	3.7	1.8	0.0	0.0	7.0	1.7	4.4	2.5	
	4回	2.5	0.0	0.0	0.0	3.5	0.0	4.4	0.0	
	5回	1.2	0.0	0.0	2.4	0.0	1.7	0.0	0.0	
	6回	1.2	0.0	0.0	0.0	1.8	0.0	0.0	2.5	
	7回以上	1.2	0.0	0.0	0.0	1.8	0.0	0.0	2.5	
20	'ワークショップ'のテーマや内容の評価	とてもよい	11.4	18.2	9.1	17.5	14.8	16.1	7.0	17.5
	ややよい	44.3	49.1	50.0	37.5	50.0	46.4	55.8	35.0	
	どちらともいえない	39.2	29.1	34.1	37.5	35.2	26.8	37.2	47.5	
	あまりよくない	2.5	3.6	4.5	5.0	0.0	7.1	0.0	0.0	
	ぜんぜんよくない	2.5	0.0	2.3	2.5	0.0	3.6	0.0	0.0	
	21	'テーマセッション'(ラウンドテーブル)の評価	とてもよい	12.5	14.8	6.8	17.1	15.1	14.3	6.8
ややよい	43.8	51.9	50.0	43.9	49.1	48.2	52.3	41.0		
どちらともいえない	37.5	31.5	36.4	34.1	34.0	30.4	36.4	41.0		
あまりよくない	3.8	1.9	6.8	0.0	1.9	5.4	2.3	0.0		
ぜんぜんよくない	2.5	0.0	0.0	4.9	0.0	1.8	2.3	0.0		
22	シンポのテーマや内容についての印象	毎年、適切なテーマや内容が設定されている	38.0	50.0	41.9	45.0	41.5	29.8	46.5	58.3
	年によっては、必ずしも適切なテーマや内容が設定されていない	55.7	50.0	55.8	50.0	54.7	64.9	48.8	41.7	
	毎年、適切なテーマや内容が設定されていない	6.3	0.0	2.3	5.0	3.8	5.3	4.7	0.0	
23	シンポジウムの過去5年間のテーマで一番興味をもったもの	子どもの'居場所'はどこか(1998年)	11.7	17.2	6.8	11.9	22.2	10.7	15.9	17.1
	子どもをどうみていくか(1999年)	24.7	13.8	18.2	23.8	18.5	26.8	15.9	14.6	
	いま子ども社会に何が起きているか(2000年)	26.0	24.1	20.5	23.8	31.5	28.6	27.3	19.5	
	育児不安の構造(2001年)	7.8	22.4	20.5	11.9	9.3	10.7	6.8	24.4	
	今、学校の中の子どもたちは!(2002年)	10.4	12.1	13.6	9.5	7.4	7.1	18.2	7.3	
	興味をもったものがない	9.1	1.7	11.4	7.1	0.0	10.7	4.5	0.0	
	わからない	10.4	8.6	9.1	11.9	11.1	5.4	11.4	17.1	
24	'学会ニュース'に満足していますか	はい	48.7	40.4	51.2	41.5	46.4	39.7	64.3	36.6
	どちらともいえない	48.7	59.6	44.2	58.5	51.8	55.2	35.7	63.4	
	いいえ	2.6	0.0	4.7	0.0	1.8	5.2	0.0	0.0	
25	'ホームページ'をよくみますか	よく見ている	2.5	1.7	2.3	2.4	1.8	0.0	4.5	2.4
	時々見ている	36.7	19.0	45.5	28.6	16.1	28.1	38.6	19.0	
	1~2度見たことがある	27.8	37.9	27.3	38.1	28.6	35.1	25.0	31.0	
	見たことがない	32.9	41.4	25.0	31.0	53.6	36.8	31.8	47.6	
26	'子ども社会研究'をどの程度読んでいますか	全体を詳しく読む	12.3	12.1	17.8	11.9	10.5	15.3	11.4	11.9
	興味をもった論文だけ読む	82.7	84.5	77.8	83.3	86.0	83.1	81.8	83.3	
	ほとんど読まない	4.9	3.4	4.4	4.8	3.5	1.7	6.8	4.8	

クロス集計表
欠損値を抜いたの%表記

N=		性別		年齢3段階			専攻3分割			
		83	58	45	42	59	60	45	42	
		男	女	20歳 ~39歳	40歳 ~49歳	50歳~	児童 分野	教育 分野	その他	
	『子ども社会研究』で、 特集を組むべきだと思いますか	はい	43.8	42.1	33.3	48.8	50.0	54.2	41.9	31.7
		どちらともいえない	41.3	50.9	46.7	43.9	42.9	35.6	44.2	58.5
		いいえ	12.5	5.3	17.8	7.3	3.6	10.2	11.6	4.9
		その他	2.5	1.8	2.2	0.0	3.6	0.0	2.3	4.9
	『子ども社会研究』の内容に 満足していますか	とても満足している	6.2	8.6	11.1	4.8	5.3	6.8	4.5	9.5
		やや満足している	46.9	58.6	62.2	52.4	43.9	52.5	54.5	50.0
		どちらともいえない	38.3	31.0	20.0	33.3	49.1	33.9	36.4	35.7
		やや不満である	6.2	1.7	4.4	7.1	1.8	5.1	4.5	2.4
		とても不満である	2.5	0.0	2.2	2.4	0.0	1.7	0.0	2.4
27	理事選挙でどの程度投票しますか	必ず投票する	51.9	28.1	36.4	38.1	49.1	34.5	60.5	31.7
		時々投票する	27.8	28.1	20.5	28.6	36.4	36.2	23.3	24.4
		投票したことがない	20.3	43.9	43.2	33.3	14.5	29.3	16.3	43.9
28	理事、評議委員、監査、各種委員、 事務局員の経験がありますか	ある	36.3	10.5	18.2	14.3	39.3	19.0	40.9	17.1
		ない	63.8	89.5	81.8	85.7	60.7	81.0	59.1	82.9
29	正会員(7000円)	適当である	65.4	66.7	66.7	64.3	67.9	61.0	75.0	63.4
		高すぎる	27.2	19.3	20.0	26.2	23.2	28.8	15.9	22.0
		安すぎる	1.2	0.0	0.0	0.0	1.8	0.0	2.3	0.0
		わからない	4.9	12.3	11.1	7.1	7.1	10.2	4.5	12.2
		その他	1.2	1.8	2.2	2.4	0.0	0.0	2.3	2.4
	学生会員(4000円)	適当である	64.9	64.3	60.5	67.5	65.5	63.8	69.0	61.5
		高すぎる	22.1	17.9	14.0	22.5	23.6	22.4	21.4	15.4
		安すぎる	3.9	0.0	2.3	0.0	3.6	3.4	0.0	2.6
		わからない	6.5	14.3	16.3	7.5	7.3	8.6	4.8	17.9
		その他	2.6	3.6	7.0	2.5	0.0	1.7	4.8	2.6
	賛助会員(10000円)	適当である	79.2	58.2	71.4	70.7	70.4	70.2	76.2	64.1
		高すぎる	1.3	7.3	2.4	4.9	3.7	3.5	2.4	5.1
		安すぎる	5.2	3.6	0.0	0.0	11.1	5.3	4.8	2.6
		わからない	14.3	30.9	26.2	24.4	14.8	21.1	16.7	28.2
30	自由記述	記述なし	67.5	82.8	82.2	64.3	76.3	80.0	71.1	69.0
		記述あり	32.5	17.2	17.8	35.7	23.7	20.0	28.9	31.0

<別紙>

Q12で回答された学会名 一覧

単純集計表

重要な学会(第1位)

	度数	%	有効%
日本子ども社会学会	30	20.4	21.6
日本教育社会学会	25	17.0	18.0
日本保育学会	21	14.3	15.1
日本児童文学学会	9	6.1	6.5
日本発達心理学会	6	4.1	4.3
日本社会教育学会	5	3.4	3.6
日本社会福祉学会	3	2.0	2.2
日本家政学会	2	1.4	1.4
日本子ども家庭福祉学会	2	1.4	1.4
日本特殊教育学会	2	1.4	1.4
日本民族学会	2	1.4	1.4
北海道子ども学会	2	1.4	1.4
日本乳幼児教育学会	1	0.7	0.7
日本教育心理学会	1	0.7	0.7
日本教育学会	1	0.7	0.7
日本教育メディア学会	1	0.7	0.7
日本国際教育学会	1	0.7	0.7
日本児童青年精神医学会	1	0.7	0.7
日本社会科教育学会	1	0.7	0.7
日本生涯教育学会	1	0.7	0.7
日本心理学会	1	0.7	0.7
日本精神分析学会	1	0.7	0.7
日本体育学会	1	0.7	0.7
日本体験学習学会	1	0.7	0.7
日本調理科学学会	1	0.7	0.7
日本犯罪心理学会	1	0.7	0.7
日本物理学会	1	0.7	0.7
日本幼少児健康教育学会	1	0.7	0.7
日本余暇学会	1	0.7	0.7
日本笑い学会	1	0.7	0.7
SRCD学会	1	0.7	0.7
アジア民間生活学会	1	0.7	0.7
異文化間教育学会	1	0.7	0.7
絵本学会	1	0.7	0.7
小児看護学会	1	0.7	0.7
心理臨床学会	1	0.7	0.7
数学教育学会	1	0.7	0.7
生徒指導学会	1	0.7	0.7
生命倫理学会	1	0.7	0.7
大学美術教育学会	1	0.7	0.7
舞踊学会	1	0.7	0.7
野外文化教育学会	1	0.7	0.7
合計	139	94.6	100.0
システム欠損値	8	5.4	
	147	100.0	

重要な学会(第2位)

	度数	%	有効%
日本子ども社会学会	40	27.2	30.8
日本教育社会学会	13	8.8	10.0
日本保育学会	9	6.1	6.9
日本乳幼児教育学会	5	3.4	3.8
日本家政学会	5	3.4	3.8
日本教育学会	5	3.4	3.8
日本児童文学学会	3	2.0	2.3
日本教育方法学会	3	2.0	2.3
日本教育心理学会	2	1.4	1.5
日本社会福祉学会	2	1.4	1.5
日本教育経営学会	2	1.4	1.5
日本高等教育学会	2	1.4	1.5
日本社会学会	2	1.4	1.5
日本民俗学会	2	1.4	1.5
日本発達心理学会	1	0.7	0.8
日本子ども家庭福祉学会	1	0.7	0.8
日本赤ちゃん学会	1	0.7	0.8
日本イギリス児童文学学会	1	0.7	0.8
日本音楽学会	1	0.7	0.8
日本カウンセリング学会	1	0.7	0.8
日本家庭科教育学会	1	0.7	0.8
日本教育メディア学会	1	0.7	0.8
日本児童青年精神医学会	1	0.7	0.8
日本社会心理学会	1	0.7	0.8
日本社会政策学会	1	0.7	0.8
日本社会福祉文献学会	1	0.7	0.8
日本シュミレーション&ゲーミング学会	1	0.7	0.8
日本心理学会	1	0.7	0.8
日本デューイ学会	1	0.7	0.8
日本特別活動学会	1	0.7	0.8
日本人間性心理学会	1	0.7	0.8
日本比較教育学会	1	0.7	0.8
日本文学協会	1	0.7	0.8
日本マスコミュニケーション学会	1	0.7	0.8
日本幼少児健康教育学会	1	0.7	0.8
ISSBD学会	1	0.7	0.8
栄養改善学会	1	0.7	0.8
玩具人形学会	1	0.7	0.8
玩具福祉学会	1	0.7	0.8
九州教育学会	1	0.7	0.8
教育史学会	1	0.7	0.8
国際幼児教育学会	1	0.7	0.8
社会事業史学会	1	0.7	0.8
社会分析学会	1	0.7	0.8
図書館情報学会	1	0.7	0.8
箱庭療法学会	1	0.7	0.8
福祉教育ボランティア学習学会	1	0.7	0.8
母性衛生学会	1	0.7	0.8
野外教育学会	1	0.7	0.8
合計	130	88.4	100.0
システム欠損値	17	11.6	
	147	100.0	

重要な学会(第3位)

	度数	%	有効%
日本子ども社会学会	22	15.0	21.0
日本保育学会	12	8.2	11.4
日本教育学会	12	8.2	11.4
日本教育社会学会	3	2.0	2.9
日本児童文学学会	3	2.0	2.9
日本乳幼児教育学会	3	2.0	2.9
日本発達心理学会	3	2.0	2.9
日本社会教育学会	3	2.0	2.9
日本体育学会	3	2.0	2.9
日本教育心理学会	2	1.4	1.9
日本家族社会学会	2	1.4	1.9
日本デューイ学会	2	1.4	1.9
日本マスコミュニケーション学会	2	1.4	1.9
アニメーション学会	2	1.4	1.9
日本家政学会	1	0.7	1.0
日本教育方法学会	1	0.7	1.0
日本赤ちゃん学会	1	0.7	1.0
日本音楽教育学会	1	0.7	1.0
日本カウンセリング学会	1	0.7	1.0
日本学校保健学会	1	0.7	1.0
日本教育経営学会	1	0.7	1.0
日本教育相談学会	1	0.7	1.0
日本高等教育学会	1	0.7	1.0
日本小児保健学会	1	0.7	1.0
日本大学教育学会	1	0.7	1.0
日本特別活動学会	1	0.7	1.0
日本発達障害学会	1	0.7	1.0
日本犯罪社会学会	1	0.7	1.0
日本比較教育学会	1	0.7	1.0
日本福祉文化学会	1	0.7	1.0
異文化間教育学会	1	0.7	1.0
栄養食品学会	1	0.7	1.0
応用心理学会	1	0.7	1.0
関西教育学会	1	0.7	1.0
九州教育学会	1	0.7	1.0
教育工学会	1	0.7	1.0
教育史学会	1	0.7	1.0
子ども学会	1	0.7	1.0
生涯学習学会	1	0.7	1.0
青年育成学会	1	0.7	1.0
生物物理学会	1	0.7	1.0
全国大学国語教育学会	1	0.7	1.0
中国四国心理学会	1	0.7	1.0
臨床心理学会	1	0.7	1.0
日本 学会(判読できず)	1	0.7	1.0
合計	105	71.4	100.0
システム欠損値	42	28.6	
	147	100.0	

専攻	自由記述	性	年齢
----	------	---	----

原則 * 特定の人物に言及した部分は、内容の如何を問わず、削除している。

児童分野

児_1	入会したばかりですので、回答に困りましたが、お役に立てれば幸いです。	男	20-39
児_2	一言。もっと若手にチャンスを与えてください。一部の大学にかたよりにないように与えてください。お願い致します。	男	20-39
児_3	学会の抄録集を事前に申し込めるようにしてほしい(大会参加・不参加にかかわらず)。	女	20-39
児_4	昨年入会させていただきました。できることなら、若い研究者の登龍門のような存在になっていただきたいと思います。	女	20-39
児_5	特にございません	男	40-49
児_6	教育社会学会色が年々強くなっていると思います。シンポジウムやワークショップ等で、意識的に多領域や方法等を取り上げていくことで子ども社会学会の学際領域にまたがる学会としての魅力が増すことと思います。	男	40-49
児_7	とにかく私的学会・仲間たちの学会になり下がっている。この体制を変えれば、もっと会員が減っていくのではないか。批判の仕方に関して仲間以外はずぶずぶといった様な雰囲気ではなく、もっと建設的な意見が出るような学会の雰囲気を望む。そうでなくては、知の向上も望めないのではと思う。	男	40-49
児_8	比較的多様な分野の会員が集まっているので、ひとつのテーマについて多方面な討議ができたり、アドバイスがもらえたりするのが本学会の良いところだと思っている。	女	40-49

専攻	自由記述	性	年齢
児_9	「～社会学会」と名前に社会がついているにもかかわらず、発表の内容、発表者、パネリスト、司会等に片寄りを感じる。また特に海外との比較研究やアンケート調査の発表に対する自己省察が欠けているのは不思議でならない。今、なぜそのことをとりあげることに意味があるのか。日本の子ども社会をとりまく問題を改善することにその研究がどのようにかかわるかという問題意識が欠けている。個人の発表にしる、ラウンドテーブルにしる、ワークショップにしる、学問的に意義ある討論が成立しにくいところに現在のこの学会がかかわる問題があるのでは？だから新会員も、個人発表も増えないのではないか？	女	40-49
児_10	研究が表面的なものが多いように思います。明治学院での発表で比率の割り出し方が違っていて、その時点でパーセンテージによる裏付けが出来ない、論そのものが成立しない訳です。単なる業績稼ぎの発表が多いのでは(過去の自分を含めて反省)。	?	40-49
児_11	学会の運営が全国を視野に入れる シンポの題目に魅力がないものがある。広く題目と演者を公募したらいかか？ 少なくとも現場と直結する<臨床>の時間を学会のプログラムに入れることを望む	男	50-
児_12	方法論に関する議論において、事例研究、参与観察、エスノグラフィーについて取り上げてほしい。外国籍児童生徒、ニューカマーの子どものテーマを取り上げてほしい。	女	?
教育分野			
教_1	社会学の研究の一端を学ぶことができ、自分の研究に対して、良い刺激になっている。但し、子どもを多角的に捉えるのであれば、教育、社会教育、医学(臨床)、生理学、法学等の他分野との積極的連携が必要であると感じている。	男	20-39
教_2	研究者と実践者の交流をもっと大切にしてほしいです。	男	20-39
教_3	若い人が少ない。学会の雰囲気がかたい。「ただ調べただけ」の発表が多い。	男	20-39
教_4	研究紀要等を含めて、研究レベルが今一歩であるという印象を持っている。しかし、今後の発展が期待できる学会でもある。	男	40-49

専攻	自由記述	性	年齢
教_5	特集を組むときやテーマを決めるとき、会員の研究を全般的に把握して、論文の依頼等すべきではないか。一部の会員の発表の場のように思っているように思う。社会学系統の研究者の集まりという感じがする。「子ども社会」学で、「子ども」社会学ではなかったはずである。	男	40-49
教_6	問題点として以下のように思います。 子ども社会学会は教育社会学会が親学会などでは断じてない。本年度のシンポでの発言は反省し、撤回していただきたい。学会として大変恥ずべきことである。多くの人が同様に感じ、途中退席した。 研究法については、質問紙による調査、実験、外国との比較などの方法を“客観的”であるとして無反省に取り組むものが多い。もっと子ども社会や子どもそのものの現実の在り様を真正面から真摯にとりくむべきである。 理事、役員等が高齢化しすぎており、現代の子どもをめぐる問題状況に柔軟に対応できていない。また、一部の大学出身者や分野への偏りを感じる。 本年度のシンポでは、現在の教育改革(政策)や子どもの問題状況への対処のあり方について、あまりに不勉強で一般的な意見が多くみられた。特に近年の教育改革については、文献的な基本的理解さえも欠けているくらいがあった。むしろ現代社会における教育や子どもをめぐる状況は、どのような問題であるのか(それは1人1人の子どもが生きることが困難な状況なのである)を詳細にとらえ、提言していくことが可能となるような学会をめざすべきであると思う。	男	40-49
教_7	研究へのスタンス、方法、理論的バックグラウンド…様々な点での多様性がこの学会の特色だと思えます。この特色を失わず、しかも相互に対話が可能であるように、学会が発足していくことを望んでいます。事務局が学会事務を適切かつ迅速に進めてくださっている点に感謝いたします。事務局員のご負担が過剰になっていないか心配です。	男	40-49
教_8	子どもの問題を社会的にとらえることは今後ますます必要になると思えます。学会の発展を祈ります。	男	40-49
教_9	学会運営がオープンでよい。	男	50-
教_10	大変自由な雰囲気での研究の情報交換ができる学会である。この学会の風土を大切にしながら、第10回を迎える子ども社会学会の特色をどう出すかが今後の課題といえるだろう。研究の対象や方法、共同研究(学際的な)あり方など、学会として検討して行ってほしいと思います。	男	50-
教_11	毎年の大会を楽しみに会員を続けています。揺れ動く社会情勢、教育現場のあわだちさの中であって、何物にもとられることのない研究姿勢が魅力です。	男	50-
教_12	学際的研究の発展が期待される	男	50-

専攻	自由記述	性	年齢
教_13	本来会員となるべき人々が未参加の人が数多く存在する。(自分も含めて)会員数の増加を図るべきである。	男	50-

その他			
他_1	テーマを継続させてください(単発ではなく)。	女	20-39
他_2	小学校就学前に関する部会が弱いかな?という印象を持ちました。	男	40-49
他_3	なかなか参加できないのですが、会の姿勢に深く敬意を表します。時間とお金があればまた参加させていただきます。会の性質上、仕方がないのですが、実践者の報告が少なく残念に思います。多くの実践者の苦悩、不安、かつとう、喜びなど取り上げていただくと、より深い研究の成果が得られるのではないのでしょうか。(一実践者として)いつもいいいな会の運営に感動しております。	男	40-49
他_4	大会、毎年いろんなところで開かれているのがよい。でも遠かったら行きにくいので、今まで京都大会しか行けていない(岡山はチャンスだったが行き逃してしまった)。ぜひ、阪神間でまた...	男	40-49
他_5	毎年参加したいと思いながら、他学会と日程が重なるため参加できていません。長年所属している自分の専門の学会はなるべく参加しておきたい思いが強く、このようなことになるのですが、他の会員はいかがなのでしょう?本学会は異なる分野の方が多と思うのですが、集まりやすい時期はないのでしょうか?	女	40-49
他_6	6月という時期がどうか。8月が比較的時間がとれるのですが。	男	50-
他_7	本学会は「子ども」の社会学なのか、「子ども社会」の学なのかという発足当初からの課題をさらに深めていてもらいたい。もちろん、どちらに終着させるということではなく、いわば緊張関係をもちつつ深めていてもらいたい(深めていきたい)と思っています。	男	50-
他_8	社会学が多く、もっと広い人材を用うべきである。	男	50-

専攻	自由記述	性	年齢
他_9	現状では、＜教育＞という面からの迫り方が多すぎて、子どものくらしの面からの迫り方が少なすぎと思っています。子どもも家族、子どもも住民という視点に徹底した子ども論を作る必要を痛感しています。本学会でその点での提起を正面からとりこんでくださると幸いです。	男	50-
他_10	もっと若い会員の実践的研究が欲しい。ポレミックな 이슈が課題研究でそろそろ進めて欲しい。教育現場と政策など、理論もしっかり押さえたい。	男	50-
他_11	新しい学会の自由度をもち続けてほしい。古くから他の学会の堅苦しさが出てこないように希望します。	女	50-
他_12	社会学的方法論にとられない、子ども社会に対する学際的なアプローチは、広くこれからもつづけていくべきだと思う。今少し、現場に係わる、学校現場だけではなく、実践研究、発表を広げ問題の共有化が計れるとよいと思っている。大会での発表の資料について、どこかできちんと保管され、出られなかった分科会の発表資料を後になっても入手できるような方法はないだろうか。	女	50-
他_13	学会には参加したいし、投稿もいつもしたいと思っているのですがままなりません。学会が現場を多方面からすいあげて現場実践の理論的支えになるように願うものです。この不安な中に育ってきた今20～30代の親子のおかれている現状、考え、それがもるにもちこまれる幼児教育から小学校の世界、現場の惨状は並のものではないと思っています。	女	50-